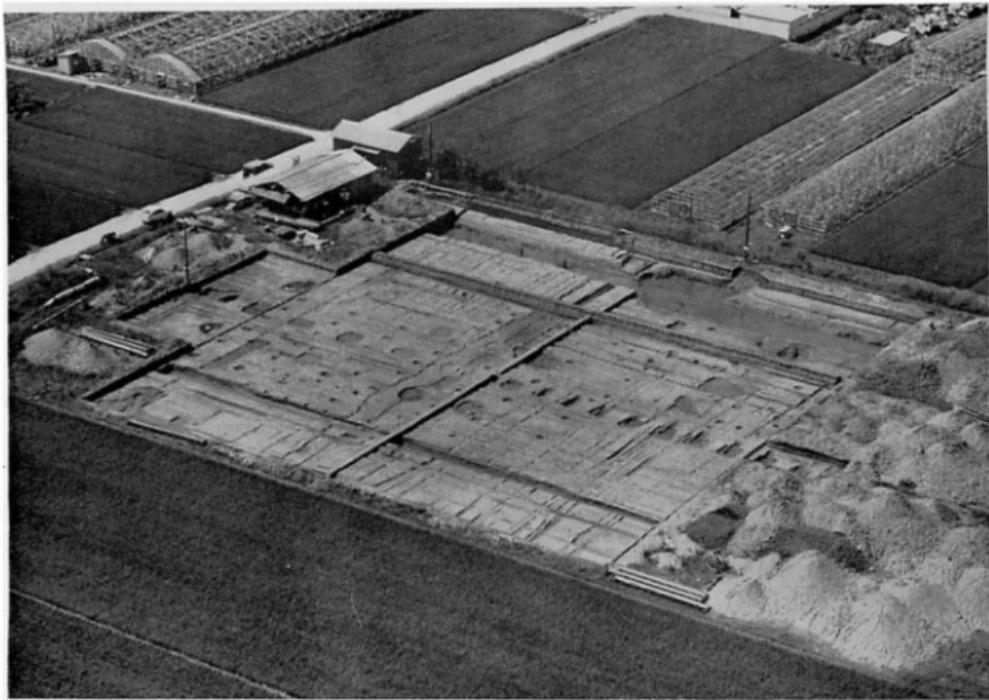


奈良国立文化財研究所年報

1976



奈良国立文化財研究所



7 藤原宮北面中門（上、南から） 大官大寺中門（下、北から）

卷之要陽甲矣

舊作豆赤石子

小物

九月廿六日尚清集大豆卅

大市有事

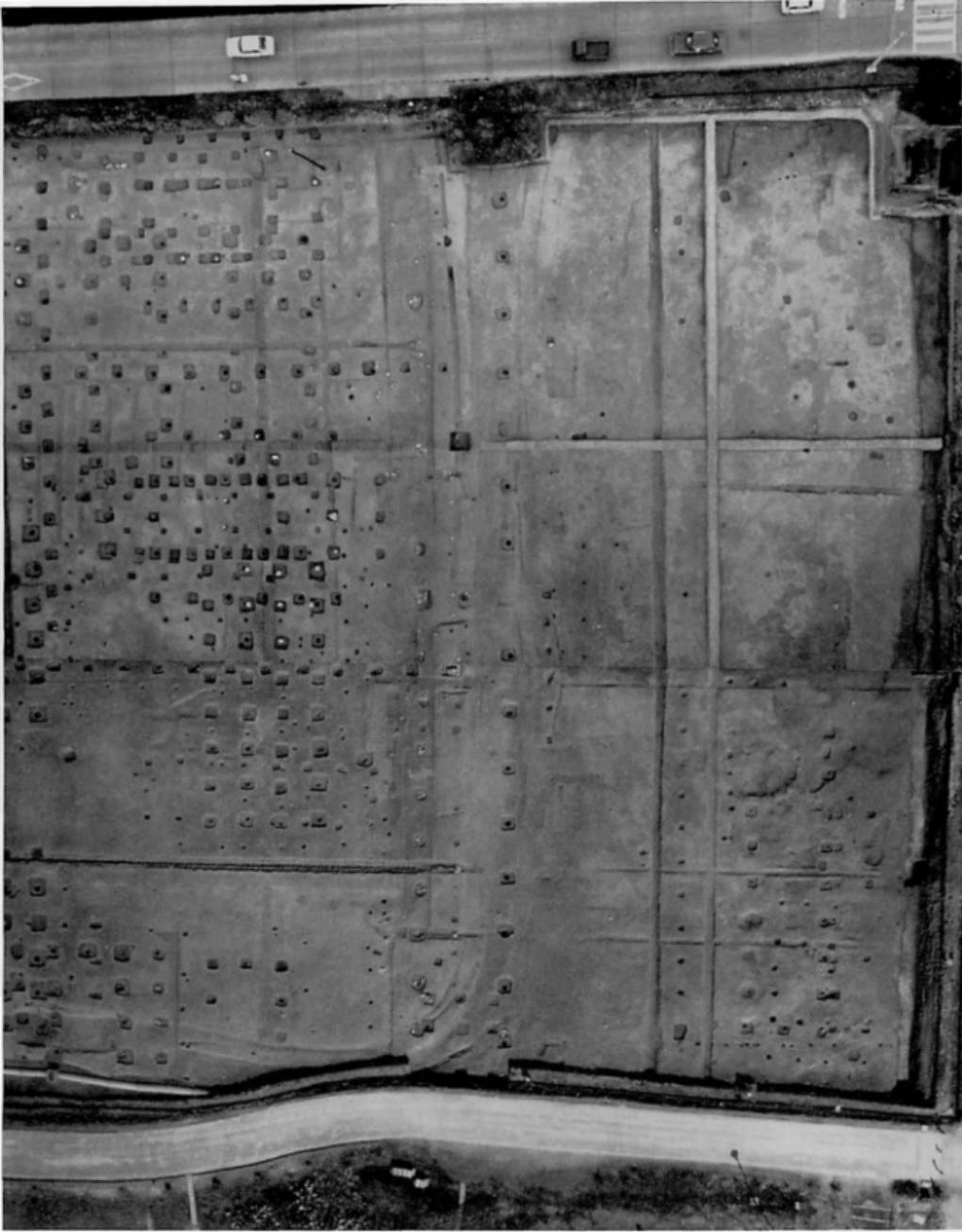
鑄鍛使門

四月四日人月工

三月廿日
首
日

召家奉

嚴散死
三慧
梁
博
日
月



5 平城宮跡推定第1次内裏東半遺構



1 平城京左京三条二坊庭園造構

目 次

口 絵	1 平城京左京三条二坊庭園遺構	5 平城宮跡推定第1次内裏東半遺構
	2 新薬師寺薬師如来像納入品	6 1975年度出土藤原宮木筒
	3 新薬師寺本堂内陣	7 藤原宮北面中門・大官大寺中門
	4 旧米谷家住宅	8 吉備媛王墓猿石の模型

はじめに	1
新薬師寺総合調査	2
1975年度木筒研究集会	11
伝統的建造物群の調査	12
異人館を中心とした神戸野・山本地区、五条の町並	
旧米谷家住宅の修理	16
平城宮跡と平城京跡の発掘調査	18
推定第1次内裏東半、左京八条三坊、左京三条二坊六坪、その他	
平城宮跡発見の殿堂雛形部材	36
平城宮跡の整備(6)	38
平城宮跡第3収蔵庫の建設	40
飛鳥・藤原宮跡の発掘調査	42
藤原宮北面中門、大官大寺中門、和田庵寺、その他	
1975年度発見の藤原宮木筒	51
藤原宮跡の整備(1)	53
和田庵寺出土鶴尾の復原修理	54
吉備媛王墓猿石の模型製作	56
遺跡判読のための空中写真的撮影条件について	58
埋蔵文化財発掘技術者研修の現状	60
大和条里の計測(続)	61
在外研修成果報告ードイツと北欧をめぐる一	62
公開講演会要旨	63
調査研究彙報	64
奈良国立文化財研究所要項	69

奈良国立文化財研究所年報 1976

発行日 1976年11月6日 編集・発行 奈良国立文化財研究所 担当 司田章 加藤優 印刷 共同精版印刷株式会社

はじめに

1975年度の年次報告として、当研究所の研究調査活動等の概要をここに公表する。

この年度において、平城宮跡発掘調査部は相当の精力を平城京各地の緊急調査にそそぐ結果となつたが、1975年末には左京三条二坊の発掘で8世紀のほぼ完全な園池を発見するという画期的な事があった。飛鳥藤原宮跡発掘調査部では藤原宮北面中門の跡を確認、多量の木簡を発見する等の成果をあげ、また藤原京条坊の姿も漸く明らかになりつつある。

美術工芸・建造物・歴史の各研究室では、専門を同じくする所員が一体となり、社寺や民家等の共同調査を精力的に進めた。

飛鳥資料館は開館以来1年余を経過し、観覧者は10万人を超え、相当の評価を得ている。発足2年目を迎えた埋蔵文化財センターは、部制の設置・遺物処理研究室の新設があり、研修課程も増加し、各地方公共団体への指導も充実しつつある。

平城宮跡の整備も一段と進み、また新たに第3収蔵庫が完成し、収蔵施設が増加したほか、遺物の整理や保存処理のための施設が整い、また発掘作業員の控室を設けることができた。

このほか、学報等の刊行も漸く軌道にのるなど、当所の事業は一応順調に進んでいるが、事業量に比し人員や施設設備の充実が急務であり、各方面的暖い御支援を願ってやまない。

1976年9月

奈良国立文化財研究所長

小川修三

新薬師寺総合調査

美術工芸研究室・歴史研究室・建造物研究室

新薬師寺は天平19年(747)に聖武天皇の病氣平定を祈って光明皇后が建立されたといい(東大寺要記), 一説に天平17年(統日本紀)とも伝えられている。本寺の本尊木造薬師如来坐像, 本堂については制作年代等についての定説がなく, 本格的調査も行われていなかった。こうしたことから本尊については1975年12月, 文化庁美術工芸課, 奈良国立博物館および当研究所美術工芸研究室の手で調査が行われた。その際本尊像の像内から発見された納入経は歴史研究室が調査を担当することとなり, これと並行して本尊像と密接な関連が予想される本堂の調査も建造物研究室によって行われた。今回の調査は各部門とも今迄になく詳細かつ本格的なものであって, その結果は不明の点の多かった新薬師寺の歴史, 文化財について解明するところも少なくないと考えられる。なお, 建造物研究室では本堂とともに地蔵堂等の調査も行っており, あわせて報告する(口論2, 3)。

1 木造薬師如来坐像

今回の調査は修理調査が主目的であり, 2mに近い巨像を台座から下す大がかりなものとなつた。坐像の構造や技法については, 1975年6月に奈良国立博物館と協同で行った予備調査の結果がほぼ裏付けされた。

像は蝶髪を植付け, 耳朧理状, 三道を彫出し, 身には大衣を偏袒右肩にまとい, 各屈臂して左手を膝上に置き, 手首をわざかに内側に向け, 掌を仰いで第2・3・4指を軽くまげて薬壺をとり, 右手は前方に出し手首をやや外に傾け第3指をわざかにまげて掌を開いて立て, 左足を外に結跏趺坐する。材質は榎材, 頭体根幹部は両手上膊内側部, 脚部正面の一部までを含めて一材から形成。後頭部と背面に分けてそれぞれ内削を施し, 像のはば中央に龍められた木芯の部分を取り去り, 後頭部は植付けた蝶髪の下に横長の蓋板を, 体部は腰下から地付に至る長方形の背板を当てている。なお頭頂の部分と頭体の内削の境の部分(頭部), 即ち木芯が取除かれなかった部分は後世に何らかの衝撃をうけたためか欠失し, 現状では, 内削が地付から頭頂まで貫通し, 頭頂には銅版(後補)を当てて蓋をしている。この根幹材に左袖外側部, 右手上膊外側部に各別材を矧付け, 左手首, 右手肘付近をさらに矧付けている。両脚部は10數材の胚木を上体の木目に合わせるように揃えて体部材を組入れるように矧付けている。裳先は後補。

光背は二重円相光。頭光は中心に蓮花八葉(十一方二邊切付), その外に放射光をあらわし, 二重の紐でくくった連珠文帯の覆輪をめぐらし, 外圓は四花と宝相華蔓文を配し, 外縁に覆輪(内四分に花弁模を加えたもの)をめぐらす。身光は内圓無文, 外圓は光脚先端から伸びた宝相華蔓草と荷葉を配し, 頭光と同様にそれぞれ覆輪をめぐらす。頭・身光共外縁左右に化仏を付す(頭光分2軸・後補, 身光分4軸)。化仏はそれぞれ本尊像と同形で, 光背は二重円相光(周縁部欠失), 台座は荷葉座で, 下方から伸びた宝相華の茎上にのる。周縁部は宝相華葉及び火焰をめぐ

らし、頂上に火焔付の宝珠を付す。

光脚は五頭形荷葉、下辺に蓮弁を並べた受座を付す。以上光背は松材製、漆箔（後補）。二重円相、周縁部光脚など主要部は概3材矧で、化仏の光背もこれらの材から彫出している。これに頂上の宝珠、火焔、化仏を受ける宝相華等を矧足し、以上を光脚の受座に嵌込み、台座上に固定し、台座上框から立てる八角の支柱で支えている。化

第1図 薬師如来像、像底の組合図

仏はいざれも松材・漆箔、右中段像のみ背面を行っているが他は荷葉座までを含み丸形とし、膝頭や荷葉の一部などを矧足している。各像は背面に打たれた鉄又は鋼の環3個で光背に付するL字型金具にかける。

台座は宣字形袞懸座。上幅正面及び左右前半に雲を垂らし、受花（腹か）、腰部は四隅に柱を立て、その間に鏡板を当て、柱を挟んで鏡板を当て鏡板を格狭間形に残す。反花（腹弁）下框（方形）2段からなる。いざれも松材製で、上幅は四方矧寄、中央部は5枚の横材を張る。受花、反花、下框第1段、同第2段はいざれも四方矧寄、腰部は柱、格狭間形鏡板各一材製。この内側に4本の補強柱と各2枚の化粧束を立て、その間に横材の鏡板（前後及び右側分各1材、左側分2材）を当てる。垂糸は前面綾4材矧、両側分2材矧（前方横材、後方横材）、なお台座内部に松材の補強架構（後補）がある。垂糸は漆箔（後補）。腰部の柱、化粧束を古色とする他、素地のまます。

今回の調査で特に注目されたのは本体の木骨である。この像は従来からはほぼ全容を松の一材から彫出したものといわれていたが、予備調査の際に、筋材であること、両脚部に不整の矧材のあること、内側が施され背板を当てていること、両手が矧付けであることなどが確認され。その後、像を移動した結果、前述のような詳細が判明した。一本といわれていたのは、両脚部や右腕の矧材にいざれも筋材を使用し、あたかも一材から彫出したように木目を意識的に描えて組合せていたためである。この像の場合、このような構造から推定すると、元米全容を一本から彫出するのが目的であったが、像高191.5cm、膝張154.0cmに及ぶ像を彫出する原材が得られなかつたため両脚部等を矧足したものと考えられる。飛鳥時代の木彫像が構造や技法の面から金銅像をそのまま木彫に移した感があるのに対し、本像の場合は木彫としての意識を十分に認めることができる。しかも像のはば中心部を通る木芯を取除いて内側を施すのは、木材の保存上の性質を作者が理解していたためであろう。

次に様式的な特色である。幅と奥行を十分にとった頭・体部に眼鼻立ちをはっきりと刻んで、

測 点	法 量
本体像高	191.5cm
脛際一頭	38.3
面 幅	39.2
耳 垂	51.7
面 奥	51.3
肘 垂	152.2
胸 厚	61.5
腹 厚	75.0
膝 垂	154.0
膝 奥	126.1
膝 高 各	31.2
光背罫高	319.5
最 大 垂	262.5
化仏全高	43.4~49.0
台座通高	104.5

第1表
薬師如来像法量

特にまぶたの輪郭や衣の縁などは鋭角に喰込むように刻んである。頬や胸などは肉を十分残しきれもはっきりと深くあらわし、見事な刀の冴えが感じられる。こうした特色は唐招提寺に伝わる木彫群(天平時代後半)との関連も想起されるが、むしろ中国唐時代の彌勒菩薩が様式上からも技法面からも基となっているのではないかと想像される。なお光背の意匠は独特のものであるが、強いて類例を求めるに京都勝持寺藥師如来坐像(像高9.1cm)があげられる。この像は桧材の丸彫(光背、台座も共彫)で、いわゆる植彫形刻と呼ばれており、本体の表現にも共通点が認められる。

新薬師寺の本尊像は様式的に本寺が再興された延暦12年(793)頃の制作と考えられているが確たる証拠はなく、むしろ今回の調査で判明した構成や技法、或は本堂との因果関係などから今後の研究によってその位置づけがなされるであろう。

なお、後述の納入品は像内内側部、像底から約30cm高の位置に前後に渡された2本の棟(後棟)の上に置かれた杉箱に納められていたもので、このうち法華經8巻は本像と相前後する頃のものと認められるが、像内の内側の状態や納入情況から、当初の納入品であるか、追納入であるかは断定し難い。

(田中義泰)

2 薬師如来像内納入品

像内より発見された納入品は法華經(8巻)、手錫杖(1柄)、法螺貝(1口)、納入品奉籠箱(1合、今回取出されたのは蓋のみ)、明治年間納入願文等である。ここでは紙数の都合上、法華經ならびに納入品奉籠箱についてのみ述べることにする。

法華經 8巻 卷子本、料紙黄殻紙、墨界線、原表紙(招麻紙)、原軸(黒漆朱田棒軸)、1行17字、白点(仮名、ヲコト点)、綱27.5cm

本文・外題ともに全8巻すべて同筆で、1人の手により書写されたものである。その書法を見ると、奈良時代後期の写経に通ずるもののが認められる一方で、それが崩れ筆者自身の筆跡が顯著に現れた個所が各所に入り交っている。これは写経に際して利用した藍本の書法に強く影響されながらも、時に個性が表に出て来たことによるものであろう。筆者の個性が現れた個所の書法には平安時代初期のものに一脈相通するところも認められる。したがって、奥書ではなく正確な書写年代は不明であるが、本經の書写は奈良時代末期乃至平安時代極初期(8世紀末乃至9世紀初頭)頃と推定しうる。なお書法の統一性に欠けることにより、この筆者は写経生のように写経に慣れた人ではなく、したがって写経所で書写された経ではないであろう。

8巻全体にわたって白点(仮名、ヲコト点)が付せられており、またその白点の上に重ねて朱点が打たれている。白点・朱点の剥落状況より、白点が先で朱点は後と見られる。朱点の打ち方は疏であり、文章の大きな段落を示すために付けられたものである。このヲコト点は

現在知られているワコト点の系統とは大きく異なっており、特殊点と呼ばれているものの部類に属する。また星点（・）が主で、それ以外の線点（I, -等）の種類は極めて少く、また星点の形も乱雑で細長く、線点との区別が紛らわしい形のものも少くない。これらの現象はワコト点発達史上極初期のものに多く見られるところである。また仮名字体は万葉仮名本位で、漢字の画の一一部を省略して作られた省画体仮名が少い。さらにその字形は大形で、後世の漢文の振仮名・送仮名のような小字ではなく、本文の漢字に匹敵する程の大字のものも数多く見られることが注目される。

現在、加点年代を明らかにしうる最古の調点資料は『成実論』天長5年(828)点(聖説藏・東大寺)である。

この天長5年点は西墓点・仁都波迦点系の第一群点に属し、星点の他に線点も多種類用いられ、ワコト点としてはかなり整備されたものとなっている。またその仮名字体も万葉仮名は少く、省画体仮名本位となっており、その字形も小さくなっている。

このように、この法華経と成実論の白点を比較してみると大きな相違点があり、この法華経古点は『成実論』天長5年点よりも古体を示している。したがって法華経古点の加点年代は天長5年よりも遅ることが推測される。しかし現在では天長5年以前の加点年代を明示する資料としては、延暦年間に句切点・返点を加点したことが知られるものがあるのみで、ワコト点・仮名については明確に年代を示すものは存在しない。したがって国語学上はこの法華経古点は弘仁年間を降らない平安時代極初期頃の加点ということができるに過ぎない。しかしその時期は書風による書写の時期と大きく隔たるものではなく、加点は書写後間もない頃と考えられよう。

朱点の加点年代は未詳であるが、その朱はやや褐色を帯びていることにより、平安時代初期乃至はそれに近い頃といえる。その打ち方より、文章の大きな段落を示すために白点の補助として用いられたと考えられ、白点とはほぼ同時であったとして差支えなかろう。

第2回 法華経部分

後述の奉籠箱蓋銘によれば、本經は元禄11年(1698)7月、本尊修理の際に細字法華經・金剛般若經・薬師本願經とともに像内より発見されたもので、本法華經のみが再度像内に納められたため今に存することができた。この法華經の納入時期については本尊造立当時またはそれより後の成時期の二つの考え方があり立つ。しかし本經発見時には表紙は埃による若干の汚れはあったが、手擦れによる汚れは認められなかった。これは書写加点より納入までの期間があまり長くなかったことを示すものである。また像内納入經の現存例を見る限りでは、願主もしくは関係者が自身で書写するかまたは新刻せしめた写經・版經、もしくはとくに関係の深い本、或は二親・先師と因縁の濃い本を納入するのが通例である。したがって本法華經も、かなり後代になってからたまたま手元にある經を奉納したとするよりは、薬師如來像造立直後に納入されたと考える方が妥当なのではなかろうか。本像造立が一般に推定されているように延暦12年(793)頃とするならば、本經の書写ならびに加点はそれをやや薄る頃と推定される。

奈良～平安時代初期頃書写の法華經は数多く現存しているが、当初のままの姿で1部8巻具備して伝存している例は極めて稀で、その点でも注目すべきものである。またもしその納入時期が造立当初とすれば、本經白点の加点年代もかなり限定され、国語史資料としても極めて貴重なものとなる。また像内への仏舍利・經典・願文納入の現存例としては最古のものとして大きな問題を投げかける。なお白点については篠島裕・小林芳規氏の御教示によった。ここに記してあつく御礼申し上げる。

納入品奉籠箱蓋 1口 杉材、覆蓋造、横38.5cm、横22.4cm、高さ4.5cm

蓋内面には右掲のよう
うな墨書銘が記されて
いる。材色より見て元
禄12年に新材をもって
作ったものではなく、
古材を利用したものと
見られる。この銘文
と、元禄13年7月にか
の有名な護持院隆光に
よって作られた『新薬
師寺縁起』とによって
元禄年間の修理の状況
を知ることができる。

(田中 慎)

(蓋裏墨書銘)
于時元禄十二年秋七月前持軍桐吉公母堂桂昌院殿
蒙本尊修業之跡取去後座本尊御腹内奉納御經宣
法華經細字全譜一卷金剛般若經一卷藥師本願經一卷
右三通爲後驗令感得滅度又法華經細字全譜八卷如意右奉
納舉是經御腹内有之經也其外藥師經理趣經并
如意宝一形内佛舍利二形法ラ奉納
于時元禄十二年四月佛生日
傳子舜清白啟

第3回 奉籠箱蓋墨書

3 本堂 付地蔵堂

現在の新薬師寺は春日山麓の西と南に開けた低い丘陵の末端上に立地する。天平勝宝8歳(756)の「東大寺山房四至圖」には東大寺法華堂の真南に当るところに「新薬師寺堂」が描かれている。これが七仏薬師像を本尊としてまつった創建当初の金堂とすれば、現寺地よりも西方にあり、現在の本薬師町あたりに推定される。

現在の本堂の建立年代は様式上、天平時代の建立と認められているが、その由緒は明らかでない。応和2年(962)の大風で金堂が倒れるまでは、本堂と金堂は共存していたようである。応和の災害以後、金堂を再建したかどうかは明らかでないが、平安時代末頃には現本堂が寺院の中心となっていたと考えられる。現在の寺地が当初から寺域に含まれていたとすれば、その東北隅にあたる位置にあり、創建伽藍とは別個の別院的な存在であったと思われる。

現在、境内には本堂(国宝)を中心として、その前方東に鐘楼(重文)、西に地蔵堂(重文)があり、本堂の正面に南門(重文)、東に東門(重文)を開く。これらの建物の建設年代は、本堂は天平時代末期、東門は鎌倉時代初頭を降らず、鐘楼は鎌倉時代初期、南門は鎌倉時代末期と推定され、地蔵堂は柿本墨書館により文永3年(1266)と確定した。このように、鎌倉時代を通して現在の寺地は整備されたようであるが、『奈良坊目拙解』(享保20年・1735)、『大和名所図会』(寛政3年・1791)、寺藏古図(明治2年)によると江戸時代にはこれらの建物のほか釈迦堂、大日堂などの小堂があった。現在の地蔵堂はもと鐘楼の西に近接して建っていた西正面の建物で、現在の地蔵堂あたりには釈迦堂、南門外の東側に大日堂(明治2年古図には地蔵堂と記す)があり、明治前半期に釈迦堂、大日堂を焼いて地蔵堂を現在地に移していることが判明した。

以下は調査した各建物のうち、本堂と特に新しい知見を得た地蔵堂について述べる。

本堂 入母屋造、木瓦葺で、基壇上に建ち、内部は土間、天井は化粧屋根裏である。内陣中央の円形須弥壇に本尊木造薬師如来坐像と、その脇りに十二神将立像をまつっている。

建立後の経過については古材を分類すると、平安時代中頃に柱の取替えに及ぶ修理があり、更に平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて、軸部、組物、構架等の全般にわたる大修理が認められる。鎌倉時代初期頃には内陣に天井を張っている。『新薬師寺縁起』によると延慶3年(1310)には正面に礼堂を設けている(天井と礼堂はともに明治作修理に際して撤去された)。また、彫虹梁や肘木等に松材を用いた中世材があり、後世の大修理も再三にわたって行われている。元禄12年(1699)の本尊木造薬師如来坐像の修理に際して、本堂にも修理を加えたと思われるが明らかでない。内陣正面の柱はこの頃のものと考えられる。柱に残る痕跡や古図等によると、側面や背面の庇の隨所に間仕切や中二階を設けており、參籠等にあてられていた。

明治30年6月古社寺保存法が制定されると、同年12月に特別保護建造物に指定され、この間に解体修理が行われて、建立当初の姿に復原された。

平面規模は母屋が桁行5間、梁間3間であり、周囲に庇をめぐらす。柱間寸法は桁行中の間4.772m(天平尺16尺)で特に広く、その他は桁行、梁間ともに2.983m(天平尺10尺)である。

第4図 修 理 前 の 本 堂

第6図 本 堂 断 面 図

基壇は花崗岩塊上積で、正面3間、両側面中央1間に石階を設けている。この基壇は延慶3年に礼堂を取付けた際のものと考えられ、明治修理に際して礼堂を撤去したために正面基壇を縮めて整備されている。

柱は丸柱で、柱頭に丸味を付け、柱径は上下の差がなく膨らみはない。柱頭には頭貫を通して、側柱、入側柱とも大斗肘木を置き、柱間に間斗束を立てて断面円形の帎を受ける。側柱の大斗肘木には槧虹梁をかみ合わせて入側柱とつなぎ、内部は中央に4通りの大虹梁を架げている。肘木と虹梁は相欠きに組合わせて大斗に切込んで納める。

妻飾りは豕又首、内部大虹梁の上は合掌を組み、入側桁と棟木の中間に母屋桁を通している。

第5図 現在の本堂

妻の豕又首は側面の入側柱に直接又首束と又首掉を立てる。軒は二軒搭垂木で、1支1尺に割付けている。地垂木には断面円形の当初材を残すが、飛擔の角垂木はすべて中世以降の後補材である。

屋瓦は鳩羽瓦に興福寺の鎌倉再建食堂と同形式の軒先瓦が多く残り、また大陣の西鬼瓦と降棟の2つの鬼瓦は興福寺北門堂（承元4年・1210）と同形式とみとめられる。

第7図 本堂平面図

柱間装置は正面中央3間、背面中の間、両側面中の間を扉口とし、他は土壁とする。扉口には内法長押を打ち、地覆、方立、組、辺付、唐戸敷を組み、小脇壁は土壁とし、板扉を内開きに組込む。辺付に大きく唐戸面を取るのは珍らしい。東側の扉板は当初のもので、珍らしい工法のものである。

この本堂の各部の形式、手法をみると、造営尺や虹梁の形式、桁や垂木の断面が円形で、柱天の丸味の大きいこと等は天平時代の手法をよく表わしている。しかし、肘木と大斗の納まりや、扉口辺付の唐戸面等に新しい手法が用いられ、地垂木勾配もやや緩くなり、これらの特色

を総合すると天平時代の末を中心とする頃に、その建立年代を推定することができよう。また正面中央間を特に広く取り、母屋の梁間を3間としていることは、仏像の安置と密接な関係が考えられ、当初から仏堂であったことは疑いなく、簡素な古代仏堂の好例と云えよう。今回の調査によってこの堂の性格と沿革を一層明らかにすることが出来た。

地蔵堂 衍行1間、梁間1間、入母屋造、本瓦葺、妻入の小堂である。建立年代は、慶長15年(1610)修理時の棟木の墨書きに文永3年(1266)とあって、様式上も同年の建築と認められる。

軸部は円柱、側背面三方に腰長押、四方内外に内法長押を打ち、柱上頭貫に大仏様木鼻を付ける。四方に後補の飛貫を通して、側面は垂込める。正面は連子欄間下を格子戸引違いとし、他の三方は土壁とする。組物は平三斗組、中備えは正側面が本蘇殿で、背面は回斗束である。軒は二軒で地垂木を繁垂木とし、飛檐垂木は地垂木1本あきの疊垂木で、中央のみ吹寄せとする。屋根は入母屋造の本瓦葺で、妻飾は茅又首である。

軸部、軒、小屋、妻飾りとともに当初部材をよく残すが、後世の改変も著しい。

正面の連子欄間は当初の扉構えの組と三方幣軸を利用したもので、上幣軸には扉の軸釣金具当りがあり、下幣軸の外側に沿って大面取の方立柱仕口がある。また両側面でも内法長押下面に正面とはほぼ同寸の幣軸痕跡があり、三方が扉であったことが分る。また、柱には四方に手長押痕跡と縁をめぐらせた跡があり、堂内は床張りであったことがわかる。

軒は当初の隅木によると、飛檐も繁垂木で、現状の軒の出は地垂木、飛檐垂木とともに一支ずつ切り縮められている。

小屋構造は隅木に四天束を立てて又首台を受け、又首台両端に母屋桁を架け渡し、棟木は承又首上の斗で受けている。化粧溝本尻は現在側面に架けた井桁状の梁で支えられているが、もとは中央で4本組合わせて柱で止めていた仕口が残る。棟木は慶長修理の取替え材で、棟束、結木も後補である。

建立後のかなり早い時期に背面に鴨居を入れて引分戸とし、軒の出を縮小して両側面の扉口を壁に改めたと思われる。更にのち、四方に飛貫を入れ、床、縁を撤去し、正面の幣軸を切って鴨居を入れ、上に盲連子を嵌め入んでいる。この時期も明らかでないが、慶長修理の頃と思われる。方1間の小堂であるが、当初から本瓦葺であったようで、三方を扉口とする独特の形式であり、建立年代及び後世の修理の状況も明らかになった。鎌倉時代中期の特異な遺構と認められ、細部、手法もすぐれている。

第6図 地蔵堂復原立面図

(岡田英男・宮本長二郎)

1975年度木簡研究集会

歴史研究室

木簡研究集会は、1976年1月13・14日の両日にわたって、平城宮跡発掘調査部資料館会議室において、日本史・考古学・東洋史の関係諸分野から41名の研究者の参加を得て開催された。この研究集会は、1961年の平城宮跡における木簡出土以来、全国各地の遺跡から木簡の出土が相次いでいる現況にかんがみ、関係諸分野の協力に基づく、木簡の基本的・総合的な研究を目的としたものである。

第1日目は、全国各地における木簡出土の現況を明らかにするため、飛鳥地方遺跡（報告者網干善教）、藤原宮跡（和田翠・鬼頭清明）、平城宮跡（横田拓実）、多賀城跡（平川南）、大宰府跡（倉住清彦）、伊場遺跡（東野治之）などの木簡出土の主要遺跡からの報告、ならびに正倉院の伝世木簡の報告（柳唯太郎）がなされた。各遺跡の出土木簡については、木簡の出土状況の概要、木簡の内容、木簡と遺跡・遺構との関係などの問題を中心として報告され、正倉院の木簡については、新史料を含め木簡の内容の紹介、伝来過程について報告された。

第2日目は、木簡の諸問題に関する3つの報告があり、その後、質疑討論が行われた。

大庭脩報告「中国出土の簡牘について」は、中国簡牘について、その発見の経過、簡牘の形態と名称、研究史、今後の研究課題についての報告である。

狩野久報告「木簡の形態・用途について」は、考課関係木簡、帳簿様木簡など木簡の種々の形態の問題、また用途については、宮内における門通行のための通行証的な性格の木簡、大浪申請の際の紙の文書と木簡の使いわけの問題などを通して、紙の文書に対する木簡の、木の材質を生かした独自の使い方を明らかにしたものである。

岸俊男報告「木簡研究の課題」では、木簡の出土・発掘調査に関する問題点、保存処理上の問題点、また形態・用途の問題について、日本における冊書の存否、また書籍書写の際の紙と木簡の使いわけの問題、更に、日・中簡の比較による日本の木簡使用の開始時期の問題などが報告された。

質疑討論は、日本における木簡使用の開始の時期、木簡と紙の文書との関係の2点を中心に行われた。木簡使用の開始時期については、日・中簡の付札の形状の異同、簡の材質（竹か木か）、中国における簡牘使用の終末時期の問題などから論じられた。木簡と紙の文書の関係については、紙の文書に対する木簡の独自の機能という見解に対して、賛否の意見が寄せられた。

今回の研究集会は初めての試みもあり、また問題の性質上簡単に結論は出ず、残された課題は多いが、関係諸分野の研究者が一堂に会し、实物に即して、これまであまり考えられなかった木簡に関する基礎的な問題について討議した意義は大きく、今後の木簡研究の進展が期待される。なお、今回は主として歴史学的見地に限られたが、今後なお問題を広げて続行する予定である。また、1976年度において、『木簡研究集会記録』を作成した。

伝統的建造物群の調査

建造物研究室

1 異人館を中心とした神戸北野・山本地区

1975年度に、神戸市に協力し、同市生田区北野町・山本通一帯の異人館をはじめとする都市住宅群について、伝統的建造物群としての保存に関する基礎調査を実施した。

1868年1月1日、兵庫開港以来、北野町・山本通など六甲山系を背に負う山手は住宅地として開発され、多くの外国人住宅が建設された。これらの住宅は異人館・西洋館などと愛称される洋風住宅であり、外国人ばかりでなく、明治末以降日本人の住宅にも影響を及ぼした。

この地区も他と同様、第2次世界大戦による戦災を大きく受けたが、それでも昭和30年代までは、洋風住宅が数多く、またこれらをとりかこむ樹木の緑も多く、異国情緒が豊かで良好な住環境をつくっていた。しかし、都心から至近距離に立地するという条件に恵まれているため、経済の高度成長とともに、昭和40年代には風俗営業のホテル、マンションが乱立し、特色的ある伝統的な住環境が著しく破壊されだした。

調査内容の概略は次のとおりである。

- 1 北野町・山本通一帯の約45haについて建築の現況の把握。
- 2 敷地と道路関係、および樹木、垣・門など住環境を構成している要素の把握。
- 3 写真測量を応用した各種実測図の作成、および略測による実測図の作成。
- 4 調査地区の主要建築約150棟について調書の作成、および記録としての写真撮影。

調査の結果、調査地区内では住宅以外の建築が増えてきたが、以前は住宅が大部分をしめ、他にわずかの宗教建築があった。現在、全件数のうち第2次世界大戦以前の洋館は10%（約100件）、和風住宅・民家が20%，宗教建築が1%であり、これらがこの地区的伝統的な建造物群をつくっている。しかし、最近では伝統的な形式でない建築が多くなってきている。木造モルタル仕上げの住宅がほぼ半数、マンションなど鉄筋コンクリート造の中層共同住宅その他が20%ほどあり、これらは数・量ともに洋館・和風住宅を圧倒している。しかし、洋館の数は少いが敷地や建

A 明治・大正・昭和前期（様式建築）		B 昭和後期（非様式建築）	
洋館 I類（明治～大正初、異人館）	和風住宅 I類（大正）	I類（明治末～大正）	低層住宅 洋館Ⅱ類（戦後の洋館）
II類（大正）	II類（明治末～大正）	II類（明治～洋館部を付属する和風住宅）	民家Ⅲ類（木造モルタル仕上げの住宅ほか）
III類（明治～大正）	III類（昭和前期）	III類（明治～中小規模和風住宅）	
民家 I類（～明治、農家）		中層共同住宅（鉄筋コンクリート造）	
II類（町家、町家風住宅）		その他	

第1表 北野・山本地区住宅の分類

第14図 北野・山本地区の洋館 1・2Ⅰ類，3Ⅰ'類，4Ⅱ類，5Ⅲ類

伝統的建造物群の調査

物の規模が比較的大きく、デザインが優れ、色彩が鮮かであるので目立った存在となっている。いっぽう洋館とともに、和風住宅もこの地区の良好な住環境と景観をつくる重要な建築である。

この地区的住宅建築は復原的に第1表のように分類できる。この分類によって、建築の特徴とその変遷をより明確に把握できる。

主屋やこれに付属する台所などのほか、道路と敷地の境界近くにたつ門、煉瓦扉・モルタル仕上げの扉、木造の扉、鐵柵もこの地域の環境形成にとって重視すべきものである。また、急斜面を切盛して造成した敷地では石垣を高く積み、広い道路に面するものは、地下に車庫をつくることが多く、正面にベジメントをつけたものがしばしば見受けられ、この地区的特徴となっている。また、建物とともにこの環境を良好にしているのは、比較的敷地の広い家が多く、樹木に恵まれていること、六甲山系の山を背に負い、前方に広く海と港を臨むことができ展望が優れていることなどによる。

今回の調査地区は、近代都市の都心近くに位置する点に最大の特色がある。その保存にあたっては、まずこれまで1世紀にわたって蓄積されてきた優れた都市の遺産を受けついでいくことであり、神戸らしい町づくりをねねに指向する必要があり、住宅地としての環境整備も考えられなければならない。地区保存の一方法として、比較的広い範囲を対象地区にとりいれ、法規制はゆるいものにし、その地区内にある特に重要な遺産については積極的な保存の措置を講ずることから徐々に進めることが考えられる。また、住宅等の新築・改築にあたっては、行政的にデザインに関する相談や指導が行われる道を開いておくことも望まれる。なお、神戸市教育委員会『異人館のあるまち神戸』(1976年3月)に調査の概要をまとめた。

(宮沢智士)

2 五条の町並

奈良県五条市は1975年度の国庫補助金を受けて町並調査を行い、建造物研究室と奈良県文化財保存課が共同で調査を実施した。

調査地区は旧五条町と新町および二見の一部にかかる東西約1km程の旧街道筋で、町の南側は吉野川に面し、吉野川に流入する3本の小河川が町筋を横断している。

調査地区内の全戸数は176戸・135棟で、このうち戦後に改築を受けた9棟、および未調査2棟を除く、124棟についてはすべて調査した。

調査内容は町並全体については建物配置と屋根伏図を作成し、町並立面図は五条1丁目、本

第2図 五条町並立面図(1)

町2丁目の延長約500mの写真測量を行い、その他の部分は軒高・庇高を実測して立面図作成に備えた。また、町家の種別分布図として、年代別・構造別・階層別・用途別分布図を作成し都市施設の位置を地図におとした。さらに、道路の幅員や高低差の実測もあわせて行った。

124棟の町家については、現状平面図・配置図・正面細部の分類等に関する調書をとり、痕跡や旧状間取りによる復原調査を行った。そのほか、6棟については断面図を作成し、5棟については正面柱間配置詳細図を作成した。

五条の町並について特記すべきことは、建設年代の古い民家がとくに多いことであろう。年代の明らかな日本最古の民家である栗山正一家（1607年、棟札）をはじめとして、江戸中期（17・18世紀）の町屋は22棟を数え、これらを含めて調査棟数の64%にあたる79棟が江戸時代の建物と推定される。さらに明治時代の家が23棟あり、両者を合わせると全体の80%以上を占める家が伝統様式を保っている。これら伝統様式の建物はすべて平入りで、瓦葺きの大屋根と庇屋根が軒先を連ね、低いつし二階壁面は大壁としている。庇前面は現状では殆んど改造されているが、復原するとシトミ・スリアゲ^{ヨコ}となり、幕末・明治頃に格子に改造されている家が多い。

間取りは通り庭形式で母屋に前後2室とののが原則で、さらに部屋を背面にとってツノヤとする例が多い。これは一般的に敷地の間口が狭く、上屋梁間が限定されたためであろう。間口は2間台から8間半まであるが、6間台以下が80%をしめる。また梁間は殆んど4間以下である。

間取は桁行に1列と2列の2通りがあり、これにツノ座敷を加えて、部屋数を2室から5室とするのが普通である。しかし、とくに大きい2棟では6室にしている。このほか、大型の家に小型の家をつけた子持長屋（4棟）、二間取の二軒長屋（23棟）、三軒長屋（2棟）などの長屋がある。とくに新町1丁目の吉野川に面した南側の町並では、13棟の2軒長屋が集中して、特徴的である。これに対し、街道東寄りの五条・本町2丁目では大型の家が多いことが目立っている。

現状の町並は吉野川の氾濫による度々の被害をこうむり、屋内や正面が改造されている家が多いけれども、江戸時代の伝統様式を伝える建物の木体は極めて良く残存する。とくに江戸時代中期に建築された建物が多く残っているのは、全国的にみても類例がなく歴史的価値は極めて高いといえよう。しかし、古い家が空家のまま放置されたり、取壇して新築する家も出はじめており、町並保存の対策を早急に進めなければならない。調査の概要は、五条市教育委員会『奈良県五条の町並』（1976年3月）にまとめた。

（宮本長二郎）

旧米谷家住宅の修理

建造物研究室

国（文部省）所有の重要文化財旧米谷家の修理工事は、1974・75年度の2ヶ年にわたって行い、今回その工を竣えた。工事は当研究所が文化庁より支出委任をうけ、一括請負工事とし、解体にともなう諸調査と工事監理とは建造物研究室が主としてこれにあたった。

福原市今井町は中世以来の伝統をもつ古い町で、先に指定・修理された今西家住宅（慶安3年・1650）はじめ、江戸時代各期にわたる民家がよく残っており、いわゆる伝統的建物群として全国的にみてもその価値は非常に高い。旧米谷家住宅はその中にあって18世紀中頃の上級商家の様相を保ち、町並景観を形成する一要素をなしている。

米谷家は代々「米忠」の名で肥料や金物をあつかっていた商家である。いつから現地に住みついたか明らかでないが、江戸末から明治にかけての5代目忠五郎代に最も繁栄していたらしく、主屋の改造、土蔵の新築をはじめ、東隣や向側を付属屋とするなど大規模な普請をこのときに行っている。1956年家屋が税の代納対象になり、その後家屋の荒廃が進んで無住のまま倒壊寸前に至ったが、1972年5月、主屋と土蔵とが国の重要文化財に指定され、同年10月文部省の所管（当研究所管理）に移り、今回の修理をむかえた（口絵4）。

主屋 柱の不同沈下や傾斜、屋根瓦の脱落など破損がはなはだしかったため、全解体工事として実施した。工事中の調



第1図 修理前平面図



第2図 竣工平面および配置図

査によって江戸末期（土蔵を新築した嘉永前後）に大改造をうけ、さらに大正年間にも一部改装されていることが判明し、かつ当初形式もほぼつかみえたので、所定の手続を経て次のような現状変更を行った。

- | | |
|--|---|
| 1 背面の角座敷を撤去した。 | 5 みせ・みせおく、なかのま・なんど間
の間仕切りを半間西へ送り柱を復した。 |
| 2 東側隣家との取付き通路を撤去して、
東側半間通りを背間から3間分の庇に
改めた。 | 6 だいどころ・ぶつま間の間仕切りを撤
去し長九帖の1室とした。 |
| 3 正面入口1間幅を1.5間幅に、背面入
口を25cm、それぞれ広げた。 | 7 みせおく、ぶつまの押入を撤去した。
正面格子を古形式に改めた。 |
| 4 しもみせを縮小して、正面側に柱を復
した。 | 8 各建具を板戸あるいは障子に改めた。
10 くどを整備した。 |

以上のように復原した結果、土間が正面入口のふみ込み部分で広くなること、みせおく通りが1間幅と狭く、逆にながのまが8帖間と広くなること、おくのまが一室になり座敷としての機能がなくなることなど、江戸末期の町屋にはみられない平面形式をもち、少なくとも18世紀中頃は降らないものであることがわかる。また、解体の結果、梁・桁等から当初の柱番付が発見され復原の際の有力な資料となった。

土蔵 一部壁の脱落による軸部の腐朽がめだち、かつ蟻害もうけていた。しかし、全解体の必要はない認められたので、木工事は一階床を主とする部分補修にとどめ、その他、屋根瓦の葺替と壁の補修と仕上げとを行った。

入口は東面し、蔵前座敷（指定外）より出入りする。一階の北側に押入があり、また一階二階とも壁面にそって2段あるいは3段の棚を設けていた痕跡を残す。建立時期を示すつぎのような棟木銘がある。「上棟 嘉永貳年六月十五日吉辰」五代目忠五良 年三拾九歳建之 大工吉右エ門 卿之輔 小手間 久兵衛」

その他 指定外の建物として、蔵前座敷・便所・解などがある。付帯工事としてこれらの修理および整備を行った。蔵前座敷は上蔵建立直後に建てられたもので、今回は全解体の上別途格納し、主屋工事完了後旧状通り組立てた。便所・解は年代も新しく、かつ破損が大であったので、一部旧材を再利用しつつ、西の路地側は棟瓦葺高解形式に、東の溝側は板解に整備した。

主屋の解体後に東西方向にトレンチを入れ、土盛等の地盤に関する調査を行った。その結果、現地表より約40cm下につき固めた面があり、東石様の玉石も見出し、旧生活面が明らかになった。西方にある豊田家住宅（重文1662年）でもこれに似た状態が認められ、今井町全体が或る時期土盛造成された可能性も推測される。今井町の成立過程をみきわめる上で、環濠や土居とともに今後の調査に期待したい。

（細見啓三）

平城宮跡と平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では、1975年度において第1表に示す発掘調査を行った。宮内の調査では、2回にわたる第87次調査をもって推定第1次内裏の東半部の発掘が完了し、この地域を復原する資料がおおむね出揃ったことになる。

現状変更などによって行った小規模発掘のうち、第95—10次調査でえた平城宮西面外濠（西一坊大路東側溝）の知見によって、西一坊大路の幅員が明らかになった。

今年度も京内2ヶ所で大規模な発掘を行った。第94次調査は、1974年度にひきつづき奈良県営住宅建設予定地において実施した。この調査では平城京以前の瓦当文を出す寺院跡と東市周辺の居住地を発掘したのであるが、寺院跡の一部が保存されることになった。第96次調査は奈良郵便局移転予定地の事前調査であった。1坪のほぼ全域を発掘し、完全な形をとどめる庭園跡および殿舎を明らかにした。その遺存状況は、従来の発掘においても例のない良好なもので、各界から保存が強く要請された。その後、郵政省と文化庁との協議によって、保存の方向が打ちされつつあるのは喜ばしい。薬師寺八幡院における調査では、六条大路南側溝を検出し、これによって六条大路の幅員が判明することになった。県に協力して行った大安寺の調査では、北面僧房の後方に位置する中房を検出した。

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6 ABP・BC	平城宮 第87次(北)	75. 7. 2~10. 2	34.0 a	推定第1次内裏東半北部
6 ABP・BC	平城宮 第87次(南)	76. 1. 6~ 3.25	28.3	推定第1次内裏東半南部
6 AHJ	平城京 第94次	75. 4. 4~ 6.16	25.0	左京八条三坊十・十五坪
6 AFI	平城京 第96次	75. 5.30~ 7. 9 75. 10.13~12.23	42.0	左京三条二坊六坪
6 BFK	法華寺 第95—1次	75. 4. 4~ 6.16	1.8	
6 BKA	海龜王寺 第95—2次	75. 5. 7~ 5.17	1.61	
6 ALB	平城宮 第95—3次	75. 7.17~ 7.19	0.23	東面大垣
6 AFK	法華寺 第95—4次	75. 7.21~ 7.24	0.26	
6 AFK	法華寺 第95—5次	75. 8.19~ 8.21	0.22	
6 ABO	平城宮 第95—6次	75. 8.25~ 8.26	0.12	推定第2次内裏北方
6 BFK	法華寺 第95—7次	75. 9. 3~ 9. 6	0.48	
6 BFK	法華寺 第95—8次	75. 9. 8~ 9.13	0.24	
6 BSD	西大寺 第95—9次	75. 10.27~10.30	0.33	
6 ADA	平城宮 第95—10次	76. 1. 20	0.4	西面大垣外濠西一坊大路
6 AAN	平城宮 第95—11次	76. 1. 27~ 1.30	0.58	北面大垣端地
6 BYS	薬師寺	75. 9.10~10. 1	2.5	食堂北方
6 BYS	薬師寺	75. 9.25~ 9.29	0.27	北門南方
6 AIF	平城京	76. 3.25~ 4. 2	1.2	薬師寺八幡院・六条大路南側溝
6 BDA	大安寺	75.12. 6~12.23	1.92	北僧房
6 BDA	大安寺	75.12.11~12.17	0.75	東僧房東方

第1表 1975年度発掘調査状況

このように、本年度の調査によても宮と京の骨格は次第に解明されつつあるが、一方では京内諸遺跡の開発による破壊は休止することではなく、依然として大半が無処置のまま進んでおり、何らかの調査保存対策の立案が焦眉の問題になっている。

1 平城宮跡の発掘

推定第1次内裏東半地区の調査（第87次） 推定第1次内裏は朱雀門中軸線上の北方に位置し、北半は宮内で最も高い台地の好所を占める。調査地は高台の東南縁にあたり、北は通称一条通、東は歌頃街道に接するおよそ6,230m²の地区である。調査地の西側は第69次・72次調査として、また一条通の北側は第7次・81次調査としてすでに発掘されている。なお、推定第1次内裏東北地区については、今回の調査を含めて7次にわたる調査が実施され、全地域のおよそ60%の面積が調査されたことになる。これまでの知見では、奈良時代から平安時代にかけての間に4回の大造営がなされていることが認められている。

今回の調査地は、推定第1次内裏の東辺およびその外郭にあたる。検出した主な遺構には、建物17棟・門3棟・築地回廊3棟・築地1条・堀7条・溝14条・暗渠4条があり、ほかに多数の土塙があった（図版5）。

建物・堀・門は一部を除いて掘立柱によって構築されている。これらの遺構は、重複関係や配置状況などから4時期に区分することができる（第2表）。ここでは、年代の古い順にA・B・C・D期とし、各期の主要な遺構についてのあらましをのべることにする。

A期 推定第1次内裏の東辺は築地回廊あるいは掘立柱群で区画され、北方に一段高い壇を造成する。壇の前面は塙を積みあげ、南方の広場には砂利を敷きつめている。築地回廊の東外方は、南流する基幹排水路が東を画する外郭になり、二三の建物がたつ。

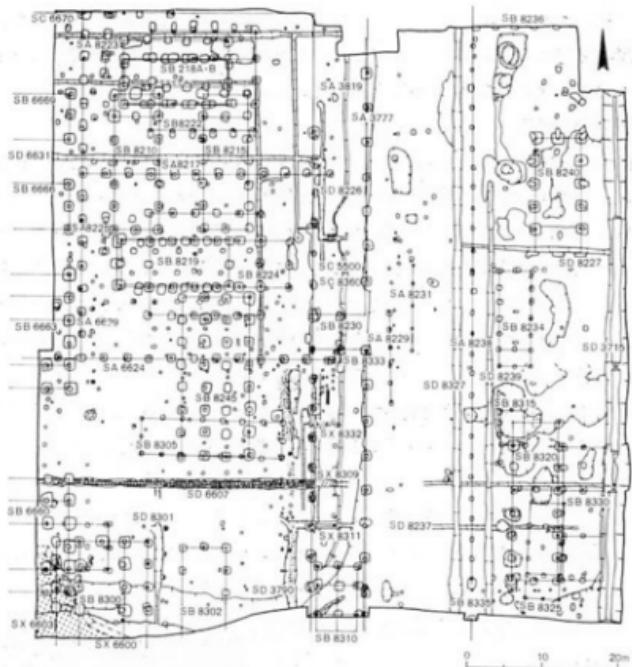
壇積墻SX6600は、第69次調査の東延長部分を検出した。南に向ってゆるやかに下がる丘陵の南端を切りとて造成した壇の前面に、平積の壇で化粧を施したものである。壇の残りは悪く、最高2段を残すのみであった。壇の高さは現状でおよそ1.7mである。壇の前縁は調査地西南隅で南南東に折れ、しばらくして再びわずかに北寄りに向きをかえ東へのびる。壇の下では、厚さ12cmほどのバラス敷面となる。この壇の上においては、A期に属する建物は検出されていない。

壇の東面を画する施設が堀S A3777であり、これは第27・41次調査で確認されたものの北方部分があ



第1図 壇積壁（A期）

平城宮跡と平城京跡の発掘調査



第2図 第87次発振調査構図

時期	造構平面形	時期	造構平面形	時期	造構平面形
A	S C5500 東築地回廊	B	S B8245 南北棟 7間×3間	C	S A6624 東西屋 12間以上
	S B8315 南 北 棟 3間×2間		S B8302 南北棟 2間以上×2間		S A6629 南北屋 16間
	S B8330 南 北 棟 6間×2間		S B8329 南北棟 7間×2間		S A8217 東西屋 11間
	S B8333 門 1間		S D3715 南北溝		S A8223 南北屋 2間
	S A3777 南 北 屋 14間以上		S D6618 東西溝		S A8225 南北屋 2間
	S A8229 南 北 屋 5間		S D8211 南北溝		S D3715 南北溝
	S A8231 南 北 屋 4間		S D8214 東西溝		S D6607 東西溝
	S D3715 南 北 溝		S D8216 南北溝		S D6631 東西溝
	S D3799 南 北 溝	C	S A3819 東面築地		S D8226 南北溝
	S D8237 東 西 溝		S B8218A 東西棟 5間×2間		S D8227 東西溝
	S X6600 塚 積 壁		S B8218B 東西棟 5間×2間		S D8301 南北溝
	S X8311 暗 杓		S B8219 東西棟 5間×2間		S X8309 暗 斧
B	S C8360 東築地回廊 16間以上		S B8222 東西棟 7間×4間	D	S B8234 南北棟 6間×2間
	S C6670 北築地回廊 3間以上		S B8224 東西棟 6間×4間		S B8335 門
	S B8210 南 北 棟 6間×2間		S B8300 南北棟 3間以上×4間		S A8238 南北屋 26間以上
	S B8215 南 北 棟 6間×2間		S B8305 東西棟 7間×2間		S D8327 南北溝
	S B8230 門 1間×2間		S B8310 門 3間×2間		S D8239 南北溝
	S B8240 南 北 棟 5間×2間		S B8325 南北棟 7間×2間		

第2表 第87次調查構時期別表

たる。今回は16間分を検出した。柱間はおよそ15.5尺等間だが、北から8番目の柱穴がなく、ここでは31尺の柱間となる。出入口にあたるのであろう。柱掘形は一辺約1.2mの方形で、一辺約40cmの正方形の柱痕跡をとどめるものもあった。堀S A3777の東に5間の堀S A8231が平行するが、堀S A3777の出入口に面しており、目隠堀と推定される。

堀S A3777との時期関係は判然としないが、壇の東面を画するもう一つの施設として築地回廊S C5500がある。側柱の痕跡は削平されているが、発掘区の中央南端にある溝S D3790は回廊西側の雨落溝である。底にバラスを敷きつめ、南端から約11mの部分では両岸をとどめ、その北方約10mの間は底のバラス敷のみが残り、それ以北では雨落溝の痕跡はない。発掘区の南部で検出した暗渠S X8311は、西端をS D3790に結び木樋で築地回廊を横断したようである。東外郭では開渠S D8237となって基幹排水路S D3715に注いでいる。溝S D8237は堀S A3777の柱掘形に重複することになるが、削平されているため前後関係が不明である。暗渠S X8311の北方約8mのところにある盲暗渠S X8309もこの時期に属する。これは築地回廊を横断するV字溝を掘り、バラスを詰めたものである。ただ、ここでは盲暗渠が雨落溝S D3790の延長線上までないことが注目される。

発掘区内の築地回廊S C5500のほぼ中央に、門S B8333がある。柱間は1間(10尺)で、築地の一部を切欠いた簡単な門であろう。この東側に目隠堀S A8229をともなっている。

発掘区の東端で検出した溝S D3715は、宮内を北から南へ流れる基幹排水路である。同時に推定第1次内裏地区と推定第2次内裏地区とを区画する溝でもある。素掘りの大溝で、平城宮の全期間を通じて存続している。建物S B8330は、溝S D3715の西岸に位置する南北棟の建物である。東側柱穴の大部分は、溝S D3715の改修時に削りとられていた。建物S B8330の西北にある建物S B8315は南北棟の小建物で、南の妻柱筋をS B8330の北妻柱筋に接えるのでこの時期にはいる。

以上のように、A期は最低2小間に細分されるのであるが、現段階ではただちに前後関係を定め難く、今後の検討にまちたい。

B期 A期の壇を南方へ移す。東面の築地回廊はA期と同位置で新たに建設され、壇上には10尺方眼を基準とする整然とした建物配置がみられる。東外郭には溝S D3715が存続し、2棟の南北棟建物がある。

発掘区の北辺で検出した4個の礎石抜取跡は、西方におけるこれまでの調査で確認されている北面築地回廊S C6670の南側柱列の遺構である。

東面築地回廊S C8360は、側柱の礎石の根石をとどめており、西側柱では16間分、東側柱では1間分を検出した。その規模は桁行13.3尺等間、梁間が2間で12尺等間と推定される。築地の本体は削平をうけているので不明である。A期の堀S A3777の門とほぼ同位置に、桁行1間(15尺)、梁間2間(12尺等間)の門S B8230を開いている。北面築地回廊SC6670にともなう雨落溝が溝S D8214であり、東面築地回廊S C8360にともなうのが溝S D8216である。2条の雨

落溝は回廊の東北入隅部分で合流し、東方へ流れ出る。

築地回廊の内側には建物が林立する。発掘区の西南辺では、すでに存在を確認している東西棟建物S B6660の東妻を検出し、身舎の幅で階段がとりつくことがわかった。

今回は4棟の建物を新たに検出した。建物はすべて南北棟で、柱間は桁行・梁間ともに10尺等間である。各建物は相互に柱筋をそろえ、整然と配置されている。

北方で東西にならぶ2棟の建物（S B8210・S B8215）はともに桁行6間・梁間2間であり北から2番目の柱筋にも柱を立てる。建物S B8215の南に建物S B8245がある。この建物は4棟のうちでもっとも大きく、桁行7間、梁間3間の総柱建物である。これら3棟の建物の外側を開む形で、溝S D6618と溝S D8211とがL字形にめぐっている。建物S B8245の南40尺のところに建物S B8302がある。梁間は2間であるが、南半が削平されて桁行は不明である。

東外郭には溝S D3715が存続し、西岸に2棟の南北棟建物がある。北方の建物S B8240は桁行5間、梁間2間で、柱間は10尺等間である。建物S B8320は桁行7間、梁間2間で、柱間は10尺等間であり、北から4番目の柱筋に間仕切りの柱をたてる。

C期 この時期では、築地回廊S C8360が築地に改修される。築地の内郭も全面的な改修を受けている。すなわち、内部を屏や溝で小さく仕切って建物を配置するのである。

築地S A3819は東面を画する築地であり、B期の築地回廊本体の位置を踏襲しているようである。築地本体の幅は不明だが、西側雨落溝S D8226を検出した。発掘区の南端で門S B8310をたてている。柱間寸法は桁行北端で8尺、北から2間目で13尺、梁間は9尺等間である。門の南部分は未発掘だが、このことから、桁行3間・梁間2間の八脚門が推定できる。東面にひらく主要な門であろう。なお、北面築地は確認していないが、B期の築地回廊位置を踏襲するならば、一条通の下に想定できる。

築地内の東北部を屏S A6624・S A6629・S A8217で囲む。これらはいずれも10尺等間の柱間である。屏S A6629は南北方向にのび、西側を限っている。北端はおそらく北面築地にとりつくのであろう。16間南へのびたのち南側を画する屏S A6624となる。この屏は東へ11間のびて東面築地にとりつく。屏S A8217は、屏S A6624と北面築地との間を2等分する屏で、両端は屏と築地にとりついている。この南北の区画内にそれぞれ1棟の東西棟建物がある。

南の建物S B8219は桁行5間・梁間2間の建物で、柱間は10尺等間である。この建物は区画の南北中央に位置し、側柱筋を西側の屏S A6629にそろえている。北の建物S B8218Aは桁行5間・梁間2間であり、柱間は桁行が9.5尺等間、梁間が10尺等間である。この建物は後にななつて同規模の建物S B8218Bに建替えている。その後、再び両区画内の建物は廂をもつ東西棟建物に改築される。

改築後の南の建物S B8224は、桁行5間（10尺等間）、梁間2間（10尺等間）の身舎の四面に12尺幅の隅欠廂を付した建物で、身舎の東から3間目と4間目の間に間仕切りを設ける。この建物もやはり区画の中央に位置している。北の建物S B8222は桁行5間（9.5尺等間）・梁間2間

(10尺等間) の身舎の南・北・西3面に12尺幅の隅欠廂をつけている。2棟の建物の西北に接して、目隠廈S A8225・S A8223が設けられている。S A6629の目隠廈に対応する部分の柱間がひらかれて両区画への出入口になるのである。

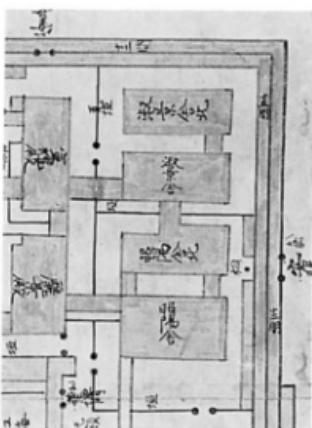
廈S A6624の南側には2棟の建物S B8305・S B8300がある。廈S A6624のすぐ南にある東西棟建物S B8305は桁行7間(9.5尺等間)、梁間2間(8尺等間)で、この建物は柱掘形が小さく軸線がやや振れており、仮設的なものであろう。建物S B8300は発掘区の西南隅で検出した南北棟の建物で、東西に廂をもつ。北半の桁行3間分を検出したが、南半は発掘区外にのびる。梁間は4間で、柱間は桁行・梁間ともに10尺等間である。その東側柱に沿って雨落溝S D8301がある。

築地内の排水は西から東へ流れる2条の溝S D6607・S D6631によって処理されている。溝S D6607は建物S B8300の北側を流れる。幅約1mの掘形に玉石を積んで構築したものらしく、両肩と底部に玉石の抜取り痕跡がある。築地S A3819の基壇下において、木樋を設けたらしい暗渠SX8309でぬけ、東方では再び開渠となって基幹排水路S D3715に注いでいる。溝S D6631は廈S A8217の北側に沿って流れ、東面築地の西側雨落溝S D8226に流れこむ。築地に沿って南へ約10m流れたのち、暗渠で築地基壇をぬけ、東方では再び開渠となって溝S D3715に注ぐ。暗渠は凝灰岩切石を組んだ堅牢なものであった。

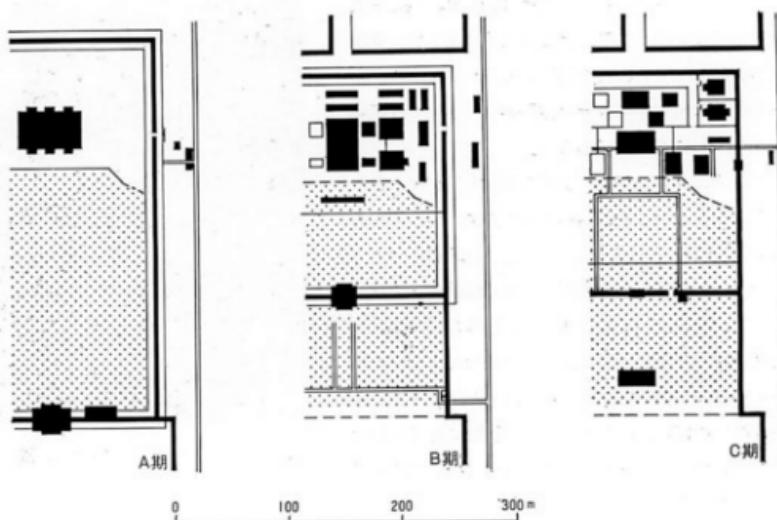
この時期の東外郭には1棟の建物がある。建物S B8325は発掘区の東南隅に存在しており、溝SD 3715に沿って建てられる南北棟建物である。桁行3間・梁間2間の身舎の南北妻側に幅10尺の廂をつけた建物で、身舎の柱間は桁行・梁間ともに7尺等間である。建物の軸線は北で東にやや振れている。

D期 C期の東面築地S A3819と基幹排水路S D3715のちょうど中央に位置して南北に通る廈S A8238と、これにともなう2条の溝S D8327とS D8329が設けられる。廈S A8238の東側にはこれと平行に南北に細長い建物S B8234が建てられる。廈の西方ではこの時期に相当する建物を検出していない。

廈S A8238は発掘区内で26間分(柱間約9尺等間)を検出し、さらに南北にのびている。発掘区の南端にあたる個所に門S B8335がある。これはやや大きめの柱掘形一対で、およそ18尺程度の柱間となろう。なお、この門はC期の東面築地の門S B8310に対応している。廈S A8238をはさんで両側に溝S D8327と溝S D8329が平行する。溝の心々距離は約4.5mである。周辺の



第3図 平安宮内裏東北部の建物配置



第4図 推定第1次内界地区造構変遷図

調査地区でこの期に関連するものを探すと、南方の第27次調査で検出した期 S A 3740があり、この期はさらに南方へのびる可能性がつよい。北方の状況は不明であるが、期 S A 8238はC期のある時に、築地の外郭を開む施設として新設した可能性も出てくる。

建物 S B 8234は期 S A 8238の東に接して建つ。桁行6間（8尺等間）、梁間2間の南北棟建物で、棟通りの南から2列目の柱筋に柱を立てる。

遺物 今回の発掘により出土した遺物は瓦・埴・土器・金属器がある。遺物については現在整理中であり、ここではとくに調査中に気のついた範囲の記述にとどめる。

軒瓦のうち型式の判明したものは、調査部の編年でいう第Ⅲ期（天平18年～天平宝字初頭）にあたる奈良時代中頃の瓦が比較的多く、その多くはB、C期の遺構から発見された。埴のほとんどはA期の埴積壁 S X 6600の前面から崩壊した状況で出土した。このなかに方形の埴が含まれていたことは注目される。この種の埴は埴積壁の上縁に用いられたか、あるいは埴の上面の舗装に使用したものと考えられる。

土器の多くは溝 S D 3715から出土したもので、土師器・須恵器のほかに、灰釉・綠釉陶器がみられる。ほかに土馬3点が出土している。全般的に見ると奈良時代の末期における埋没の最終時と考えられる土器が多い。また、三彩を施した鉄鉢形陶器の破片が東面築地回廊付近で出土した。埴積壁 S X 6600を埋立てたときの整地土中からは、S K 219の遺物と同時期とみられる土師器、杯Aの破片が出土している。金属器では刀子・節鉗・鉄釘・銅釘・鉄針と万年通宝1点が出土している。

まとめ まずA期については、この地域の北寄りに造成された壇上敷地が東西両翼に袖をもつ空間であったことが想定しうるようになった。しかし、袖の部分が東面築地回廊にどのようにおさまるかという点については、今後の課題となった。

つぎに、B期の壇上に建つ建物については、すでに中心部分の配置が明らかになっており、10尺方眼を基準とする整然とした配置と柱間寸法の計画がなされていることが判明している。今回の調査においても、このことを確認した。また、今回の調査において東面築地回廊の柱間寸法を明らかにした。しかし、築地回廊についてはA期の築地回廊と掘立柱屏との関係や北面築地回廊の位置など、今後さらに検討を深める必要がある。

C期についても、屏による仕切りの多用、広廻建物の出現、礎石による補修など、中心部でえた所見と同様の性格をもつ遺構の存在が明らかになった。中でも築地東北入隅部における建物配置は、古図にみえる平安宮内裏東北部分の昭陽舎・淑景舎の配置と類似しており、C期遺構を理解するための有力な手懸りとなろう。

最後に各時期の年代であるが、今回の調査においても、従来の成果と矛盾するところがなかった。すなわち、A期を奈良時代前半、B期を奈良時代後半、C期を奈良時代末から平安時代初期にかけての時期に比定する。

北面大垣の調査（第95—11次） 平城宮北面大垣の近接地において、宅地造成にともなう事前の調査を行った。調査地は平城宮北面大垣が土壘状に良好にのこる史跡指定地に北接しており、平城天皇陵の前身である市庭古墳の後円部にある。

現状は高台であり、その南辺と北寄りに東西に長い2本のトレンチを設定した。北のトレンチでは墳丘にかかる痕跡ではなく、地山上に厚さ10cm内外のバラスがおおい、そのなかに奈良時代の瓦や上器片をふくんでいた。少し南方へ掘りひろげたところでは、厚さ約20mで東西にのびる黄色粘土の盛土を検出した。発掘区は狭く確言はできないが、この盛土は北面大垣塁地にともなうものであり、外方のバラス敷は京極大路に関するものとみられる。北方のトレンチでは、西方に向って下降する地山を検出するにとどまり、葺石など古墳の痕跡をとどめない。しかし、地山の状況から直径150m程度の後円部を復原する手懸りをえた。

西面大垣外濠の調査（第95—10次） 京極大路に近い西面大垣の西方で宅地造成が行われることになり、事前の調査を実施した。調査地は南北に長い水田であり、その南と北に東西方向のトレンチを設定した。両トレンチで検出した遺構はほぼ同じで、トレンチの西部の幅約4mの部分では、水田下の床土を除去すると暗褐色砂質土の地山があらわれ、平城京西一坊大路路面敷と考えられた。東部は幅約1.4m、深さ約40cmの溝で、灰色粘質土、青灰色砂質土が堆積しており、下層の砂質土から少量の土器片が発見された。この溝は西一坊大路東側溝にあたる。ただ調査地内では幅員の全体を検出しておらず、東岸はさらに東にあると考えられ、約3m内外の溝が想定できる。さきに近接地での調査（第82—4次）で西側溝を検出しており、今回の発掘所見とあわせて、西一坊大路の幅員が約24m（80尺）であることが判明した。

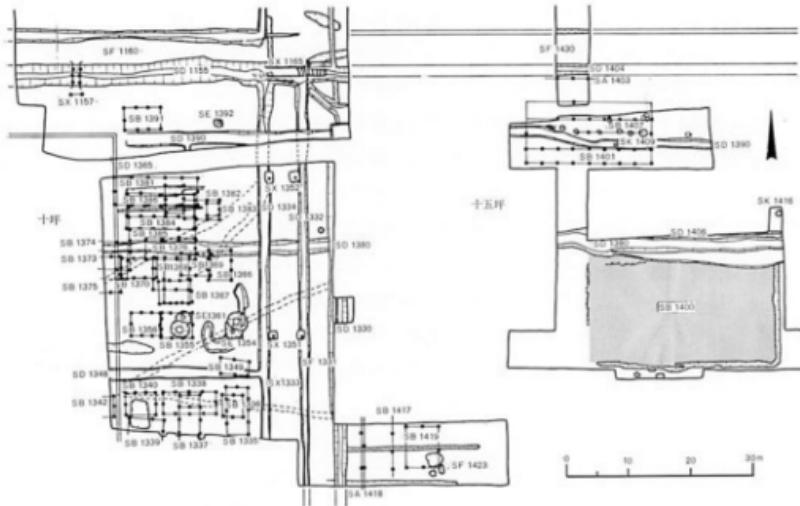
推定第2次内裏北方官衙の調査（第95—6次） 第95—6次は第2次内裏北方の外郭官衙地区の北東部にあたり、農小屋を車庫に改築する事前調査として約12m²を発掘した。この地は従来の調査から市庭古墳の周濠を埋立て、官衙を造営したことが確認されている。今回もこの埋立てによる整地土をあらわし、さらに東西に走る築地南縁部を検出した。この築地の本体は発掘区に北接する現道路下にあり、外郭官衙の北辺を限る築地岸と思われる。但しその築地に伴う側溝などは今回の調査では発見されなかった。

2 平城京跡の発掘調査

左京八条三坊の調査（第94次） 本調査は奈良県住宅供給公社が奈良市東九条町姫寺に計画した県営住宅姫寺団地建設に伴う事前調査である。敷地の北半部分については、1974年度に第93次調査として発掘調査を実施し、堀河、坪境いの小路、建物、井戸など多数の遺構を検出した。1975年度は、第94次調査として敷地の南半部にあたる十、十五坪の主要部を調査した。両次にわたる調査の成果は『平城京左京八条三坊発掘調査概報——東市周辺東北地域の調査』（奈良県1976年3月）として既に発表されている。

第94次調査で検出した遺構には弥生時代と奈良時代のものがある。

弥生時代の遺構 壺棺墓1、溝、小ピット群を検出した。壺棺墓SK1409は十五坪の僧房の位置で検出した。直径60cm、深さ23cmの円形土壇に口縁を上にして壺形土器を納める。溝は十坪で3条を検出した。いずれも自然の流路と考えられ堆積土に第V様式の土器片を含む。



第4図 左京八条三坊十・十五坪遺構配置図

時期	遺構	平面形	奈良時代の遺構
I	S B1391	東西棟 3間×2間	主な遺構に寺院、小路、掘立柱建物、井戸、溝がある。
	S B1381	東西棟 5間×2間	条坊遺構 小路S F1331は十、十五坪境の南北道路で、両側に北流する側溝を伴う。両側溝間の心々距離は6m(2丈)で、これまでの調査例と同じだが、東側溝S D1330は幅2m、深さ0.6m、西側溝S D1332は幅1m、深さ0.3mほどで、一方の側溝を広くする点は從来の知見と異なる。西側溝の西側には九坪の場合と同じ幅6mの道路状遺構S X1333がある。
	S B1383	南北棟 1間×1間	
	S B1370	東西棟 3間×2間	
	S B1340	東西棟 3間×2間	
II	S B1385	東西棟 4間×4間	
	S B1366	南北棟 3間×2間	
	S B1356	東西棟 3間×2間	
	S B1338	東西棟 4間×2間	
III	S B1384	東西棟 5間×3間	
	S B1369	東西棟 2間×2間	
	S B1355	東西棟 3間×2間	
	S B1337	南北棟 3間以上×2間	
IV	S B1368	南北棟 4間×3間	
	S B1382	東西棟 3間×2間	
	S B1335	南北棟 4間×2間	
V	S B1386	南北棟 2間×1間	
	S B1376	東西棟 3間×2間	
	S B1367	東西棟 3間×2間	
	S B1336	南北棟 2間×2間	

第3表 左京八条三坊十坪の時期別建物

から5期にわたる建替・変遷が知られた。いずれの時期にあっても、主屋と考えられる桁行4～5間の廂付き東西棟を北寄りに配し、その南に桁行3～4間の規模の小さな付属屋を数棟ならべ、さらに中央部に1基の井戸を伴うという、共通した構成が認められる。しかし、時期が降るにつれ、各建物の規模は縮小する傾向を示している(第3表)。

文献上から十坪は東市の一部と推定されているが、今回の調査で検出した遺構・遺物からはこの坪を東市内と決定する手がかりは得られなかった。しかしながら、十坪の北を画する小路南側溝から多種多様の遺物が大量に出土したことや木簡のなかに物品の売買を示すものが含まれていることなどは、この地域が市と深く関連する場所であることを示しているといえよう。

十五坪の遺構 坪のはば中央に東西40m、南北30m、比高2mほどの敷地をもつ天神社がある。この土壇の北側に接して推定講堂基壇、その西北方に僧房、さらに寺域の北・西を限る廻などを検出した。講堂基壇S B1400の規模は東西29.5m(100尺)、南北16m(54尺)である。基壇は地山上に直接土盛りして築いたものであるが、礎石痕跡は残存せず、建物の平面規模は判らない。僧房S B1401は桁行8間、梁間4間の南北廂付東西棟掘立柱建物で、柱間寸法は7.5尺等間である。講堂の中軸線の対称位置に東僧房の存在が推測されるが、今回は調査が及ばなかった。S B1402はS B1401の廃絶後に重複してつくられた礎石建物で、礎石および礎石抜取痕跡を10個所検出したが、規模や形式は明らかでない。僧房が礎石建物に変わったのは奈良時代後半頃とみられる。僧房の北側には東西小路南側溝沿いに寺域の北を限る廻SA1403があり、南

北小路東側溝に沿って西面を限る辯 S A1418がある。いずれも8尺等間で各2間分を検出した。

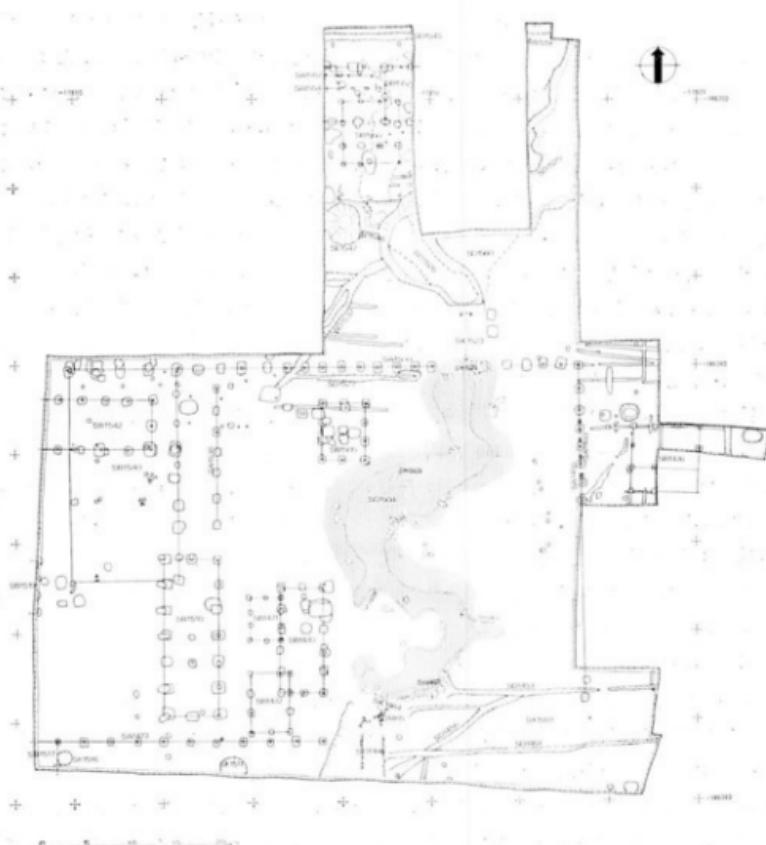
この寺院は、出土瓦からみて、白鳳期に遡るものとみられるが、今回発見した諸堂の位置関係および天神社土壇を金堂跡とみれば、条坊制の一町内にびったりあてはまる伽藍配置が想定でき、条坊設定時に別な場所から移建されたものと考える方が妥当であろう。条坊遺構に先立つものとして十、十五坪にまたがる東西溝 S D1380があるが、この溝は平城京南辯条里の南端から1,325mの位置にあたり、京造営前の先行地割に関連した遺構とみられる。講堂基壇はこの溝を埋めたてた後につくられており、移建説に有利である。本寺の廃絶期は、講堂と僧房の雨落溝から出土した10世紀後半の土器や、少量ながら出土した鎌倉時代の瓦が目安となろう。また、13世紀末の『西大寺田園目録』に見える「ヒナタウ」は、その頃まで堂舎の一部が存在したことを見出している。寺の名称に関して、東西小路南側溝から出土した「土寺」という墨書き銘のある土器が注目される。土寺は土師氏との関連を考えるべきであろう。一方、近世の平安京絵図には、東市の近くに市姫金光寺（あるいは市堂・市姫祠）があるが、『金光寺縁起』によればそれは市の守護神としてまつられたという。今回の調査地辯には字名として「姫寺」が残り平城京においても東市の近くに市の守護のための寺社の存在したことを想定させる。今回発見した寺院跡と関連して考える必要があろう。

遺物 第93次調査においては、堀河 S D1900および東西小路南側溝 S D1155を中心として、多種多量の遺物の出土をみたが、第94次調査で出土した遺物は瓦・土器類に限られ、量的にも少い。特記すべき遺物としては十五坪の寺院跡から出土した瓦がある。大半は7世紀後半のもので、この寺の創建の時期を示しており、横井庵寺・海童王寺・興福寺と同範囲にある。

左京三条二坊六坪の調査（第96次） 今回の調査は奈良郵便局庁舎移転計画用地（奈良市尼ヶ辻ゴトサ甲669-1）において行った事前調査である。調査地は左京三条二坊六坪のほぼ中央部にあたり、坪内の遺構の状況を解明する上で貴重な資料を提供するものと考えられた。調査はまず遺構の残存状況を確かめるため、予備調査（1975年5月30日～7月9日）として用地内の南端に東西トレンチ（70×5m）、東端に南北トレンチ（90×5m）を設定し、800m²について発掘した。その結果、敷地中央部で園池の一部とそれに伴うとみられる建物や辯などを検出した。こうした所見にもとづき、全面的な本調査（同年10月13日～12月23日）を実施し、約3400m²について発掘した。今回の調査で奈良時代の園池の全貌がはじめて明らかになり、園池を中心とした建物配置や地割なども解明できた。庭園史上画期的な遺跡である。なお、調査概要については『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』（1976年3月）を刊行している。

検出した主な遺構は園池1、建物2棟、辯7条、旧河川3条、井戸2基などである。遺構はA・Bの2期に分れるが、園池は2期にわたって存続する。

園池 坪内の中心を南流していた旧河川 S D1560を利用して園池 S G1504が造成された。園池への導水路 S D1525もこの旧河川を利用してあり、京造営時に左京三条二坊の坊間路沿いに堀河として改修した菰川から給水していたと考えられる。菰川と導水路の接点には水量調節を



第5図 左京三条二坊六坪遺構配置図

行う取のような施設があったのであろうが、今回の発掘ではその地点まで及ばなかった。池への導水はこの導水路から直接園池に水を引かずに、園池の手前でいったん貯水して、木桶暗渠 S X1523により園池へ導水する。木桶は5 mの一木（巾12cm・深さ10cm）を凹型にくり抜き、上に木蓋をのせる。木桶の導水口は蓋をくり抜き上面から注ぎ入れる構造になっている。取入口には木桶の両脇に1 mの間隔で2本の小角柱（一辺15cm）が検出された。導水のための関連施設であろうが構造の詳細は知りえない。木桶より流入した水は園池北端の立石で囲んだ石組遺構 S X1524（6 m × 1 m）に溜水し、浄化した後清水を池へ注ぐ。

園池 S G 1504は南北に長く蛇行しており、平均幅15m、延長55mである。池全体は人頭大の

扁平な玉石を敷きつめている。水際には全体にわたって一列に玉石を立てて据えつけ、岸辺はゆるやかな勾配で玉石を敷く。岸の外側には挙大の礫を敷き地表を保護している。池底は同様に扁平な玉石を敷きつめ、ほぼ水平であるが、池尻の部分は排水を考慮して中央部の底石を一段下げている。導水口と溢水口の高さから推定すると、水面の幅は広い所で約6m、狭い所で約2mで、水深は広い所で最も深く約25cmで、全体に浅い池と考えられる。庭石は水蝕のある褶曲をもつ石英質片磨岩を水辺に、花崗岩に一部安山岩を混えて岸に使用し、しかも汀線が突出したり彎曲する変点に集中して配置している。また、池の中程やや北よりの西岸近くと池尻の東岸近くの2個所に、段違いになった木枠を構えた旋設S X1503、S X1463がある。底板を敷き、その上に側板を2段に組み合せた箱状のもので、その中に土を入れて水生植物の栽培に使用されたものであろう。なお、池の堆積土中には、クロマツの球果、ウメ、モモの核、センダンの核、種子などとともに水生・水辺植物の遺体が検出されている。

園池南辺の池尻には壁状に一列の立石があり、その後に溢流部がある。池から溢流した水は南の階段状の石組の溝S D1465に流れる。さらにその水は幅2.1mの両側を玉石で護岸した排水溝S D1466に流れこむ。溢流部の石組の溝の下には、池尻と排水溝を結ぶ長さ25mの木樋S X1464（外法寸法20×20cm）が貫通している。木樋の構造は取入口と同様、池尻側の蓋先端部に径12cmの円穴を穿っている。木樋は池の水を抜く際に用いたものであろう。

前述した如く、園池の形状、水深の浅さなどから判断すると観賞と同時に曲水宴などの行事、雅宴に利用できる実用面をあわせもつものと考えられる。

園池に併存する建物はA・Bの2期に区分できる。

A期　園地、建物7棟、堀6条、井戸2基、溝2条がこの時期に属する。A期は平城京造営当初から天平勝宝年間に比定できる。すなわち、上限は園池導水路S D1525から出土した和銅年紀の木簡により、下限は柱穴から出土した平城宮第Ⅲ期の軒瓦や土師器の年代を根拠とする。建物は坪の中心線を基準として計画的に配置されている。すなわち、坪の中心部に園池SG 1504を配し、これを開む形で軸線から70尺の等間隔で、東西南北に堀SA 1455・SA 1536・SA 1473・SA 1500を設けている。2間×6間の南北棟建物SB 1510、東西棟建物SB 1519はともに北側柱を坪の東西中軸線に据え、南北中軸線から西へ70尺・140尺に位置する。東西棟建物SB 1542は西側柱が発掘区外となり確認できないが、桁行5間と推定すると南北中軸線より140尺に位置する。また2間×3間南廂の東西棟建物SB 1550の東側柱は南北中軸線上に位置する。2間×3間の南北棟建物SB 1505と2間×5間の南北棟建物SB 1470は西側柱と東側柱を据えて配置され、この延長線上から堀SA 1473がはじまる。南北中軸線より西30尺にあたる。北側にある東西溝SD 1545（幅約80cm）は三条条間路に面する築地内側の溝に比定できる。建物配置は10尺と7尺の基準方眼で計画されておりA期内でも2期の増改築が考えられる。こうした配置計画は建物、堀にかぎらず溝SD 1451・1453・1456、井戸SE 1511・1547にも適用される。また堀で囲まれた園池の西側の3棟の南北棟SB 1505・1470・1510は、彼方の東山を借景に園池

を鑑賞するためのものであろう。特に S B1505は池岸の石敷部に東南隅柱を立て、池台や池亭のような性格をもつものかも知れない。

B期 建物5棟、埠1条、溝2条がこの時期に属する。B期の下限は園池の埋土から出土した遺物により奈良時代末と考えられる。この時期も園池を中心としたA期の計画的な配置を踏襲している。北埠 S A1500の柱通りに北妻柱を揃えて4間×8間の礎石南北棟建物S B1540を配置する。東側柱は南北中軸線から西84尺にあたる。また、2間×3間の南北棟建物S B1471、S B1472は西側柱を揃えて配し、南北中軸線から西56尺の位置にある。また、東91尺の位置に西柱を揃えた2間×3間の南廂をもつ東西棟建物S B1476があり、目隠し埠S A1483を伴う。この時期の建物配置をみると、今回検出した建物のうち最大規模のS B1540を主殿として、園池が広く見渡せるようその前面を広い空間地としている。

遺物 今回出土した遺物は発掘区全体から出土しているが、量的には多くない。土器類では二彩釉、綠釉、灰釉などの施釉陶器や土師器、須恵器が出土した。導水路からは木筒と共に奈良時代前半の土師器が出土したほか、園池の埋土からは園池の下限を示す奈良時代末の土師器杯や須恵器大型壺が出土した。

瓦類では約100点の軒瓦が出土した。軒瓦は平城宮内使用瓦と同範のものが多い。このことは最近の京内調査で京内特有の瓦が認められた傾向とは異り、宮との深い関係を示すといえよう。また、年代的にみると平城宮の瓦編年によるⅡ期（養老5年～天平17年）、Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）に属するものが多く、それ以前の藤原宮式軒瓦も若干ではあるが出土している。

木製品は排水路から人形・削り掛け、導水路の埋土から黒漆塗の容器蓋、人形、糸巻きの横木、鍔の把手、匙、曲物の蓋・底板が出土したが、あまり多くない。

木筒は64点出土した。出土遺構は葛川より園池S G1504への導水路S D1525で、予備調査ではその中間地点の青灰色粘質土から(14点)、本調査では末端の屈曲部、木樋SX1523の水取り口付近から西へ南壁に沿って発見された(50点)。木筒が出土したのは旧河川の砂層上に貯水のとき堆積したと思われる暗灰色砂混り粘質土からで、多量の加工木片とともにあった。和銅5、7年の年紀のあるものが3点あり、地名表記等（長郡、額田部里など）からみても、木筒はほぼこの時期のものと考えられるが、園池造作に関連するか、上流より流れ込んだものか明らかでない。木筒の内訳は文書様木筒8、付札類9、習書4、削屑6、その他である。貞進物



第6図 園池跡出土木筒

の付札には、若狭（調査 和銅5年）、阿波のものがあるほか、里名・人名のみのものが多い。この庭園遺構を考える資料となる重要な木簡として、つぎのものがある（第6図）。

（表）鶴郡□　（裏）北宮俵□

某国鶴郡より北宮への用物（米か）貢進の付札であるが、北宮は和銅5年の長屋王願経（大般若経）の跋語や、神亀3年山背国愛宕郡出雲郷雲下里計帳にみえる。長屋王願経では文武天皇追善のための写經を北宮（文武天皇旧居といわれる）で行ったごとくであるから、跋語の北宮は藤原京所在であろう。しかし上掲計帳により北宮が平城京でも存在したことは明らかであり、この木簡は文武崩御ののち、その妹で長屋王室の吉備内親王にうけつがれ、平城京内に造営された北宮を指すものと考えてよいだろう。そのように考えると当庭園遺跡がその規模からみて北宮であった可能性は充分考えられよう。

上記の写經に関連するかと思われる木簡としてつぎのようなものがある。

（表）五百冊二　（裏）二百七十

一校授

木屑様の木片にかかれてはいるが、この大般若経の巻数を示すと思われる数字は写經風な文字であり、大般若経書写とのなんらかの関連を偲ばせる。

つぎの木簡はこの地域の居住者の性格を推測する手懸りとなる。

（表）御环物直米二升充奉　（裏）受古女　九月三日_{柳原忌付}

この木簡にみえる「御环物」が天皇の御杯に盛った食物の意であることは、『播磨國風土記』賀古郡条から知られ、この園池遺構と天皇やその近親者との関係を示していよう。

その他に、官職名のみえる「中務省少録□□□□」や、習書ではあるが「棕部智麻呂 高椅善麻呂」の人名のみえるものがある。

まとめ 左京三条二坊六坪の中心に園池を造成し、その西方には園池彼方の東山を借景に見る数棟の南北棟建物を配置し、四周を屏で囲んだこの一郭は、庭園遺構の機能をよくそなえている。こうした奈良時代の庭園遺構の発見は、日本庭園史研究上画期的なことであり、古代庭園の再評価を含めて、園池の意匠や作庭技法の基礎的資料を提供したといえよう。

つぎに左京三坊二条六坪の遺構の性格にふれてみたい。出土遺物からみると、土器などの日常生活に必要な生活用具が少ないと、軒瓦がいずれも平城宮使用のものと同型式であり、邸宅への瓦葺き獎勵（神亀元年）以前に瓦が使用されている点、また木簡に北宮に関連したものや「御环」などと記したものが出土していることから、宮廷的な施設の要素がうかがえる。また、園池の形状や構造が公的儀式である曲水宴に適していることも、宮廷ないしはこれに準じる性格をより強く示しているといえよう。

以上のような遺構や遺物のあり方から判断して、この遺跡は2町ないし4町の規模をもち、平城宮と密接な関係を持つ公的施設、あるいは天皇や皇族の宮に関係した園池である可能性がきわめて高い。

薬師寺食堂北方地域の調査 調査地は、薬師寺の北口参道をへだてた東側にあたり、すでに発掘されている食堂基壇北辺から約30m北方の地点にあたる。

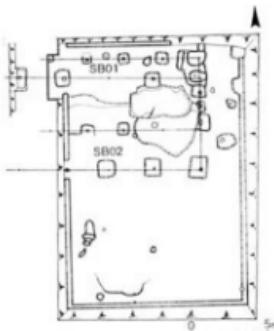
発見遺構は、赤褐色粘質土面で大小6個の土壙、暗灰色粘質土面で奈良時代と考える東西棟掘立柱建物2棟および土壙1などを発見した。赤褐色土面で検出した土壙は、全て不整形で発掘区全体に散在している。埋土、遺物から2群に分けられる。1群は、発掘区北寄りに並ぶ2個の土壙で、平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦、瓦器を包含した鎌倉時代の土壙であり、もう1群は南部にある3個の土壙で、大量の瓦、平安時代の綠釉・灰釉陶器を出土し、平安時代に瓦類を廃棄した土壙と考えられる。もう1個の土壙は北端東寄りにある。

暗灰色粘質土面の掘立柱建物2棟は、発掘区北部に重複して検出した。2棟とも2間×4間以上の東西棟建物と考えられ、北寄りのSB01は柱間寸法8.5尺、南寄りのSB02は10尺、柱穴の切合い関係からSB01がSB02より古い。ちなみに、検出した遺構面を付近の調査で確認した遺構面の標高と比較すると、今回の発掘区の遺構面が標高59.9~60.0m、西北方にあたる1965年9月の高天商店の調査、西南方の1974年10月西館房食堂調査の食堂西北角の遺構面がともに60.3mである。後2者は、旧地表をほぼ残していると考えられ、今回の発掘区遺構面とは0.3~0.4mの差がある。このほか発掘区東北隅付近に柱穴2、南端中央付近に柱根2、SB02内に土壙1を検出したが、それらは今回の発掘区内では建物にまとまらなかった。

遺物の大部分は赤褐色粘質土面の土壙から出土し、暗灰色粘質土面では遺構面の削平のためほとんど出土していない。瓦は南方の3個の土壙から特に多く出土している。軒瓦の大部分は、本薬師寺式複弁蓮華文軒丸瓦、同式偏行唐草文軒平瓦で、ほかに片岡王寺式複弁蓮華文軒丸瓦、本薬師寺式重弁蓮華文軒丸瓦、橘寺式複弁蓮華文軒丸瓦各1点があり、平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦、鎌倉時代の連珠文軒平瓦などが数点出土している。土器は土壙から出土したものが多い。南方の3個の土壙からは主に奈良末~平安初の土師器・須恵器、ほかに平安初期の綠釉花文線刻皿、平安中期の灰釉壺各1点出土した。

北寄りの2個の土壙からは瓦器が出土している。このほか、南方の西側の土壙から、奈良時代の綠釉陶の建物模型の勾欄部分の断片やガラス片が出土している。

2棟の東西棟建物の時期・性格については資料が乏しく確定できないが、一応つぎのように考えておきたい。時期は、建物の規模、柱掘形出土の奈良時代前期の須恵器などから、両者とも奈良時代と考える。性格については、2棟が東妻を揃えておりSB02がSB01を建て替えた建物と考えられること、食堂・十字廊（食殿）の後方に位置することから、ともに大炊屋などに関係する建物と考える。



第7図 薬師寺食堂北方遺構図

右京七条二坊の調査 調査地は薬師寺八幡宮北側で、平城京六条大路南側溝と右京七条二坊一坪内の土壤 2 を検出した。大路南側溝の幅は約 4.0m、深さ約 1.7m である。南岸には径 10cm ほどの丸太杭を 30cm 間隔に打ちこんだ護岸施設がみられた。溝の堆積土から奈良時代の須恵器、土師器、瓦が少量出土した。溝から薬師寺南面築地までの心々距離は約 34.0m であり、六条大路の幅員を明らかにした。

大安寺僧房の調査 本調査は駐車場建設および家屋改築に伴う事前調査として、奈良市大安寺町 1117 番地において実施したものである。当該地は大安寺伽藍復原図によると、北面僧房の東端、すなわち三面僧房の東北隅近くにあたる。

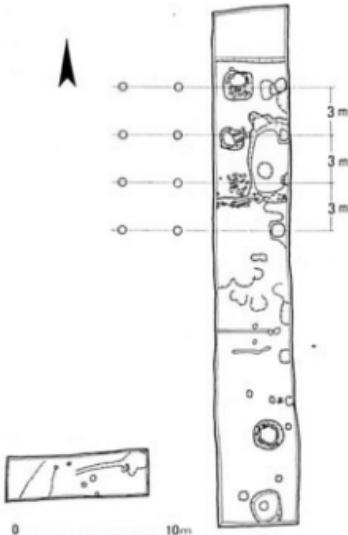
調査の結果、後世の攢乱が著しく、発掘区北側で中房の一部を検出しが、南半部はすでに削平されていて大房は確認できず、わずかに鎌倉時代初頭とみられる井戸 1 基を検出したにとどまった。

北面中房の梁間通りの礎石および根石列を 2 列検出した。1 列の柱通りに 4 つの礎石がある梁間 3 間の総柱建物である。梁間の柱間寸法は 10 尺等間であり、『大安寺資財帳』の中房の記載寸法や 1966 年度調査の西面僧房中房の柱間寸法と一致する。桁行の柱間寸間については、礎石が動いているため正確な数値は求められないが 12~13 尺と推定された。残存する礎石は西列で 2 個、東列で 4 個の計 6 個であるが、いずれも原位置を移動している。西列では人頭大の根石をもった据付け痕跡が、削平された南の柱位置をのぞいて検出されたが、東列礎石には据付け痕跡が認められず、礎石は原位置から西へ動いていると考えられる。礎石は東列南の逆截頭方錐形の凝灰岩製礎石のほかは、自然石を用いている。造構面は梁間北側柱心から約 1.6m 北で一段低くなり基壇状となっている。

井戸は発掘区南半で検出した。柱を転用したとみられる円形の井筒を用い、その上方は軒瓦・丸平瓦・埴・凝灰岩切石を積み重ねて強化している。出土した瓦器により鎌倉時代初頭のものと考えられる。

瓦類は軒瓦・丸平瓦のほか鬼瓦・埴などがある。大半は奈良時代の大安寺式とよばれるものであるが、若干、大官大寺式や平安・鎌倉時代のものが混じる。土器は少なく、奈良時代中葉から鎌倉時代のものが混在する。土師器・須恵器のほか瓦器・施釉陶器が出土した。

また、この調査と併行して、東面僧房の外側



第 8 図 大安寺北僧房造構図

平城宮跡發掘調査部

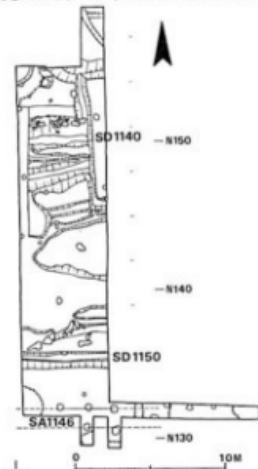
にあたる地点についても発掘した。東面僧房の外側を区画しているとみられるところの南北溝（幅1m、深さ0.9m）と東西棟建物の一部を検出した。

法華寺旧境内の調査 法華寺旧境内における発掘調査を5件実施した。いずれも家屋改築にともなう事前調査であり、発掘面積も限られている。しかも後世の掘乱が著しく、頭著な遺構はわずかであった。第95—4次調査は法華寺旧境内南半、中軸線に近く、位置的に南門が想定できる場所での調査で、建物1棟、東西溝1条を検出した。今回の調査で検出した建物は、発掘区の制約などから極めて一部しか調査できず、その性格を明らかにすることができなかった。

第95—8次調査は、既設水道管取り替えにともなう掘削の立会であるが、当該地は現法華寺南門前の道路であり、『大和名所図会』では南門両脇の築地堀に沿って巨大な礎石が數個配列されており、從来から金堂もしくは講堂がこの附近に当ると推定されてきた。掘削は以前の水道管敷設時の掘形を再度掘り直したため、攪乱されていない土層は切れぎれにしか断面に現われない結果となったが、東西に10尺間隔で並ぶ5間分の掘立柱痕跡を検出した。これを中軸線で折返すと7間の建物になると推定され、法華寺講堂もしくはその前身の建物遺構に当ると思われる。法華寺現本堂の地下でも当初の掘立柱建物を礎石建てに改作した事実があり、食堂跡と推定されている。南門付近の今後の調査が望まれる。

海童寺北方の調査 駐車場造成とともにうな調査。調査地は海童寺現境内の北に接する水田で、金堂の北々東に位置する。検出した遺構は築地1条と溝2条である。

築地 S A1146は発掘区南端を東西にはしるが、擾乱のため寄柱2間分しか確認できなかつた。基底幅は6尺、柱間寸法は6尺等間である。溝S D1150は築地S A1146の北2.8mの位置を東西にはしる幅約1.6mの素掘りの溝である。南岸の遺存状況は良好だが、北岸は削平を受けている。溝の推積土は2層にわかれ、下層を奈良時代、上層を平安時代初期に比定できる。溝S D1140は築地S A1146の北雨落溝S D1150の北15mの位置を東西にはしる幅1.9m、深さ1.2mの溝で、大きい自然石を側面に並べて護岸としている。護岸は北壁では良く残っていたが、南岸では発掘区西端に一部残っているにすぎない。底は素掘りのままで石敷等の化粧はない。瓦類、土器類、貨幣、木簡などが出土しており、奈良時代に比定できる。この築地S A1146、東西溝SD1150はともに、現在までに確認されている平城京条坊区画のいすれとも明確な関連性を示さないが、築地と東西溝のいすれかが海竜王寺旧寺域北限の一端を示すものであることは確実であろう。ただ、両者のいすれが寺域北限であるかについては決しがたく、今後の調査を待ちたい。



第9圖 海南王森北方遺構圖

(山本忠尚・岡本東三・綾村 宏・中村雅治)

平城宮跡発見の殿堂雛形部材

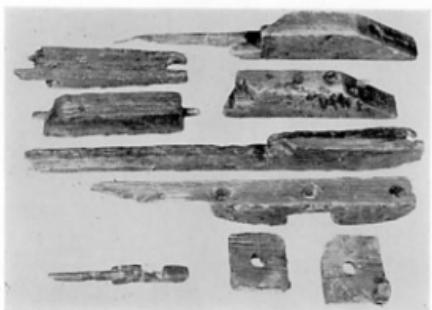
平城宮跡発掘調査部

推定第1次内裏の南面を画する築地回廊の東寄りにある樓風建物S B7802は、1973年に発掘した。今回、この掘立柱抜取穴から出土した木製品を調査整理する過程で、建築模型の斗構の部材が含まれていることを確認した。

部材 部材は何れも桧材で、側通り肘木1丁、通肘木1丁、尾垂木を受ける肘木2丁、卷斗1個、方斗1個、入側束1丁、同断片1丁、軒天井組子断片1丁、土居桁らしいもの1丁その他にも同じ模型に属するらしい部材の木口部分等があった。

側通りの肘木は現存全長23.3cm、丈3cm、幅2.5cm、肘木長さ14.8cm、両端の太納穴心々は12.6cm、相欠上木の仕口を持ち、一方の木口に長いつなぎが作り出されている。他方は折損したらしい。このつなぎの長さからみて、柱間寸法が23.3cmを越える側通りの肘木であることがわかる。通肘木は先端を二手先を受ける肘木に作り出し、相欠下木で、上端に隅行の肘木の仕口を持つので、側通りの通肘木である。側柱通り相欠心から太納心迄12cm、丈3.1cm、幅2.3cm、現存全長30.5cmである。先端に巻斗の丸太納があるが、中間に太納穴がない。先端の斗で隅の柱通り尾垂木受け肘木を支える。尾垂木を受ける力肘木は2丁あり、2丁とも丈3.3cm幅2.5cmで先端を斜めに作り、ここに尾垂木を止める丸太納を立てる。先端の勾配は2丁でやや異なり、1丁は約5.2/10、他は約6/10となる。側通りからの出は2丁とも大差ない。この2丁は使われた層が異なるかもしれない。

斗には大斗がないが、巻斗と方斗が1個づつある。何れも完形ではない。巻斗は長さ4.1cm、幅4.0cm、斗尻は現在斜めになる。斗尻の一端は残り、斗縁の丈が1.4cmあり、かなり高い。全体の丈は不明であるが、長さの3/4位と見ると3.2cm程となる。方斗は上端に丸桁の組手を受けたらしい含みの底が残り、三手先の隅の方斗に当る。巻斗より大きく作られ、長さ4.9cm、幅4.5cmある。隅二重尾垂木の上にのると考えられ、斗縁はほとんど残っていない。

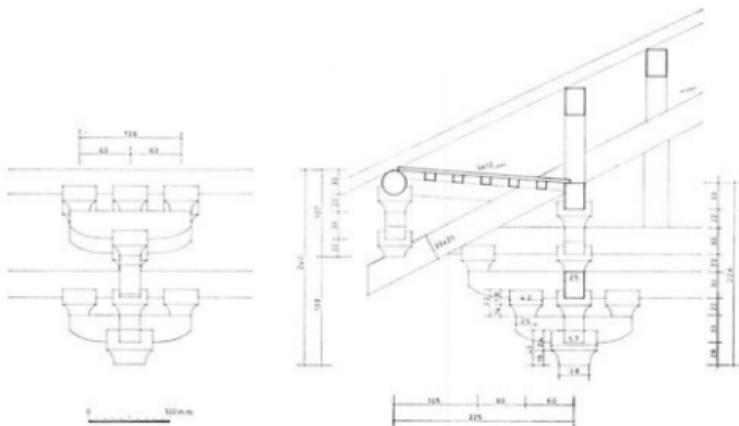


第1図 雛形部材

入側束は上端を斜めに作り、上下に丸納があり、内部で力肘木の上に立って直接尾垂木下端を受けていた。他にこれと同種材の断片が1丁ある。

軒天井組子は全長9.8cm、丈0.7cm、幅1.2cmあり、組子相欠きが2個所残存し、1支寸法は3.5cmある。幅はものままであるが、丈の方にはぎとられた痕があり、もう少し大きかったことがわかる。

土居桁は現存幅3.6cm、丈1.7cm、両端



第2図 三手先斗拱の復原

は折損するが、心々12cmの丸太納穴がある。柱盤や台輪としては部材が細いので、内部の束受けと考えられる。

復原 これらの部材からもとの構成を第2図のように復原した。大斗の大きさが不明でありまた三手先の出も明らかでないが、軒天井の納まり、並びに薬師寺東塔・海竜王寺五重小塔の出を勘案して推定した。二手先にのびる肘木の中間に卷斗の太納がなく、尾垂木を受ける力肘木には二手先の肘木と組合せ口がない。従って軒支輪がなく、軒天井だけであったと考えられ、薬師寺東塔に近い古式の三手先斗拱であり、現存例として薬師寺に続く海竜王寺五重小塔よりも古式のものと考えられる。

海竜王寺五重小塔と同じく奈良時代の製作になる元興寺極楽坊五重小塔は、肘木長さ14.2cm、卷斗太納心々11.8cm、丈3cm、幅2.4cmで発見部材とはほぼ一致する。海竜王寺五重小塔の初重肘木は長さ13.2cm、丈2.5cm、幅2.3cmでやや小さいが、卷斗幅は4.2cmあってほぼ等しい。

この発見部材がどのような建造物の模型であったか明らかでないが、実物の1/10を意識して作られている。三手先斗拱は斗拱のうちでも、古代にあっては最も複雑な構成であり、寺院であれば金堂・塔・二重門等の重要な堂塔にのみ用いられる。

現存する奈良時代の小建築が、前記の海竜王寺五重小塔・元興寺極楽坊五重小塔・正倉院の紫檀塔残欠等何れも塔に限定されていることを考えると、この部材も塔に用いた可能性も少くない。

部材を発見した樓風建物S B7802は、神亀頃の建立と推定され、柱抜取穴の埋上からは天平勝宝5年(753)の年紀をもつ木簡が出土しており、この模型の廃棄された時期もほぼこの頃とみてよからう。部材の数は少ないが、平城宮跡からこのような部材が発見されたのは初めてのことであり、しかも古式の三手先斗拱であることはきわめて興味のあることといえよう。

(細見啓三・岡田英男)

平城宮跡の整備(6)

平城宮跡発掘調査部

1975年度の宮跡整備は、第2次内裏内郭および内郭築地回廊基壇復原整備、第2次内裏外郭整備、緑陰帯造成、灌水施設、案内板、照明灯の設置を行った。

第2次内裏内郭築地回廊基壇復原整備 1974年度に東棲をふくむ築地回廊東南隅部を復原整備したが、今年度はこれに接続する東面回廊を延長し、北へ78.5m分施工した。発掘次数でいえば第3・70・73次にあたり、門2ヶ所(SB7951, SB6900)を含む桁行20間分である。この部分では築地心より2.5m以東は、南北に通る市道と大正時代に整備した側溝のために遺構が確認できず今回も施工していない。

復原にあたっては遺構を保護することを第一義とし、かつ往時の姿を再現しようとするところから、1 遺構面より一定寸法のレベルアップをする。2 遺構での多少の施工むらは除き、基準方位・基準寸法を設定するという方針をとった。1に関しては、既施工の東南隅部で採用した70cm高が、次年度予定している東面中央部での井戸跡現寸遺構模形据付けのために支障がないことを確認したのでこの数値をとった。一方勾配はこの2点を直線で結ぶ南から北へ昇る1.25/1000の勾配とした。2に関しては次年度以降の施工のこともあり、現在までにはほぼ完掘

している東面築地回廊全長にわたっての検討が必要であった。遺構上で方位がひろえるのは次の4条であり、それぞれ平城宮実測方位より北で西に振れる傾向がある。

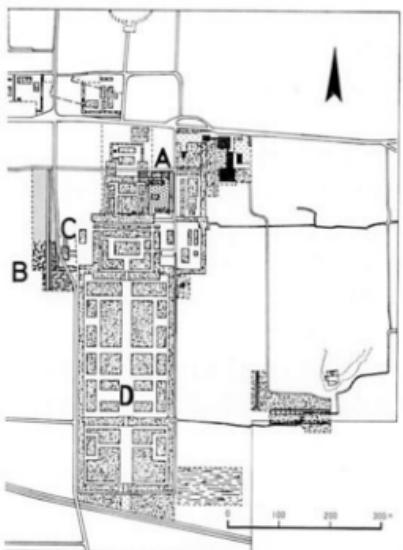
イ、築地東寄柱心—東面全長で5個の礎石が残存しており、それを結ぶ線は4.35/1000西偏。

ロ、築地西寄柱心—62m隔たった2個の礎石で3.10/1000西偏。

ハ、西側柱心—井戸位置での2個の礎石では3.54/1000西偏。

ニ、西雨落溝—比較的の残存状況の良い6地点で4.19/1000西偏。

この4つの数値のうち、ハが発見した礎石およびその周辺遺構の残存状況が他に比較良好であること、4条の平均的な数値であること、北面築地回廊との関係とも矛盾しないことなどから最も妥当なものと考



第1図 平城宮跡整備図

え、今回はこれを採用した。

この結果、北面築地回廊との角度は $90^{\circ}12'10''$ の鈍角となった。現在までの発掘で南面は北面と平行であることが認められるから、築地回廊一郭は正方形とはならず、平行四辺形、あるいは台形であることが考えられる。また、この角度が東面築地回廊全長（南北築地回廊心々）185.96mに対し実長として66cmとなりその数値が比較的僅少であるところから、当時の施工誤差とも考えられる。平城京の条坊方眼も東西方位に対し、南北方位の振れが大きいとみられるから、これとの関連においてさらに検討を加える必要があろう。いずれにしても西面築地回廊が未発掘である現時点ではいざれともきめがたい。

ちなみに平城宮跡の発掘調査で使用している方位は、この北面築地回廊の北雨落溝の東西線を基準にしたもので、国土方眼よりも $0^{\circ}07'47''$ 西で南偏する。

柱間寸法については、東面での3個所の門も他の間と同一寸法であるから、全長を総柱間数48で除すと1間が3.874mとなり、13尺（1尺=29.8cm）の整数を得る。梁間寸法も桁行と同様に13尺である。

なお、今年度施工区では築地回廊のほかに、掘立柱建物5棟および内裏掘立柱回廊東北部などの盛土、張芝による遺構表示を行った（第1図A）。

緑陰帯造成 1974年度から始めた緑陰帯造成を、今年度は南へ約105m（5100m²）延長した。遺構表示として、前年同様第2次内裏外郭築地の西側を流れる南北大溝（S D3715）を和泉砂岩割石で護岸し表示した。植栽については、西側からの大極殿や東山等の眺望をさまたげないよう1本/250m²程度の密度におさえた疎林とした（第1図B）。

内裏外郭整備 第91次発掘調査により確認された第2次内裏外郭築地西南隅の門と築地塀、および礎石建物1棟を含む約3000m²について整備した。これら建物遺構は、宮跡中央を南北に走る市道によって分断されているため、一部表示出来なかった。門および築地塀は平均70cm、礎石建物は平均40cm盛土してその規模を表示し、表面は張芝とした（第1図C）。

その他 第2次朝堂院・朝集殿地区に灌水施設として自動散水装置（スプリンクラー80基、散水栓2基、第1図D）、照明設備（木銀灯4基）案内板（遺構名稱板8基）を設置した。

（渡辺康史・細見啓三）



第1図 第2次内裏外郭の整備

平城宮跡第3収蔵庫の建設

平城宮跡発掘調査部

1968・1969年度に資料館と第1・第2収蔵庫を建設して再出発した調査部における施設整備の第2段階として、このたび北接位置に第3収蔵庫を増設した。

これは増加する一方の出土遺物の収藏のほか、仮設プレハブで行っていた遺物の清掃整理や保存科学的処理の作業環境を改善すると同時に、長い間の懸案であった発掘作業員の着替所を設けることを目的としている。いわば、調査部の発掘作業と出土遺物の処理に密着した部門を統合したものである。

建物は宮跡内であることから、遺構に影響をあたえないこと、環境を著しく損わない意匠であること、将来撤去可能であることなど、資料館建設当初の基本計画にもとづき設計された。

東西棟の1階は収蔵庫と警備室にあてる（一部を間仕切って仮に埋蔵文化財センターの事務及び研究室として使用）。収蔵庫は保存処理をほどこした木器の収納棚、処理前の木器をいれる水槽、真空凍結乾燥処理をほどこした木簡などをいれる空気調整装置をつけた特別保存庫からなる。2階は遺物整理関係の作業室であり、各室に水洗場をそなえる。木器、金属整理室には金属の整形過程に生じる粉塵を吸収するための装置をつけた。瓦整理室には、土ぼこりを吸収するダクトをつけた作業台を設置した。なお、階下からの遺物の運搬にはリフトを使用する。

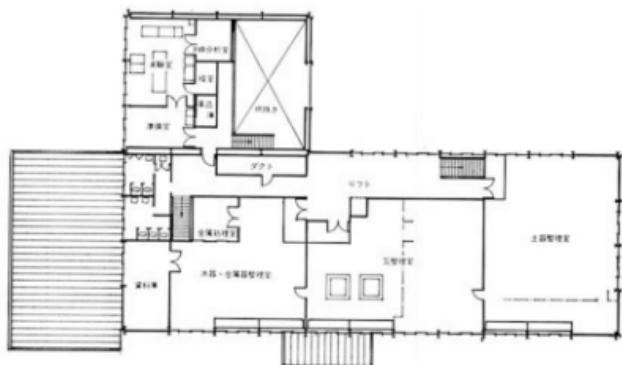
北面の張出部は、保存科学部門を収容する。1階のP.E.G.含浸処理室は、木製品に対してボリエチレン・グリコールを含浸する。大型の柱材にも対応しうるよう全長6mの含浸タンク2機をそなえる。大型遺物の移動を円滑にするためホイストをもうける。室内が高温多湿になることを配慮して天井に大型排気装置をつけた。樹脂含浸室は、金属遺物にアクリルエマルジョン等の合成樹脂を含浸するための部屋である。真空含浸装置を中心とする器材をおき、有機溶剤による公害対策として、室外に活性炭による濾過装置をおく。凍結乾燥機室では、凍結乾燥によって木簡などの木器を保存する。乾燥機のほかT.B.A.による前処理装置や簡易防爆装置をそなえる。戸外には柱根などの大型木器を一時的に保管する水槽を設けている。

2階の実験室では、木簡削片の保存処理、ならびに保存処理に関する基礎実験、材質分析等を行う。このため、木簡削片プレパラート製作機、実験台、ドラフト、恒温恒湿機、X線回折、蛍光X線分析装置等をおく。X線分析室では、鉛などで隠れた形や文様をレントゲンで透視し修理などの処理にそなえる。装置は100KVと160KVの2種あり、使用目的に応じて使いわける。このほか2階には準備室・暗室・薬品庫などを設けている。

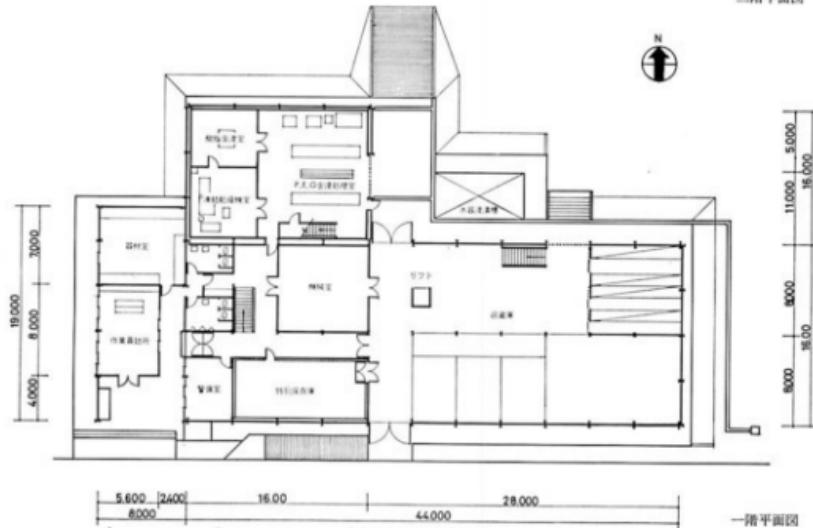
基本設計は入江・三宅設計事務所が行い、実施設計および工事監理は建設省近畿地方建設局があたった。施工は株式会社森組である。なお、次年度以降、同規模の施設をこの北側に増設し、全体を東向きのコ字形にまとめて、資料館を中心とする発掘調査用施設整備は一応完了することになる。

（細見啓三・町田 章）

平城宮跡発掘調査部



三階平面圖



第3收藏庫平面圖

建筑概要 建 筑 面 积 1,061.9 m²

延面積 1階: 1,061.9 m², 2階: 826.3 m², 合計: 1,888.2 m²

構造および仕上げ　主体部、鉄骨造。屋根、コルテン鋼山型プレート葺。外壁、A・L・C版、一部C・B積み、色モルタル吹付け。内部床モルタルコテ押さえ、一部フローリング張り。内壁、A・L・C版、C・Bあらわし、西北保存科学一郭のみA・L・C版張り間仕切り壁、C・Bまたはアスベストトラックス。天井、軽量鉄骨下地フレキシブルボードまたはプラスチマーボード打上げ。屋根鋼板下、断熱材吹付け。

飛鳥・藤原宮跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、1975年度の調査として藤原宮跡で、藤原宮北面中門を調査。藤原宮跡で右京七条一坊、八条大路と西三坊大路の交差点付近等を調査し、藤原宮跡復原に貴重な資料を得た。また飛鳥地区では大官大寺の中門・南門地区を、和田庵寺では塔周辺をそれぞれ調査した。主な調査地域とその期間、面積などについては第1表のことである。

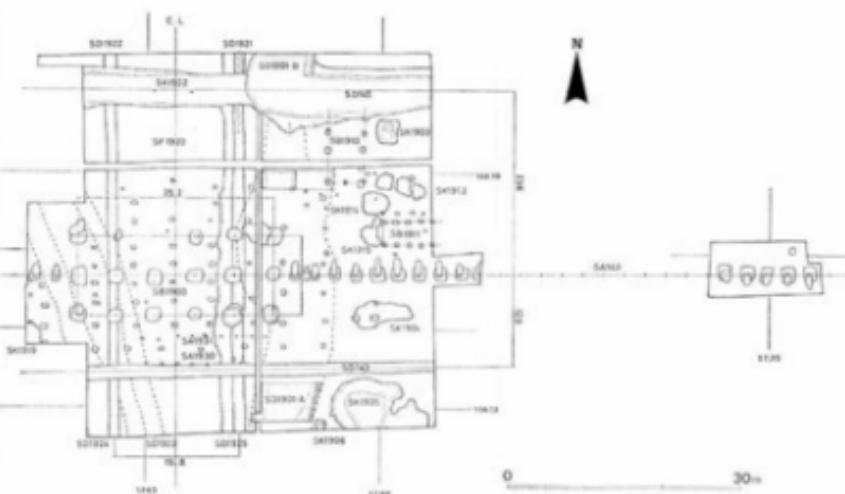
藤原宮北面中門 この調査は現在までの調査成果から推定される藤原宮の北面中門を検出し、その位置および規模・構造を確認すること。またその成果と第1次調査として実施した宮面中門の調査成果とあわせて現在なお不明確なままになっている藤原宮の中軸線を確定すること、以上の2点を主要な目的として実施した(口絵7)。

検出遺構は、藤原宮造営前(A期)、藤原宮期(B期)。その他にわかれ。

北面中門S B1900に平行5間(延長25.2m)、梁間2間(延長10.1m)、柱間17尺(5.04m)等間の平面規模をもつ大規模な礎石建物であり、その規模は平城宮朱雀門にはほぼ一致する。後世の削平のため、基壇土や礎石掘えつけ痕跡は全く検出されなかったが、礎石位置に限定された掘込地形の痕跡からその規模を知りえた。S B1900に伴う基壇やそれをめぐる雨落溝などの痕跡は全く遺存しなかったが、外濠SD145より礎石切石片が出土しているから、基壇化粧は礎石切石で行ったものであろう。北門S B1900に伴う足場SX1899は、方60cm前後の掘形から成るもので、S B1900の柱位置の間にはほぼその柱筋を掘えるものと、S B1900の外側をめぐる1列を検出した。柱穴には柱痕跡を残す例があり、また抜き取痕が全く認められないことから、基壇上面の化粧前にその上半部を切り落したものと考えられる。北面大垣SA140は北面

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6 AJH	藤原宮跡17次	75. 4. 3~6. 14 19. 1~11. 4	26.3a	右京七条一坊
6 AJE	藤原宮跡18次	75. 6. 3~ 76. 1. 12	26.0	藤原宮北面中門
6 AJE	藤原宮跡18-1次	75. 5. 2~5. 10	1.2	
6 AJF	藤原宮跡18-2次	75. 6. 4	0.3	
6 AJE	藤原宮跡18-3次	75. 5. 30~6. 2	2.2	
6 AJC	藤原宮跡18-4次	75. 7. 3~7. 7	0.18	
6 AJG	藤原宮跡18-5次	75. 8. 11~9. 17	1.5	
6 AJF	藤原宮跡18-6次	75. 1. 8	0.3	
6 AJC	藤原宮跡18-7次	75. 2. 25~2. 26	0.03	
6 BMY	本龍寺	76. 1. 22~2. 27	4.5	本龍寺西面隅、八条大路、西三坊大路の交叉点
6 BTK	大官大寺第2次	75. 5. 6~ 76. 1. 30	28.0	中門・南面回廊
5 BWD	和田庵寺第2次	75. 10. 29~ 76. 4. 3	28.6	塔跡
5 ATN	田中遺跡	76. 1. 14~3.	3.5	右京十一条一坊
6 BKH	川原寺	76. 1. 12~1. 14	0.4	
6 BKH	川原寺	76. 1. 12	0.1	下層階段の延長部

第1表 1975年度発掘調査状況



第1図 藤原宮北面中門遺構図

時 期	遺 構	内 容	時 期	遺 構	内 容
A 期	SD1923	SD1922より古	B 期	SD1901A	S B1900、S A140より古、瓦・木筒出土
	SD1924	SD1922より古		SA 140	北面大廈
	SD1925	SD1921より古		SD 143	内濠
	S F1929	余淮大路計画地		SD 145	外濠
	SD1921	S F1920東側溝		SD1901B	
	SD1922	S F1920西側溝		S B1900	北面中門闕石建物 5間×2間
	S B1910	南北溝 4間以上×2間		S X1900	S B1900の足場
	S B1911	東西溝 4間以上×1間		S X1902	横脚
	S K1913			S K1903	木筒出土
	S K1914			S K1904	
	S K1915			S K1905	

第2表 藤原宮北面中門の遺構

中門以西で2間分、以東で未調査部分を含めて26間分、総長68.6mを検出した。柱間はややはらつきがあるが、平均2.64m(9尺)等間に復原できる。なお調査範囲内では脇門に相当する施設は検出されなかった。内濠S D143はS A140の南12m(40尺)を流れる溝で、幅1.5~2m、埋土から大量の瓦と土器、木筒が出土した。外濠S D145はS A140の北23.6m(80尺)に位置する幅4.5~5.5mの大規模な溝である。北流する南北溝S D1901Bに接続する部分ではS D145南岸が幅20mにわたり削られている。またS D145の北門S B1900の中央に対する位置には、横脚S X1902があり、方20cm余の角杭を打ち込んでいる。このSD145の埋土からは瓦・土器・木製品と大量の木筒が出土した。3個の土壙のうち、SK1903からは、瓦・土器に混って「頬王」

- ・「猪使門」の二つの門号を記した木簡が出土した。これによって北面中門を猪使門とする有力な見知を得た。

北面中門・大垣・内濠の造営に先立って埋められた南北溝 S D1901Aは、ごく一部を調査したに止ましたが、やや蛇行しながら北流する幅6~8mの溝で、龐大な砂堆積からみるとかなりの水量があつたらしい。これは宮中心部造営に関する溝と考えられ、下層より磨耗した瓦とともに木簡、手斧の削り屑などが出土した。このS D1901Aが埋められた時期には後述のA期の道路S F1920の側溝は埋没していたようで、黒褐色の整地土がS D1901Aの上層とS F1920の東側溝をおおっていた。ただ、S D1901AとS F1920とが一時期併存した可能性は残されている。なおS D1901AのS D145以北の部分はS D145の開墾後もそれに連続する藤原宮の基幹水路の一部として使用されることになった(S D1901B)。

北面中門に重複して検出された南北道路 S F1920は、正しく宮中軸線上に位置しており条坊朱雀大路計画線の宮内延長部に当るものと考えられる。東西側溝間の心々距離15.8m、路面の幅員15m前後を測る。この S F1920の設置時期は、藤原宮造営直前の7世紀の第4四平期の中にあることが重複する南北溝 S D1925の遺物から判明した。

以上、今回の調査によって得られた知見を記したが、最後に過去の調査成果と合せて宮中軸線について述べる。国土地理院第6座標系による宮南門S B500の中心位置はX= -167,021.1M, Y= -17,419.2M, 北門S B1900の中心位置はX= -166,113.4M, Y= -17,426.3M、これから求めた宮中軸線は北で西に26'30''の振れをもつ。

この調査は横原市営住宅建設に伴う事前調査である。調査地は日高山瓦



第2圖 鹿鳴京右京七条一坊遺構圖

窓のある日高山丘陵に北接する。藤原京条坊の復原によれば、右京七条一坊の地で一部が朱雀大路推定線にかかる。従って調査目標を右京七条一坊の条坊地割と日高山瓦窓に関連した跡瓦関係遺構の追求におき、七条一坊を東西に貫く形で東西約260m、南北約6mの発掘区と、日高山瓦窓に接する条間・坊間小路の交差する地点にそれぞれ発掘区を設定した。

調査の結果、西一坊坊間

小路の一部と坪境の跡、および井戸・溝・鉄造印跡・土壌等を検出した。なお朱雀大路、西一坊大路の痕跡は見出せなかった。遺構、時期は藤原宮期に属するものと、それ以前のものにわかるが、ここでは主体となる藤原宮期の遺構について述べる。

藤原宮期の遺構は、溝 S D1845・1856・堀 S A1855、井戸 S E1850・1860、鉄造炉跡 S X1847・1848・1849などがある。南北溝 S D1856は幅50~70cmの素掘りの溝で、西一坊坊間小路西側溝と推定される。藤原宮第16次調査で検出した道路 S F1732に連なるものである。ただし小路の東側溝は検出できなかった。堀 S A1855はS D1856の西約1.5mに建つ南北堀で、中間未調査部を含めて27間分(59.3m)確認した。おそらく四坪の東限を画する堀であろう。東西溝 S D1845は幅1.2mの素掘りの溝で、七条条間小路南側溝の推定位置に一致する。ただし、対応する北側溝を検出していないこと、後述の井戸 S E1850等が道路敷推定地内にあることからみるとこれを条間小路とすることには問題がある。ただ発掘範囲が限られたこともあり現時点では明確ではない。井戸 S E1850、炉 S X1847~1849は七条条間小路の道路敷推定線上にある。井戸 S E1850は井籠組井戸で、内法が80×90cm、深さ1.5mの井戸枠5段が残っていた。井戸枠内部からは和銅2年の紀年銘のある木筒や忍冬文を型押しした軒平瓦、藤原宮式の瓦片などが出土した。S X1847~1849は鉄造印跡で、いずれも径50cm前後、深さ20cm程の土壌である。内面が強く焼け内部及び周辺から銅滓・焼土・木炭を検出した。近くから出土した鎧範の存在とあわせてこの一帯に鉄造工房があったことをうかがわせる。なお、当初の目的の一つであった造瓦関係遺構は発見されなかつたが、東西溝 S D1845の上層からは焼け歪んだ瓦や窓壁の一部、焼土・木炭等が多量に出土した。この殆んどは日高山瓦窯に近接した部分に集中しているから日高山瓦窯から廻収されたもの一部であろう。出土遺物のうち日高山瓦窯に関連する瓦類について簡単に述べよう。従来、日高山瓦窯で焼成された軒瓦は6274Aが知られていたが、これに加えて軒丸瓦6233A・6275I・6279A、軒平瓦6643Aが出土した。丸瓦・平瓦はともに粘土紐巻き上げ桶巻作りで成形し、凸面に縦叩き目と刷毛目を残す例が多い。

本薬師寺西南隅の調査 この調査は橿原市営住宅への進入路新設に伴う事前調査として行った。調査地は本薬師寺金堂跡の西南方約100mの水田で、調査では、藤原京八条大路と西三坊大路を確認し、本薬師寺に関連する遺構を検出した。遺構の時期は藤原宮およびその直前の2期にわけられる。

藤原宮期の遺構 八条大路 S F101の幅員は側溝の心々で、15.9mである。北側溝 S D104には桶脚の一部とおもわれる S X108がある。S D104からは木筒が3点出土し、うち1点は「伊口皮古」と判読される。八条大路 S F101と直交する西三坊大路 S F102の幅員は、側溝心々で15.2mとなる。東側溝

第3回 本薬師寺西南隅遺構図

飛鳥・藤原宮跡の発掘調査

測	点	町	全長	1町の長さ	1坊の長さ
東西方向					
A	藤原宮C.L. ～今回調査	6	790.0m	131.7m	263.3m
B	藤原宮C.L. ～藤原宮第7次調査	3	397.5	132.5	265.1
C	藤原宮C.L. ～藤原宮第16次調査	1	136.9	136.9	273.7
D	藤原宮C.L. ～本薬師寺C.L.	5	662.2	132.4	264.9
E	藤原宮C.L. ～大官大寺C.L.	7	933.3	133.3	266.6
F	藤原宮C.L. ～紀寺C.L.	3	411.9	137.3	274.6
G	今回調査 ～藤原宮第7次調査	3	392.4	130.8	261.6
H	今回調査 ～藤原宮第16次調査	5	653.1	130.6	251.2
I	藤原宮第7次調査 ～藤原宮第16次調査	2	399.8	130.4	269.8
J	本薬師寺C.L. ～今回調査	1	127.8	127.8	255.6
南北方向					
K	今回調査 ～藤原宮第7次調査	7	928.6	132.7	265.3
L	今回調査 ～藤原宮第16次調査	9	1,196.3	132.9	265.8
M	藤原宮第7次調査 ～藤原宮第7次調査	2		133.9	267.7

第2表 藤原京条坊計測表

S D105には2時期にわたる構S X107A・Bがある。

藤原宮期直前の遺構 南北溝 S D110は堆積土のなかに本薬師寺所用瓦をふくみ、その西側の7世紀後半の土器を包含する整地土を切っているが、条坊地割の施工時点ではすでに埋められ、整地されていることが明らかである。また、この溝の東側には地山の上に薄く、黄色土の積土が部分的にみとめられた。これを築地の痕跡とし、溝 S D110をその西面落溝とみることが可能とすれば、本薬師寺の創建は条坊地割の施工に先立つことを意味する。

今回の調査によって、藤原京で初めて大路の存在を確認した。ここで、今回明らかになった西三坊大路心と本薬師寺両塔廻中軸線との距離をみると127.8mで、これまでの調査で明らかになっている平均値として得られる半坊の東西長133m前後に比較して約5mも短かく、御藍中軸線が西三坊の中心（西三坊坊間小路）に一致しない可能性が強い。これは本薬師寺の占地が条坊地割に先行するとみられる点からも十分考えられるが、逆に西三坊坊間小路自体が、本薬師寺御藍中軸線にあわせてつくられた可能性もあり。今後の調査にその結論をまちたい。

なお、宮の中軸線は方眼北に対して西へ26°30'振れており、仮にこの振れが条坊でも一致するとして、1坊の長さを求めたのが第2表である。多少のばらつきがあるものの、1坊の長さとして265m前後の値が得られ、おそらくこの値が藤原京条坊の1坊の計画寸法を示すのである。御藍中軸線との関係では、本薬師寺は先述の通りであるが、大官大寺の場合は御藍中軸線が左京四坊坊間小路心に一致するか否かはさらに検討を要する。また藤原宮造営前の紀寺の御藍中軸線は、条坊地割と無関係である。

最後に第2表に説明を加えておく。町は条坊制1坊の1/2を示す単位の仮称である。本薬師寺C.L.は両塔心礎の中点、大官大寺C.L.は講堂、紀寺C.L.は南門から求めた。なお、紀寺の資料は、櫛原考古学研究所との共同調査の成果による。

大官大寺第2次調査 中門・南面回廊の確認と寺域南限の確定を目的に行った。検出遺構は、中門とこれに取り付く回廊のほか、下層遺構として獨立柱建物、井戸、土壤等がある（図版7）。

中門 中門S B400は平面が5間×3間、桁行總長23.8m（79尺）、梁間總長12.6m（42尺）の巨大な門である。礎石割えつけ穴を割りつけると柱間は桁行中央間が5.1m（17尺）、両端間と

梁間の各間が4.2m(14尺)になる。基壇は掘込地形は行わず周間一帯にわたる整地の後、2層ほど積土し、一部に版築がみられる。礎石は基壇完成の途中で掘形を穿って据え付けている。基壇上には焼けた足場穴 SX 101がある。さらに焼けた建築部材の落下痕跡 SX 105がありなかには尾垂木の痕跡(木口34×20cm)や肘木痕跡(木口20×20cm)とみられるものがある。これらのことから中門は三手先の重層建築であったと考えられる。

回廊・回廊 S C 053は、中門東で6間分検出した。桁行3.9m(13尺)、梁間4.2m(14尺)の単廊で中門・回廊中央間と柱跡を揃えている。中門との取り付き部は削平され礎石は抜き取られている。これより以東の回廊礎石はほぼ完存していることからみて、この部分は中門に向って

登り廊になっていたと考えられる。基壇完成、礎石の据え付けは中門と同様である。

中門・回廊とともに基壇化粧の痕跡が全く無く、雨落溝もみられず、未完成の段階で焼亡したことが明らかである。なお、南門を求めて中門の南方約100mの旧河床 SD 150までを精査したが検出されなかった。完全に削平されたか、旧河川で流失したか、あるいは中門・回廊が未完成であることから南門は未着工であったことが考えられる。

下層造構 据立柱建物2、翼2、井戸2、土壙3などがある。いずれも7世紀後半の土器を伴う。これらは全体としていかなる性格の造構かは不明だが、大官大寺を含めたこの一帯を岡本宮に比定する説もあり、今後の調査の進展が望まれる。

中門・回廊の確認により、回廊南北長は外側柱間で約83m(276尺)、回廊東西長は140m程度に復原される。中門心と講堂心とを結ぶ伽藍中軸線は方眼北に対して約16°西偏し、岸後男氏復原の左京十条四坊の中心線とは正しくは一致しない。最近判明した宮中軸線の西への振れ

第4図 大官大寺第2次調査遺構配置図

26°30''とはかなり異なる値であるが、下ノ道の平城京内での振れ約17°と近似するといったよう問題は複雑である。その解決の諸口を握っているのが中ノ道の位置である。

和田庵寺第2次調査 横原市和田町字トノダの水田中に存在する大野塚は、古くから寺院跡とされ、書紀にみえる大野丘北塔比定説や葛木寺比定説などがある。また藤原京朱雀大路推定線に西接しており、藤原京条坊との関係が問題となっている。1974年度の調査に続き今回の大野塚周辺に伽藍中心部を予想し、この地域を調査した。

調査によって検出した遺構は塔・築地・掘立柱建物・廻・井戸・土壙等があり、大きく4期に大別できる。すなわち、A 塔造営以前の掘立柱建物第Ⅰ期、B 塔の造営から廃絶まで、C 塔廃絶後の掘立柱建物第Ⅱ期、D 掘立柱建物第Ⅲ期である。これらの年代は、Aが7世紀前半、Bが7世紀後半から8世紀後半、Cが8世紀後半から平安時代初期、Dが平安時代前半頃にそれぞれ比定できる。次に塔跡を中心に記述を進める。

塔 調査によって塚上に花崗岩礎石3, 根石2, 破石抜取痕跡3を検出し現存の塚は塔の基壇の西半部であることを確認した。基壇規模は基壇化粧の痕跡が残っていないためこの部分を除いて一辺が約12.2m(約41尺)に復原でき、間の柱間は約2.4m(8尺)等間となる。西側柱の2個の礎石はやや西に傾くがほぼ原位置を保つ。表面には円形柱座とその両脇に地盤座を造り出す。心礎は焼いて破砕し抜取られていたが、残存する根石からみて心礎上面高は四天柱及び側柱礎石の上面高とほぼ同一に復原できる。基壇の築成方法は旧地表を約40~50cm掘り込んで掘込地形を行っている。掘り込みの基底部には礎石を敷きその上に褐色土・黒褐色土の混った土を約30cm版築し、再び礎石を敷きさらに基壇上端まで版築する。塔の東南北は旧地表の削平が著しく、基壇の東面や南面では掘り込み基底部の礎が露出している。掘込地形と基壇の関係は、北面では掘込地形の外側まで基壇積土が延びている。基壇化粧は塔の周囲から延石とみられる凝灰岩切石が出土しているから、凝灰岩を使用していたと考えられる。

築地 塔の南側で東西方向に走る築地S A215を約22.5m検出した。築地の南側には寄柱の礎石据えつけ痕跡とみられる小疊を埋めた径50cm程の穴がある。柱間は3m等間で4間分残っている。寄柱をもとに築地基底幅を考えれば2.1m~2.4mとなる。

第5回 和田庵寺第2次調査遺構図

第3表 和田庵寺の遺構

軸線は方眼東西に対し東で南に約6度偏している。築地の時期は塔に伴う場合と、方位からみて掘立柱第1期に伴う場合が考えられる。

掘立柱建物・他 塔、築地の他に掘立柱建物約22棟、扉4条、井戸1基、土壙1ヶ所などを検出した。これらは塔との関係や柱穴相互の重複関係、建物方位、柱穴の埋土や出土遺物によって3期に大別できる。これらの遺構の詳細は第3表に示したところである。

遺物は瓦磧類が大半を占め、他に土器類、陶器、凝灰岩切石等がある。瓦磧類のうち軒瓦は大半が塔基壇上の擾乱土より出土し、整理途中の標数だが軒丸瓦は10型式161点、軒平瓦は7型式52点ある。

第6図 和田庵寺塔跡（西から）

第7図 和田庵寺塔基壇断面図

軒丸瓦は飛鳥から白鳳様式に及ぶが、全体の7割は山城高麗寺、法起寺出土例と同型式の複弁8弁蓮華文と川原寺創建瓦と同形の複弁8弁蓮華文瓦で、奈良時代に降る軒瓦はない。軒平瓦は、白鳳様式の瓦は少数で、8割以上は奈良後半期の6702型式が占める。土器は弥生式土器、土師器、須恵器、縁釉・灰釉陶器、青・白磁器、瓦器が出土し、施釉陶器や磁器はいずれも搅乱土中からの出土である。墨書き土器には「大寺」と記した7世紀後半の土師器杯がある。

以上述べたように、今回の調査地区内では遺構が複雑に重複している。当初の目的であった和田庵寺の遺構は塔跡を確認し、第地S A215がこれに伴う可能性を指摘し得るもの明確ではない。この他の伽藍についての手筋りは得られなかったが、軒丸瓦のうち3割は飛鳥末期様式の特徴を示しているから、塔に先立って別個の伽藍が建立されていたことはじゅうぶん考えられるところである。

田中遺跡 本調査は住宅建築工事に伴う事前調査である。調査地は和田庵寺塔跡の北方、約200m、馬立伊勢部田中神社の東方約100mの水田である。この付近は舒明天皇田中宮跡があったと想定され、藤原京条坊の推定復原では右京十二条一坊にあたる。調査の結果、獨立柱建物1、解1、溝1等を検出した。

南北解S A50は15間分、約31mを検出し、南北とも発掘地区外に続く。柱間は2.1mと2.4mがある。南北溝S D055は解S A050の西約2.4mに位置し、幅約80cmの溝で17.5mにわたって検出した。埋土からは7世紀代の土師器・須恵器が出土した。建物S B051は南北棟建物で桁行3間以上、梁間2間、柱間は桁行・梁間ともに2.1m等間である。以上の解・溝・建物は同一の軸線方向をとり、また柱間寸法も共通することなどから同時期のものと考えられる。ただし、調査面積が小さかったために遺構の全体配置は不詳である。さらに、今回検出した遺構が田中宮跡に関連するものか否かについては、なお検討を要する。 (金子裕之・千田順道)

第8図 田中遺跡遺構図

1975年度発見の藤原宮木簡

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1975年度の藤原宮跡及びその付近の発掘調査では総計619点の木簡が出土した。以下その概要を報告する(図版6)。

藤原宮北面中門付近出土木簡 藤原宮北面中門付近の調査では、外濠他2条の溝と一つの土壙から570点の木簡が発見された。うち、もっとも多量の木簡が発見されたのは北面大垣の外側を東西に流れる外濠SD145で、551点発見された。外濠は北面中門の東北にあたる付近で北へ流れる溝SD1901Bにつながる(P.43 第1図)。SD1901Bは発掘面積も少なく、外濠の東半部と同一の流れなので、ここから出土した木簡も外濠出土木簡の中にふくめている。また北辺の外濠は1967年に奈良県教育委員会の行った調査によって東北隅付近が検出され、800点にちかい木簡が出土している。今回の調査で発見された木簡の内容と、以前に発見されている木簡の内容とは、とくに顕著な相違点は認められない。紀年銘木簡は持統5年(691)から大宝3年(703)のものまである。

記載内容でとくに注目すべきものとして、次のようなものがある。文書木簡のうち文書形式の注目されるものとして、1. (表)「卿等前恐々謹解□□□」(裏)「□□受給
(拂か)
請欲止申」2. (表)「恐々受賜申大夫前□」、(裏)「曆作一日二赤麻呂」等「大夫の前に申す(解す)」という書き出しをもつものがある。「充先+前」に申すという書式をもつものは平城宮出土の過所木簡(和銅年間)や奈良県の調査で発見された「彈正台笠吉麻呂請根大夫前拂子一二升奉貢方度」の例などが知られるが、公式令にはこのような書式ではなく、正倉院文書等でも類例をみない。令制の解や啓の形式が成立する以前の書式の名残りをとどめているのであろうか。また、(表)「口符處々塞鐵等受」と記した木簡は、塞鐵という他の文献史料にみられない官司名を記している。塞は文字どおりには「とりで」を意味するが、『万葉集』などでは塞を閑と同じ意味で使用した例もあるから閑司(せきのつかさ)を意味するものかもしれない。

貢進付札の木簡については、奈良県の調査のときと同じく評制記載の木簡が多数発見された。今回の発掘で新たに明らかになった評名は、尾張国知多評・春部評、美濃国各務評、近江国神前評、丹波国与射評、出雲国出雲評、阿波国板野評、伊予国久米評・宇和評、飛彈国(カ)大荒城評等である。これらの貢進付札については、奈良県調査のものもふくめて記載形式において注目すべき点がある。それは「年月日+国名+評(郡)名+里名+個人名」という形式を原則としていることであって、平城宮木簡の場合がすべて「国名+郡名+里名+個人名+年月日」という形式をもっていることと対称的である。後者は『令義解』等にみえる養老賦役令調査皆隨近条の規定どおりの書式であるが、前者はそれと異なる書式である。前者のうちもっとも



文書木簡

新しい年紀をもつものは、今回発見した「大宝三年十一月十二日御野国輸皮十斤」と記したもので、後者のうちもっと古いものは同じく大宝3年と推定される下毛野国足利郡の貢の付札（後述）である。したがって、書式の変化はほぼ大宝令施行後数年のうちに行われたものと思われる。

また、これまで藤原宮では発見されていなかった「調」と明記した木簡がみつかっている。1、「丁酉年若狭國小丹生評岡田里三家人三成」（裏）「御調塩二斗」、2、「乙未年御調寸松」とある2点がそれであって、淨御原令制下における調の付札としてははじめてのものである。

次に、外濠S D145の南岸にある土壙SK1903から12点の木簡が出土している。その中で注目すべきものは次の3点である。1、「於市□遣糸九十斤」（表）「月三日大属從八位上津史岡万呂」、2、「九月廿六日蘭鐵進大豆卅□」、3、「下毛野国足利郡波自可里鮎大贊一古參年十月廿二日」。1は綾王門（達智門）、猪使門（卯齋門）等の藤原宮の宮城門の門号が見えること、また市の記載のあることなどから、藤原宮宮城門の門号および位置の問題や、藤原京の市の所在地等について興味深い示唆を与えている。2では蘭鐵という令制には見られない官司名がみえる。これは奈良県の調査で発見された木簡にある蘭官・蘭司等の官司と同一官司である可能性がある。そうであるとすれば同一官司が三様に呼称されたことになり、淨御原令制下では省察職司といふ官司の上下関係がまだ未完成であったと推定される。3は貢の付札であるが、末尾の「參年」は年号を省略してもわかるものとすれば大宝3年が考えられる。この他2条の溝（SD140およびSD1901A）からも木簡は出土したが、訛読できるものはない。

藤原宮東辺外濠出土木簡 藤原宮東辺外濠（SD170）の北限から南へ約560mのところで農業用納屋の建築とともになう緊急調査を行い、外濠を検出するとともに、木簡計36点を発見した。そのうち頭著なものは「大宮□官奴婢」「大祐務正七位上□」等がある。

藤原京右京七条一坊出土木簡 樅原市日高山住宅建設にともなう事前調査を推定藤原京右京七条一坊の地点で行い、木簡計10点を発見した。そのうち9点は井戸SE1850から、1点は朱雀大路の西側溝から発見した。そのうちで頭著なものとしては、井戸SE1850から出土したもので、（表）「第十八 敬嚴 三慧飛 貢 賢□飛」（裏）「尊體飛 頂歲飛 〔井カ〕」と記した文書木簡がある。僧侶の名を列記したので、「第十八」としているところをみると某經典の卷18を各僧にわりあて、写経させたことを示すのであろうか。「飛」とある注記を飛鳥寺のこととすれば、僧侶は飛鳥寺のものということになる。貢進付札としては「丹□國加佐郡白薬里大贊久已利魚腊一斗五升和銅二年四月」がある。

藤原京右京八条三坊出土木簡 樅原市の道路建設にともなう事前調査を藤原京右京八条三坊（本薬師寺P.45参照）の西南隅で行い、八条大路の北側溝の中から木簡計3点を発見した。なかには咒符と思われるもの1点があるが、記載内容として頭著なものはなかった。（鬼頭清明）

藤原宮跡の整備(1)

飛鳥藤原宮跡発掘調査部・平城宮跡発掘調査部

1971年度から始めた藤原宮跡地の買収は1974年までに約70000m²を終了しており、それらは大極殿北部一帯に比較的まとまっている。大極殿・朝堂院地区については、一部を戦前に日本古文化研究所の発掘調査で確認しているが、その規模や位置などはまだ明確になっておらず、本格的な整備を行うためには今後の発掘調査をまたなければならない状態である。

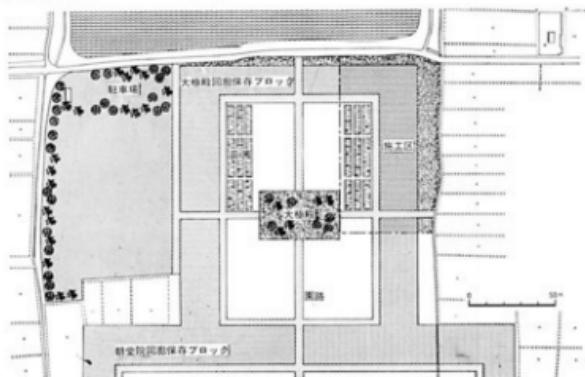
現在、買収地については草刈り程度の整備をしているが、地元からの強い要望や櫛原市の都市計画等に関連して、宮跡の将来図が必要となった。将来図の基本構想に関しては、宮跡が飛鳥・藤原地域をめぐる周遊の起点あるいは終点になるため、アプローチの問題や、大和三山を周辺にもち、平城宮とは異なる風土と景観をもつ地域であること、周辺の水利・発掘調査など多くの問題の検討が必要であるが、比較的まとまっている買収地を持つ大極殿・朝堂院地区について5年程度の第1次暫定整備計画をつぎのように作成した。

1. 一部発掘成果をえた大極殿・朝堂院およびその回廊など宮の中心的遺構を整備表示することにより、遺跡を理解し易くしその活用を計る。2. 規模・位置など全貌が確認されていない遺構は、推定位置の両側にさらに最低5mの幅を保存ブロックとして造成し、砂利敷など将来の発掘に支障のない材料を用いて、位置を表示する。3. 大極殿が遺跡の中心であり、現在の大極殿土壇が大和三山や藤原宮の展望地になっていることや土壇上の森が藤原地域のランドマークにもなっていることから、大極殿を中心に利用動線を計画する。4. 回廊に囲まれる地域は観賞を主体とするような利用を考え、植栽に重点を置き、将来本格的整備に利用すべき樹木の苗圃にもなるよう静的な空間として計画する。5. 買収地内通過用水路や排水路は、回廊両側溝を利用して設け、遺構表示との混乱を避ける。6. 大極殿回廊北西部(発掘済)の遺構の

希薄な地区においては利用者のために、便所等の便益施設あるいは自転車、自動車の駐車場を考える。

以上の趣旨にそって本年度は大極殿東北部にあたる旧鴨公小学校跡地約6500m²について整備を行った。

(渡辺康史)



藤原宮跡整備図

和田庵寺出土鶴尾の復原修理

奈島藤原宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

1974年に実施した和田庵寺第1次調査で発見された鶴尾について、復原修理を行った。3型式5個体分の鶴尾片が出土したが、今回はこのうち、残りのよい1号鶴尾を復原した。

1号鶴尾は頭部下端の左右を欠くなど、若干の欠損部分があるとはいえ、全形をうかがうには絶好の資料である。細片を除いて55片にわざて残存し、破片の総重量は136kgであった。

復原に先立って、破片にはバインダー17原液を減圧含浸させ、個々の破片を強化した。接合にあたっては、破片を数個づつ接合してブロックをつくり、これを順次組立てた。接着には強度と粘りのあるエポキシ系接着剤（アラルダイト・ラビッドタイプ）を使用した。

組立てはヒノキの台板（120cm×90cm×5cm）上で行い、台にのせた状態で運搬・展示できるように配慮した。この台に高さ100cm、径10cmの支柱を取り付け、これからさらに枝木を張出させた。これは鶴尾の胸部および尾部の荷重を内側から支え、分散させる目的である。ブロック状に接合した破片は、各々で相当の自重をもち、組立途中での歪みを防ぐため、全体を短時間で組上げることが要求された。その際、接合面積の小さい部分では、ステンレス製針金（径2mm）を柄・端として用いながら補強した。欠損部の補修には石膏を充填し、欠損部分が大きいときにはステンレス針金を縦横にわたして心とした。また、胸部前端の下に木心をいれて補強することにした。この過程に要した接着剤は約6kg、石膏は約7kgに達した。

組立がおわったのち、接合部の目地埋めなど細部の仕上げを行い、石膏補修部分に着色を施し、復原修理は約2ヶ月をへて完了した。着色顔料は水彩絵具、砥粉、木灰などである。

つぎに、復原後の計測値を記しておく。

総 高	127.7cm	基底部後端幅	72cm	基底部前端幅	48.5cm
頭部高	46.5cm	基底部長径	74.5cm	重 量	約150kg

復原の完了後、写真測量を行った。遺物の撮影に際しては、投影面をどこに設定するかが問題になる。今回は鶴尾頭部にあるヘラ書き線と底部中心とを結び、これを基準にした。

正面図をみると、中心線がわずかに逆S字形に彎曲しているが、製作時に生じたものかどうかは検討をする。左側面図において、復原部分では等高線が規則的に表現され、他の部分と明確に区別できるのは注意をひく。撮影および図化の仕様はつぎのとおりである。

カ メ ラ	クローズアップレンズ No.	図化縮尺	1:2
乾 板	イルフォード 9×12cm	等 高 線	正面 2.5mm, 側面 2 mm
写 真 缩 尺	20	作業範囲	写真測定研究所
図 化 機	1 スチレオメトログラフ E型		

（西村康・甲斐忠彦・山田猛）

和 田 麗 寺 鳥 尾

吉備媛王墓猿石の模型製作

飛鳥資料館

飛鳥資料館では屋外展示物として、飛鳥に関連ある石造物の模型の製作を進めている。その最初として、明日香村下平田の吉備媛王墓敷地内にある4体の猿石の模型を製作した。この製作にあたっては、宮内庁書陵部、同歴史監査課事務所及び、地元下平田の好意と配慮をうけたことに感謝したい（図版8）。

猿石の位置は、これまで度々移動していることが知られている。元禄15年下平田池田の田舎下より出土した、猿・法師・男・女と呼ばれる奇怪な石造物は、『今昔物語』に記載されているように、復原的に欽明陵古墳（梅山塚）前方部南側の濠際に立てられたらしい（率田率男氏藏、梅山塚図 第1図）。その後、吉備媛王墓（金鳥塚）の現在地に移されたものである。

吉備媛王墓の林間から垣間見える奇怪な姿は、いずれも、表情豊かで、両手を腹や胸で合せている。手指は4体とも5本揃い、下半身には陽物を表現したるである。猿・男・女の3体は二面石で、背面には表面と違った全身の浮彫を施している。とくに両耳のうしろには毛髪を示す羽状の線がみられる。手指は3・4本と表面より少い。うち2体はうずくまつた姿をしている。背面像は獣形をしていて、全体の相貌から推して♀であろう。高取城入口道端に運ばれた猿石も背面欠損部に毛髪の一部が残存しており、この3体と一連のものである。法師は背の肋骨を表現した筋肉質の单身像で、最も人間らしく、他の3像とは手法にも違いがある。

模型は乳白色のシリコン系樹脂を何度も焼り、布で厚みを持たせながら固定させ、範抜きを行った。鉄込みは、無色のエポキシ系樹脂と花崗石を混合して、表皮となし、内側はロービングクロスとガラスクロスを芯に埋込み、裏打の補強をした。模型をつくるに際しては、奇怪な形状だけではなく、石質の差異について、気を配った。そのため、実物の詳細な調査を作成

第1図 梅山塚の猿石

第2図 猿石の模型

し、各部分ごとのサンプルをつくって、照合をくりかえした。4体の猿石は、すべて飛鳥地域特有の花崗石で作られ、黒色砂岩の斑点、縞状の質感や、石材の色調が単一ではなく、微妙な違いがある。この質感に合わせるため、実物の石質に最も近い明日香村細川谷に分布する花崗岩と黒色砂岩を粒状に砕き、樹脂を接着剤として埋込んだ。鉛込みについては、表面に花崗岩が露出するよう、樹脂を拭きとったため、従来のエボキシ系樹脂の着色のみによる仕上げより、質感を一段と近づけることができた。また、裏面を防ぐ利点ともなった。実物には、永年にわたる苔が付着しているが、模型にも新たな苔が生えるため、再現しなかった。

今回の模型は花崗岩を多量に使用したため重量が増し、最大の猿石は約100kgになった。そのため、屋外への設置は、安全性を考慮して、内部に鉄骨を組み、コンクリートで固定した。なお、1976年度から一般に公開している。

(猪熊兼勝・星山晋也)

遺跡判読のための空中写真の撮影条件について

埋蔵文化財センター

地下にある遺跡が、ソイル・マーク、クロップ・マークとして、空中写真上に記録されることがあることは、我国においてもかなりの例が知られている。

それらの例は、地形図作成のための写真撮影によって、いわば偶然に見つかったケースが多く、イギリス・ドイツなどにおけるように、それを目的とした組織的調査は行われていない。したがって、ソイル・マーク、クロップ・マークについての最適撮影条件に関する研究も行われず、何も判らないのがわが国の現状である。この場合の撮影条件としては、使用感光剤・撮影時期が挙げられる。

埼玉県稻荷山古墳を中心とした、「さきたま古墳群」の写真が収集できたのを機会に、東洋航測株式会社の協力を得て、さらに写真の種類を増し、撮影条件の検討をした。検討に使った写真は第1表に掲げたとおりである。

パンクロ写真；1968年1月撮影の写真（第1図）には、極めて鮮明なソイル・マークがみられる。土壌水分の多いところが黒っぽく、水分の少ないところが白っぽく写るのが普通であるが、ここでは、それが逆になっている。即ち、削平された前方部とか、周庭部が黒っぽく、埋められた周溝が白っぽく写っている。この遺跡は今は水田化されているが、ロームに覆われた台地上にあり、同様な地形条件にある茨城県の長者曲輪、栃木県の塚山古墳の場合は、溝の部分は黒っぽいという一般的な色調を呈しているので、削平後水田化されたところに現われた特殊な現象と言えよう。1970年5月撮影の写真では、マークはぼんやり見える程度で、同年10月撮影の写真では全く見えない。

赤外カラー；(1975.8.撮影)梅塚およびその周辺の雑草地の部分に円墳の周溝がよくでている。しかし、水田中では、円墳も、稻荷山古墳の周溝も写っていない。ちょうど稻が成長し切って最も緑の活力が大きい時期である為、遺構の影響が現われていない。赤外カラーは、新緑の頃か、枯れはじめる頃のように、緑の活力が土壌条件を敏感に反映する時期がよいことが、北海道教育委員会が行った、堅穴住居跡・チャシの分布調査によって明らかにされた。

ナチュラル・カラー；(1975.1.撮影)円墳は明瞭であるし、稻荷山古墳の周溝も一部はっきりと見える。

マルチ・バンド；上記3種の写真は、それぞ

周溝についてである。

第1表 「さきたま古墳群」空中写真

れ撮影時が異なるので、感光剤による比較検討は厳密に言えはできない。その短所を補うために、マルチ・バンドカメラによる撮影を行った。マルチ・バンドカメラは、1台のカメラに4個のレンズがあって、一度に同一箇所を4コマ撮るようになっている。4個のレンズに、ブルー・グリーン・レッド・赤外それぞれの波長帯の光だけを透過させるフィルターをつける。つまり、同一被写体を4つの波長帯に分解して撮影するということになる。合成装置を使って、ブルー・グリーン・レッドを組合せれば、ナチュラルカラーになり、グリーン・レッド・赤外を組合せれば、赤外カラーになる。個々の波長帯でのマークの状態は、表のとおりである。いろいろ組合せを変えてみたところ、2種の組合せでは、ブルーとレッドの組合せのものが、最もよくマークが見えた。

サーマル・マッパー；赤外線よりも長い波長をもつ熱線を検知し、被写体の温度の高低を黑白写真に現わす装置である。遺構のある部分とない部分では、含水量が異り、異れば温度差があるだろう、という仮定のもとに、検査を行った。しかし、太陽光の反射エネルギーが強く、期待した結果は得られなかった。

サーマル・マッパーを有効に活用するには、太陽光の影響のない夜間がよいが、航空界の現状から日没直後とか日の出前に限られてしまう。

サーマル・マッパーが遺跡の分布調査に使えるかどうかのチェックの一例として、千葉県加曾利貝塚において、日の出前にテストを試みた。第2図は、その熱線写真で、地表面の温度差が黑白の濃淡で表わされる。白い部分が最も温度が高く、真黒なところが最も温度が低い。

貝塚の部分は、周辺との色調差はないが、たまたま斜めに撮ったかたちになり、貝塚の形を強調した結果になっている。

以上まとめると、1. ソイル・マークを撮るには、パンクロでよく（カラーのような高価な材料を使う必要はないという意味で）、時期は、冬季がよい。2. クロップ・マークは新緑の頃か、秋に緑が黄色に変る頃に、色、特に緑の差をよく表わす赤外カラーか、ナチュラル・カラーで撮るといい。3. 热線写真については、撮影条件に不明な点が多く、今後、地上用のものでテストすることから始めなければならない。

（木全敬蔵）

埋蔵文化財発掘技術者研修の現状

埋蔵文化財センター

遺跡遺物等の調査研究のための技術者研修の実施は、埋蔵文化財センターの主要な業務のひとつになっている。標記の研修は、1966年度に当時の文化財保護委員会が企画し、平城宮跡発掘調査部で開催したものが第1回で、その後毎年継続実施され、1974年度のセンター発足後はさらにその拡大充実がはかられてきた。

第1回研修の実施された1966年当時は、都道府県教育委員会で、文化財の専管課のあるものはわずかに4府県、他は社会教育課内の係にすぎなかつたし、埋蔵文化財調査の可能な専門職員をおいたものもごくわずかであった。しかし、すでに名神・東名高速道路や東海道新幹線の建設工事にかかる遺跡の発掘調査も経験されており、1960年頃と比較すれば発掘調査届出件数は倍増し、その後の急激な開発の進行とともに発掘調査の増加がすでに予感されていた。こういった状況下で、地方公共団体における埋蔵文化財保護体制の充実強化が叫ばれ、そ

の一環として実施されたのがこの研修のはじまりだった。

今では、全都道府県に文化財と文化の専管課室が設置されており、埋蔵文化財担当の専門職員・嘱託も市町村をあわせると1,000名を突破している。それに対応するかの如く、発掘届出件数も、1966年度の4倍、約2,800件に達している。しかし、急激に増加し、1,000名をこえた専門職員等のうち、考古学の専門課程を履修し、専門家としての教育をうけたものは3分の1程度にとどまっている。新しい技術の習得等を含めたこれら関係職員などの研修の必要性は、1966年当時と比較して、決して低くなっておらず、むしろ高まっているといってよい。

1976年9月現在の研修受講生は246名で、別表のように全都道府県におよんでいる。センター発足後では、都道府県職員が4割、市町村職員が3割、その他は教員等となっている。現在行っている研修課程は大きく一般研修と専門研修にわけられている。一般研修は、発掘調査の比較的経験の多くないものを対象とし、発掘調査に関する一般的な基礎的知識と技術の研修で入門講座風のものであり、約40日、16名を対象としている。これに対して、専門研修は特定の題目についての専門的な知識技術の習得が目的で、一般研修修了程度の経験を有するものを対象としている。1975年度は、遺跡測量(40日12名)と遺物整理(40日16名)の両課程があり、1976年度は、さらに遺跡調査と分布調査の2課程を増設している。これらの専門研修では、例えば遺跡測量課程では、測距・測角・水準の基礎的実習から三角・トランバース測量、さらには天測や選点造標といったものまで、きわめて実戦的な内容で、さらに新しい写真測量の文化財への応用技術も含まれており、この研修によって発掘調査の記録に際しての測量をほぼ完遂できる技能を習得できるようになっている。

幸いにしてこれらの研修はこれまで好評だったが、今後はさらに専門研修の充実と研修課程の多様化をはかり、埋蔵文化財保護の強化充実に役立たせていくと企図している。(田中 琢)

研修受講者
数（1976.9
現在）

(四中 五)

大和条里の計測(続)

昨年度にひきつづき、当研究所は「大和における条里条坊の復原的研究」というテーマで、文部省科学研究費(一般研究A)の助成をうけたので、以下第2年度の成果を簡単に報告する。本研究の参加者は、狩野久(代表)、横山浩一、細見啓三、鬼頭清明、伊東太作の5人で、図上計測は木全敬蔵がたすけた。なお本研究により作成した図化範囲は、平城・藤原両京を結ぶ下ツ道沿いに限られているため、大和条里全域の検討には、県内各市町村作成の1/2500地形図を採用した。

1. 図上で検出した条里地割をもとに、1坪の長さを4657例について計測した結果、100m未満のものもあるが、大部分は100mから120mの間にはいり、そのなかで、東西辺、南北辺とともに、108m～110mのところに頻度曲線のピークがくる。従来からも1坪の大きさについては、このような数値が指摘されてきたが、計測例の多さと、それが精密地形図上における計測であるという点で、上記の結果は今後の条里研究の基礎数値になろう。

2. 条里線の方位の検討は今後充分に行われなければならない課題であるが、路東三里と四里の界線方位が、國土座標方位に対して、 $0^{\circ}23'$ 西偏している。昨年の報告で、下ツ道東限線、路西一里の5坪目の方位が、それぞれ $0^{\circ}21'34''$ 、 $0^{\circ}21'12''$ 西偏していることを述べたが、これらと同様の傾向をもつものとして注目される。同時にまた、下ツ道から東に遠ざかるにしたがって、偏差値が若干大きくなるという微妙な差異が、大和条里の施行の始点にかかる重要な問題をはらんでいるようにおもわれ、今後の検討課題としたい。

3. 一方東西線の方位は、横大路付近の京南第24条線で計測すると、路西では座標方位にはぼのっているのに対して、路東で $0^{\circ}37'$ 北偏するという結果がえられた。路東と路西のこのような大きな差異がなにを意味するかは明らかでないが、充分注目すべき事柄のようにおもわれる。なお路東の南部での上記のような東西線の方位は、前項の南北線方位の偏差値と相関連したことであることはいうまでもない。

4. 平城京南辺のいわゆる特殊条里は、北から第4坪の南限線(東西線)の方位が、 $0^{\circ}14'$ 北偏で下ツ道と直交すること、1坪の東西幅の平均は、京南一般条里よりやや短い106.6mであるのに対して、南北辺の長さは、1坪目100.9m、2坪目110.5m、3坪目108.8m、4坪目108.4mと不揃いである。この地域の条里施行時期は、別途に考えるべきであろう。

5. 今年度においても大和条里関係遺跡の発掘調査が、二三の地域で行われたが、検出した溝・河道などの条里遺構の方位が、現存の条里線と一致するものと、大きく異なるもののあることが注意された。

最後に、本研究で作成した地形図(1/1000)は、中城・番条・伊豆七条・馬司・中・南八条・二階堂・宮堂・嘉幡・西嘉幡・庵治・溝幡・唐古・石見・鍵・八尾・阪手・田原本・南阪手・秦之庄・笠縫・多・西垣内・新口の24面である。

(狩野 久)

在外研修成果報告

—ドイツと北欧をめぐる—

1975年9月11日から11月10日まで、文部省在外研修生として、ヨーロッパ7カ国をめぐった。ドイツ連邦共和国で1カ月過したほかは数日間づつの短期滞在である。

ドイツ連邦共和国では、ハイデルベルク大学（ミロイチチ教授）、ハンブルク大学（フライ教授）、ケルン大学（リューニク教授）、フランクフルト考古学研究所 ローマニゲルマン委員会（シェーベルト博士）で、学史、型式学、土器・石斧・石礫、埋納遺物などについて学び、文献涉獓にはげんだ。また各地の博物館では、展示方法を学ぶ点も多かった。ケルンで開催中の、「古い世界の新しい姿」展は、1950年代の重要な発見遺物を網羅すると同時に、現代ドイツ考古学の研究方法を解説し、埋蔵文化財壊滅の危機をうたつえることにも意を尽しており、その姿勢に感銘をうけた。フライ教授のすすめで、ビュルツブルクの考古学協会大会におもむくと、出席者名簿に名があがっており、懇親会での委員長挨拶の中でも紹介をうけるなど、予期せぬこともあります。ヘルベルト＝キューン博士は多くの考古学者と知りあうことができた。

ドイツ民主共和国では、ベルリンの D.D.R. 科学アカデミー（キッタ博士）、ハツレ博物館（マティアス氏）、マルチンニルター大学（シュレッテ教授）で勉強した。中石器時代土器として日本でも知られている灯心草土器が新石器時代後半にぞくすること、青銅器時代のロクロ土器なるものが、じつは粘土帶積み上げ法によっていることを確め、 ^{14}C 年代ほか多くの問題について知識・意見を交換した。

オーストリアでは、ウィーン大学（ビチャニ教授）、自然史博物館（メリヒャー博士）をたずね、ハルシュタット遺跡の岩塩坑の壁をなめ、ザルツブルクのモーツアルト生家を訪れて、しばしがんばりふけった。

デンマークでは、1970年に来所した B. クリストセン博士のお世話になり、国立博物館では、展示方法を記録したほか、トムセンの『北欧古代学入門』をめぐる疑問を解決し、彼の墓に詣でた。またライレの実験考古学農場を訪問した。スウェーデンでは、遠東博物館（ヴィルギン博士）の展示方法を記録し、モンテリウスの初期の文献を受贈し、墓参した。オランダでは、グローニングの生物考古学研究所（ウォーターボルク教授）を訪問した。イギリスでは、新石器時代を定義した原典、ラボックの『先史時代』の初版をみることができた。また学史にくわしいダニエル教授（ケンブリッジ大学）にトムセン英訳に訳者の付加が多いことを報告した。

今回の渡欧は、ハンブルクで高価なコーラを飲まされるなど苦い経験もあったが、ヨーロッパの風土・人間に直接せっすることができた喜びは、学問的収穫にも増して大きい。

なお、西ベルリンのドイツ考古学研究所、ハイデルベルク大学、ケルン大学、マインツのローマニゲルマン中央博物館、東ベルリンの D.D.R. 科学アカデミー、マルチンニルター大学、コペンハーゲン大学、ケンブリッジ大学では、持参したスライドによって日本先史時代概説、飛鳥～平城宮概説を行い、欧文による紹介の必要性をうながされることもしばしばであった。

（佐原 真）

公開講演会要旨

石器づくりの技術 道具をつくることによって他の動物と区別される人類は100万年の歴史のなかで、石どうしを打ち合せて割る技術とともに、石より軟らかい骨角ハンマーを用いる技術、たがねによる技術、押し剥ぐ技術を編みだす。

二上山産サスカイトを鹿角製ハンマーで打ち缺いて長さ18cm、幅6cm、厚さ1.2cmの薄身な槍を完成できた。軟質ハンマーのねばりが薄く、奥深く剥ぎってくれるためである。

鹿角をたがねとして石を割る実験を試み、幅4.5cm、長さ18cmの石刀を得た。サスカイトも石理にしたがえば縦長の剥片を剥ぐことができるることを証明できた。横長の剥片を生ずるのがこの石材の特質とみたのは誤りである。押し剥ぐ技術では弥生時代の鎌に優れた製品があるが、硬く、施しにくい石材である。

(松沢亜生)

古代住居再現 近年の発掘で得られた遺構や遺物——特に建築部材——を直接資料として古代の住居の復原を試みた。講演会では、1. 胡桃館遺跡(秋田県)、2. 古照遺跡(愛媛県)、3. 不動堂遺跡(富山県)を中心とりあげ、1では地上1m余も残存する部材から平安時代の板校倉住居を、2では壁としての材から建築部材のみを取り出し弥生時代の高床建物を、3では巨大な縄文時代の竪穴住居について、それぞれの復原過程をのべ復原図や復原模型を示した。さらに、今までの同種の復原結果と比較検討し、工法的に鮮明になった部分についても言及した。

なお、個々の成果については、それぞれの発掘報告書で詳述している。 (細見啓三)

海住山寺本堂壁画について 現在海住山寺本堂の須弥壇両側に對面して置かれている十一面觀音來迎図と補陀落山淨土図の両板絵は、文明5年繪師加賀守の製作になることがほぼ確認できる。繪師加賀守については若干の問題を提起した。この両板絵は同形同大で、來迎壁か衝立屏風の表裏であったと考えられる。來迎図は聖衆を伴って往生僧のもとへ大海原を渡る対角線構図をなしており、南都系の獨尊來迎図と異なり、むしろ阿弥陀廿五菩薩來迎図と近似している。一方淨土図は往生者達が登る山の頂に樓閣淨土を描き、むしろ春日曼荼羅などの垂迹曼荼羅と通ずる。このように複雑な絵画史的系譜から成立した両板絵は室町時代の觀音信仰の所産としての特色を備えているといえよう。

(百橋明徳)

韓窓の実用と祭祀 窓形土器は、6世紀代に移入され、はりつけ庇式・一連庇式と仮称する2つの系統をもった。両系統の窓は、製作手法を異にするのみならず、組合せになる釜の形態や釜の有無にも変化がある。一連庇式の窓については、分布が畿内とその周辺に限られ、ミニチュア製品がみとめられない。はりつけ庇式窓の総年的特色は、庇の形態によくあらわされる。窓形土器は、文献にいりところの韓窓にあたり、祭にさいして飯・酒・餅などを調製するのに用い、常食の調理とは別の場所で使用された。その祭は、神祭を主としながらも、奈良時代においてすでに仏教的供養や儒教の祭にまで応用されている。当初における韓窓の日本への定着は、「忌火」の觀念とのかかわりによるものらしい。

(植田孝司)

調査研究彙報

護國寺本諸寺縁起集の研究 美術工芸・建築・歴史・考古の各部門の協力によって、その逐語的かつ総合的な研究をしようとするものである。1975年度は「招提寺建立縁起」より「勝尾寺縁起」の半ばまでの検討を了えた。

美術工芸研究室

薬師寺金堂銅造薬師三尊像調査 薬師三尊像台座模造に先立って現状調査を文化庁の依頼で行った。調査は本体及び台座で、表面の情況、鋳造技法などで多くの新知見を見えた。表面では懸装の左寄りに3ヶ所にわざかに鍍金が認められ、他の金色の部分はいずれも後世の金箔であること。像表面の光沢は毎年12月に行われるお身ぬぐいの際に付着した異物（恐らく漆粉質）のためであることなどである。鋳造技法では、本体の頭頂（肉髻部）に鉄錐があり、恐らく鋳造の際の鉄心を通した部分。或は主要な構造の痕と考えられ、また頭部から胸にかけての部分が大幅に鉄錐がれることも確認された。

仏教説話画の研究 胎因果経・法華經曼荼羅等を中心に資料を収集し、わが国における仏教説話画の変遷について研究を進めた。

奈良県及び周辺の文化財調査 奈良県円成寺、滋賀県松尾寺等の那刻の調査、京都府南山城地区の文化財調査等をおこなった。

歴史研究室

東大寺文書調査 文化庁よりの委嘱によるもので、1974年度からの継続調査である。未収巻文書第1部（寺籍）第11（裡庄）より第24—720（裡庄）までの調査を行った。また写真撮影については第1部第1—163より第11—41までを完了した。また寺外流出の東大寺文書についても資料収集をした。

西大寺典籍古文書調査 従来よりの調査の継続で、8函の調査を完了した。また騎獅子文殊像（重文）納入の大般若経等の写真撮影を行った。6月、12月

仁和寺典籍古文書調査 従来よりの調査の継続で、仮収納古文書ならびに塔中蔵階下収納の典籍類（主として版本）を調査した。3月

醍醐寺典籍古文書調査 第417函収納の紙背文書類・江談抄（重文）等の調査ならびに写真撮影を行った。8月

中宮寺典籍古文書調査 中宮寺所蔵の全典籍・古文書を調査して目録を作成し、また主要なものは写真撮影した。2月、3月

その他の調査（依頼によるもの）

石山寺 石山寺一切経・聖教調査 石山寺よりの依頼によるもの（調査責任者：嵯峨美術短期大学学長 佐和隆研氏）。8月、12月

興福寺 春日版木調査 文化庁美術工芸課の調査に協力。4月、10月

調査研究案報

東寺 観智院聖教調査 京都府立総合資料館が実施の調査に協力（文化庁補助金による古文書等緊急調査の一つ）。9～10月、3月

大覚寺 大覚寺文化財総合調査 文部省科学研究費総合研究「大覚寺文化財の総合調査」（研究代表者：佐和隆研氏）による。8月、12月、3月

高山寺 典籍古文書調査 岐阜文化財団研究費による共同研究（代表者：東京大学 塚島 勝氏）。7月

建造物研究室

奈良井宿の調査 伝統的建造物群保存対策研究の一環として、前年度に引きつづき1975年度も木曾奈良井宿の町並とその歴史的環境の調査を実施した。成果は学報にまとめて刊行した。

今井町並調査 1968年度から1971年度にかけて今井町の民家調査を行ったが、報告書をまとめにあたり、各家々および道路の関係を調べ、町全体の平面図を作成する資料をつくった。

（細見・福田）

徳島県美馬郡一字村民家調査 刀山地の北斜面に位置する一字村には棟札をもつ古い民家の存在が村史等で知らされていた。享保5年から明治20年にいたる間に建築された13件を11月に調査した。間取は小規模な家は横二間取、中規模な家は中ねま三間取で、時代による間取の変化は少いが、構造形式は変化が著しく、18世紀後半以後、柱の上半部をこきおとして横架材を貫通する構法が発達する。代表的民家として、葛籠家（享保5年）、樋地家（安永3年）、下木家（安永10年）などがある。

（宮沢）

秋山郷民家移設調査 国立民族学博物館の展示のために、長野県秋山郷から中門造の民家を移設することになり、これに協力して、4月～6月に解体と復原調査を実施した。この民家は19世紀初頭の建築になるもので、改造が少なく保存状況は良好であった。

（宮沢・藤村）

天理市の建築調査 社寺27件、民家90件の調査を行った。主な社寺建築としてつぎのようなものがある。

1 小規模な寺社建築

件 名	所 在	規 模	時 代	備 考
伴栄神社境内御陣堂	南六条町	一方一間 宝形造	室町初期	
三十八所神社 本殿	合馬町	一間社春日造	室町中期	
春日神社 本殿	岩屋町	一間社春日造	桃山	

2 規 模 の 大 き い 清 土 系 本 堂

念佛寺 本堂	中山町	五間堂、入母屋造、瓦葺	享保頃	
蓮乗寺 本堂	丹波市町	五間堂、入母屋造、瓦葺	寛延2年	

3 山間部の簡素な堂

下之坊 本堂	福住町	三間堂、寄棟造、草葺	室町	
--------	-----	------------	----	--

つぎに民家では、四間取ではなく、前座敷三間取が農家の間取としてむしろ一般的であったことが知られた。主な民家として、森崎家（巡崎町）四間取 宝永3年、久保家（下山田）五間取寛政7年頃、上田家（九条町）前座敷三間取 19世紀、などがある。また、幕末から明治初年にわたる大きい民家が多数残り、大和棟及び瓦葺農家の発展状況が明らかになった。

古い姿をとどめる町並集落として、上街道にそう裡本・丹波市・柳本、そのほか石上・田部・二階堂菅田町などがある。
 （岡田・上野・中村）

春日大社社殿の実測 春日大社の式年造替にあたり、本殿など社殿の修理が行われた。神社建築の代表的な遺構であるので、この機会に奈良県教育委員会に協力して実測を行った。

（岡田・宮本・上野・中村）

玉置神社の調査 奈良県吉野郡十津川村の玉置神社は、玉置山の山頂にある修驗道関係の神社である。本殿は江戸時代後期の三間社入母屋造で千鳥破風及び唐破風を付け、内陣は広間で3棟の神殿を置く。社務所は吉野建の上に段をもつ書院造で江戸時代後期の建立であるが、何れも修驗関係の遺構として重要なものである。
 （岡田）

文化財建造物修理用資材需給の調査 近年、文化財建造物修理に使用する内地産松、桧皮、茅、などの資材の供給が次第に悪化しているので、文化庁では1975・76年度の予定で、今後の対策をたてるために実態調査を行っている。1975年度は桧・桧皮に関して調査を行い、建造物研究室では、高野及び吉野産桧についての調査に協力した。
 （岡田）

桂離宮建築調査 桂離宮御殿の解体修理に伴う事前調査を昨年度に引継ぎ宮内庁に協力して行った。壁土の産地及びその施工職人の現況、御殿使用木材の材種及び産地等、修復に必要な技術面の検討を主として調査した。
 （鈴木）

平城宮跡発掘調査部

内裏検討会 調査部では、1974年度から宮内の中心遺構である2つの推定内裏の性格を解明すべく、部員全員および飛鳥藤原宮跡発掘調査部等からの参加のもとに検討集会を行っている。1975年度に行なった集会はつぎの2回である。7月 報告「第1次内裏の変遷」黒崎直、「第1次内裏地城出土の木簡」狩野久。1月 報告「第2次内裏地城出土の瓦」森郁夫、「第2次内裏地城出土の土器」吉田恵二。

金属製品の保存処理と修復 金属器の保存と修復について、今年度はつぎのような調査研究を行った。香川県久本古墳出土銅鏡一式、新潟県宮口古墳出土鐵刀等5点、石川県辰ノ口茶臼山古墳出土鐵器一括、福井県若狭国分寺出土金銅水經一括、鳥取県伯耆郡々方出土鋤先5点。

石木遺跡出土木製品の調査 佐賀県石木遺跡から出土した古墳時代の木製品について実測した。農具・工具・鞍などからなる豊富な内容をもつ。3月
 （黒崎・菅原・毛利光）

竹ノ下遺跡出土木製品の調査 愛媛県松山市竹ノ下遺跡出土の木器について、実測調査を行っ

調査研究会報

た。農具・工具・労物など豊富な内容をもつ5世紀末の遺物であり、とくに直弧文風の文様を刻した獸形柄頭は貴重な資料である(掲図)。3月 (黒崎・山本)

八代神社所蔵神宝の調査 昨年度にひきつづき、三重県島羽市神島に所在する八代神社の神宝について、2回目の調査を行った。今回は古墳時代から平安時代にいたる銅鏡その他金属具、土器、施釉陶器などの実測と写真撮影を実施。10月 (佐藤・金子・吉田・西・井上)

山陰地方出土瓦の調査 島根県倉吉市立博物館で開催された「山陰の古瓦展」を契機に、山陰地方出土瓦の調査を行った。畿内寺院の影響をうけた瓦当文様や、山陰地方独特の文様があり、山陰地方における造瓦の様相を知りえた。7月 (森・岡本・須藤・山崎)

美濃国分寺跡環境整備 大垣市の依頼により、発掘調査で明らかになった塔・中門基壇造成工事の基本計画および指導監督を行った。1975年4月～76年3月 (牛川・田中)

森反射炉の写真測量 今年度は、反射炉修復方法を検討するための予備調査である。反射炉の傾斜・たつみ・沈下・ふくらみ・移動の経年変化をみるためにボルトを設置し、写真測定を行い、その指導監督をした。1975年4月～76年3月 (牛川)

埋蔵文化財センター

出雲國分尼寺の発掘 國分尼寺の範囲を確認するための第3次調査。主要な堂塔らしい遺構を検出するが、保存がわるく全体をしりえなかった。ただ、尼寺の範囲についてはおよその見当をつける資料をえた。島根県教育委員会。8月 (植田)

美濃国分寺の発掘 整備事業に先立ち、塔・回廊を発掘。塔基壇は一辺19.2m、高さ1.5m、初重平面は3.6m等間の3間4方であった。南面西回廊の一部を掘り、基壇幅5.2mの両側に溝を設けることが判明した。大垣市教育委員会。7月～8月 (八賀・木下・甲斐・千田・北野・井上)

伯耆国府の発掘 国府推定地の内郭とみられる東西110m、南北130mの長方形区画の西半部を発掘し、正庁など官衙遺構を検出した。時期は奈良時代から平安時代におよぶ。倉吉市教育委員会。9月～11月 (宮沢・佐藤・岩本主・須藤)

肥前国府跡推定地の発掘 従来肥前国府については、佐賀県佐賀郡大和町を中心に数カ所の推定地があり、その確認のため調査。今回の調査地点では積極的な徵証がえられず、繼續して調査を行うことになった。佐賀県教育委員会。10月～1月 (田中誠・松沢・工業・西村)

志賀奥道跡の発掘 1974年に島根県鹿島町志賀中央で、一括出土した銅鋤2個・銅劍7本の埋納状況を調べるために発掘調査を実施した。埋納穴の形状を確め、残っていた銅鋤・銅劍の破片を探集した。遺構は急斜面にあり崩壊の危険があるので、埋納穴を樹脂加工してとりあげた。鹿島町教育委員会。12月 (佐原・沢田・秋山)

木戸窯跡群の磁気調査 多賀城創建期の瓦窯群。遺跡保存のためプロトン磁力計による遺構確認を行い、磁気異常の分布から数基の窯跡を新たに確認した。宮城県教育委員会。5月 (岩本主)

宮の前廃寺の発掘 国指定の史跡について環境整備を行うため、塔と金堂の位置と規模を確認

調査研究登録

- する調査を行う。塔跡における奈良時代の埴積基壇の保存は、とりわけ良好であった。福山市教育委員会。1月 (西村)
- 伊丹庵寺保存管理計画策定委員会 国指定史跡伊丹庵寺について、保存活用のための保存管理計画策定のため、指導を依頼されたもの。伊丹市教育委員会。1月 (田中輝)
- 斎王宮跡発掘調査検討会 斎王宮の範囲を確認する発掘調査が1973年度から実施され、今年度も継続している。遺跡は奈良時代から鎌倉時代にかけて存続し、その遺構遺物についての性格を検討した。三重県教育委員会。5月 (横山)
- 開陽丸遺跡 戊辰の役の際、座礁沈没した徳川幕府の軍艦開陽丸の沈没地点における水中調査。本年度は5ヶ年計画の第1年度で、残存状況等を確認するための予備的な調査を実施した。北海道江差町教育委員会。6月 (田中輝)
- 大山廬寺発掘打合せ会 史跡指定地が塔跡に限られているため、他の堂宇跡を確認し、追加指定するための調査。塔跡周辺の調査と地形図の作成を行い、今後継続して発掘する予定。小牧市教育委員会。8月 (田中輝)
- 舟橋遺跡出土遺物の調査 大阪府舟橋遺跡出土の弥生土器を中心とする土器群について実測、写真撮影などを行う。考古学関係の所員が年間を通じて実施。
- その他 以上のような調査に対する発掘および助言のほか、つぎのような遺跡についても指導などの協力を行った。平林遺跡(鳥取県、4月)、十三宝塚遺跡(群馬県、5月~8月)、伊場遺跡(静岡県、10月~12月)、鳥浜貝塚(福井県、10月)、御経塚遺跡(石川県、11月)、草戸千軒町遺跡(広島県、12月)、長越遺跡(兵庫県、12月)、国道9号バイパスに関する埋蔵文化財調査打合せ(京都府、1月)、馬形埴輪などの復原に関する助言(鳥根県、1月)、岩橋千塚古墳群整備(和歌山县、2月)、稻原庵寺(岡山県、2月)

松山市竹ノ下遺跡出土獸形納頭実測図

奈良国立文化財研究所要項

1 事業概要

1 研究普及事業

公開講演会

(1) 1975年5月17日 第37回公開講演会

「石器づくりの技術

——サスカイト製石器の製作技術を中心として——」

松沢 蓮生

「古代住居再現」

細見 邦三

(2) 1975年11月15日 第38回公開講演会

「海住山寺本堂壁画について

——十一面觀音來迎図の一作例——」

百橋 明穂

「韓窓の実用と祭祀」

稻田 孝司

現地説明会

(1) 1975年7月5日 大官大寺中門跡発掘調査現地説明会

甲斐 忠彦

(2) 1975年8月2日 藤原宮北門跡発掘調査現地説明会

西 弘海

(3) 1975年8月30日 平城宮跡推定第一次内裏東北部発掘調査現地説明会

川越 俊一

(4) 1975年12月6日 平城京左京三条二坊発掘調査現地説明会

田中 哲雄

(5) 1976年3月6日 平城宮跡推定第一次内裏東半部発掘調査現地説明会

中村 雅治

平城宮跡資料館・覆屋公開

(1) 春季特別公開

1975年4月27日～5月5日 見学者4,815名
秋季特別公開

1975年10月25日～11月9日 見学者12,162名

(2) 見学者数

区分	資料館	覆屋	計
1975年	37,279	46,675	83,954
累計*	177,416	379,589	557,005

*資料館は1970年度、覆屋は1968年度以降

2 1975年度文部省科学研究費補助金による研究

種別	研究課題	研究代表者	交付額
一般研究(A)	大和における条里里坊の復原的研究	狩野 久	9,100
一般研究(D)	木簡から見た奈良時代古文書の基礎的研究	横田 拓実	290
〃	古墳時代木製品の集成的研究	黒崎 直	300
歴史研究(A)	敦煌壁画における仏教説話画の展開	百橋 明穂	330
〃	古代の呪術とその遺物	金子 淑之	280
海外学術調査	海外学術調査の成果の整理・活用等に関する調査研究(考古・美術関係)	横山 浩一	570

3 飛鳥資料館の運営

概要

1975年3月15日に開館した飛鳥資料館は観覧者年間約10万人を数え、構内も着実に整備されるなど順調な運営を続いた。

開館後1年間のデータで見る限りでは、石舞台への入場者の約30%が資料館に入館しており、まだ知名度の低さを示している反面、学校関係の団体観覧の申し込みは順調に増加しつつある。5月3日(土)と5月4日(日)の両日全入場者に対

しアンケート調査を行った。回答者数887、(回収率78.2%)。年令・職業・居住地・飛鳥へ来た回数、資料館を何で知ったかの各項目と感想の記入を求めた。また11月からロビーに希望・感想を記入する設備を設けた。

展示

第1展示室 常設展示(1974年度と同じ)

第2展示室 特別展示「飛鳥の寺院遺跡

—最近の出土品—」

(1975.9.22～76.3.30)

奈良国立文化財研究所要項

普及

玄関正面のインフォメーションルームに、飛鳥関係図書を開架図書として書棚に並べ一般観覧者の参考に供し、学芸室職員が、入館者の質問に応じるインフォメーションサービスを行った。

展示関係のカタログとして『飛鳥の寺院遺跡1—最近の出土品』を刊行した。

入館者数

(1975.4.1~1976.3.31 開館日数306日)

	普通観覧	団体観覧	有料計	無料	合計
一般	47,187	27,064			
小・中学生	6,674	12,779	93,704	4,714	98,418
計	53,861	39,843			

資料の購入等

購入 伝百濟大田附近出土卑蓮華文軒丸瓦、奈良市山巾庵寺単弁重弁蓮華文軒丸瓦、扶余弥勒寺蓮華文軒丸瓦、西安寺蓮華文軒丸瓦、各1個

模造 製作 重要文化財天人文軸(岡寺所蔵)1枚、重要文化財筑前国戸籍(文化庁保管)1幅、猿石(吉備媛王墓所在)4個、瓦(岡寺軒平瓦・慈光寺軒丸瓦)2個

4 埋蔵文化財センターの研修・指導

研修

地方公共団体において埋蔵文化財保護行政を担当する者に対して、埋蔵文化財の発掘調査及び保存についての専門的知識と技術について研修を行い、埋蔵文化財の保護に資することを目的として、次の研修を実施した。

- (1) 昭和50年度埋蔵文化財発掘技術者一般研修
1975年7月21日~8月30日 (参加者15名)
- (2) 昭和50年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(遺跡測量課程)
1975年10月20日~11月29日 (参加者12名)
- (3) 昭和50年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(遺物整理課程)
1976年1月19日~2月28日 (参加者16名)
- (4) 研修員受入
阿部 恵 (宮城県教委文化財保護課)
1975年5月1日~7月22日
前井 一二 (富山県立富山南高校教諭)

1975年8月1日~9月5日

田辺 勝美 (東京大学東洋文化研究所助手)

古山 学 (〃〃 技官)

千代延恵正 (〃〃〃〃〃)

1976年1月19日~1月31日

村山 誠夫 (東北歴史資料館技師)

1976年1月12日~2月10日

調査指導

(北海道) 開陽丸遺跡、(岩手) 見分森自然公園内遺跡、(宮城) 木戸窓跡群、多賀城跡、(群馬) 十三宝塚遺跡、(石川) 御膳塚遺跡、(福井) 鳥浜貝塚、(岐阜) 美濃国分寺跡、(静岡) 伊場遺跡、(愛知) 大山寺跡、(三重) 斎王宮跡、(和歌山) 岩橋千塚古墳群、(兵庫) 長越遺跡、伊丹庵寺跡、(鳥取) 伯耆国守跡、(島根) 出雲国分尼寺跡、志谷奥遺跡、富田川河床遺跡、(岡山) 平川林遺跡、植原庵寺跡、(広島) 下本谷遺跡、草戸千軒町遺跡、宮の前庵寺跡、(佐賀) 肥前国守跡。
その他、埋蔵文化財取扱い研修会(群馬)

埋蔵文化財ニュース刊行

第1号 埋蔵文化財調査報告一覧 (1973年度刊行分) 8月20日刊

第2号 埋蔵文化財発掘関係統計 (1972年度分) 12月15日刊

第3号 都道府県における遺跡分布調査の現況 3月1日刊

5 その他

委員会等

平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会

(1) 総会 1975年5月15日・16日

於平城宮跡資料館

(2) 平城宮跡整備基本計画策定に関する小委員会 1975年9月27日 於平城宮跡資料館

(3) 平城宮跡整備基本計画策定に関する小委員会 1976年1月23日 於平城宮跡資料館

(4) 平城宮跡整備基本計画策定に関する小委員会 1976年3月19日 於平城宮跡資料館

第2回飛鳥資料館運営協議会

1975年5月9日 於飛鳥資料館

第1回木簡研究集会

1976年1月13日・14日

於平城宮跡資料館

奈良国立文化財研究所要項

外国出張

鈴木嘉吉 大韓民国における考古学的発掘調査の体制と方法の調査研究のため大韓民国へ派遣された。

1975年 6月29日～同年7月6日

佐原 真 文部省在外研究员としてドイツ連邦共和国・ドイツ民主共和国・オーストリア・デンマーク・オランダ・連合王国に派遣された。ヨーロッパにおける出土遺物の分類整理及び分布論・年代論並びに歴史博物館の展示構成方法の研究のため。

1975年 9月11日～同年11月10日

協力事業等

- (1) 特別史跡高松塚古墳の保存施設設置工事並びに壁画修復に関する調査に、随時文化庁に協力した。なお保存施設施工式が1976年3月29日に行われた。
- (2) 文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており、1972年度からは当研究所が文化庁から支出委託を受けて買収業務を担当しているが、1975年度の状況は下記の通り。

区分	面積	購入額
1975年	31,790.98m ²	515,397,354 ^[1]
国有地合計	83,932.97	1,255,900,100

大歳省より移管の1,404.92m²を含む。

図書及び資料

図書 32,766冊

区分	種別	購入	寄贈	計
1975年	和漢書	900	936	1,836
	洋書	209	17	226
累計	和漢書	21,656	8,856	30,512
	洋書	1,950	304	2,254

写真 134,923点

(1975年度末現在)

所内報の刊行

研究所の規模の増大とともに、所員が研究所の動向や事業の状況を常時把握しうるよう6月から月1回所内報を刊行することとし、年度末までに7号を刊行した。

第3収蔵庫の完成

74年度着工した第3収蔵庫は75年度に入り完成し、7月に遺物整理および保存科学関係の諸室が庫内に移転した。また埋蔵文化財センターも仮にここに移転した。次いで3月、作業員控室が付設された。

研究成果刊行物

1975年度刊行物

名 称	担 当 者
学報第25冊 平城京左京三条二坊	町田・岩本(主)・中村・加藤・船田・金子・山本・佃
学報第26冊 平城宮発掘調査報告書	鈴木・佐原・狩野・宮沢・町田・森・小笠原・西・吉田・細
学報第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告書	横山・河原・鬼頭・木下・福田・猪熊・安達・八賀・田辺・宮沢・石丸・水野・前沢
学報第28冊 研究論集Ⅲ	黒崎・猪熊・森・町田・山本
学報第29冊 木曾奈良井町並調査報告	鈴木・岡田・宮沢・細見・宮本・上野・中村・松本・福田
史料第10冊 日本美術院彌彥等修理記録	田中義恭・星山・百橋
基準資料第3冊 瓦編3解説	平城宮跡発掘調査部考古第三調査室
概報他 奈良県五条の町並	岡田・宮沢・宮本・上野・中村・松本
異人館のあるまち神戸	岡田・牛川・宮沢・宮本・上野・中村・松本
阿波の民家	宮沢・天田・藤村
西隆寺発掘調査報告	狩野・村上・里崎・甲斐・岩本(主)・藤原・菅原・東野・今泉・岡本・西・小笠原・吉田
平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報	田中(哲)・松本・岡本・川越・毛利光・狩野・綾村・佃
平城京左京八条三坊発掘調査概報	佐藤・田中・宮本・綾村・須藤・川越・山本・狩野・佃

奈良国立文化財研究所要項

前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名 称
1954	第1冊 仏師連慶の研究
	第2冊 修学院離宮の復原的研究
1955	第3冊 文化史論叢
1956	第4冊 奈良時代僧房の研究
1957	第5冊 飛鳥寺発掘調査報告
1958	第6冊 中世庭園文化史
	第7冊 興福寺食堂発掘調査報告
1959	第8冊 文化史論叢Ⅱ
	第9冊 川原寺発掘調査報告
1960	第10冊 平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告
1961	第11冊 院家建築の研究
1962	第12冊 巧匠安阿弥陀院快慶
	第13冊 寝殿造系庭園の立地の考察
	第14冊 レースと金匱寺塔に関する研究
	第15冊 平城宮発掘調査報告Ⅱ 官衙地域の調査
1963	第16冊 平城宮発掘調査報告Ⅲ 内裏地域の調査
1965	第17冊 平城宮発掘調査報告Ⅳ 官衙地域の調査
	第18冊 小畠遠州の作事
1967	第19冊 藤原氏の氏寺とその院家
1969	第20冊 名物製の成立
1971	第21冊 研究論集Ⅰ
1973	第22冊 研究論集Ⅱ
1974	第23冊 平城宮発掘調査報告Ⅴ 平城京左京一乗三坊の調査
1975	第24冊 高山一町並調査報告一

奈良国立文化財研究所史料

年度	名 称
1954	第1冊 南無阿弥陀仏作善集(複製)
1955	第2冊 西大寺觀音傳記集成
1963	第3冊 仁和寺史料 寺誌編Ⅰ
1964	第4冊 俊乗坊重原史料集成
1966	第5冊 平城宮木簡 1 國版
1967	第6冊 仁和寺史料 寺誌編Ⅱ
1969	第5冊 平城宮木簡 1 解説(別冊)
1970	第7冊 唐招提寺史料 1
1974	第8冊 平城宮木簡 2 國版・解説
1975	第9冊 日本美術院像等修理記録 1

奈良国立文化財研究所基準資料

年度	名 称
1973	第1冊 瓦編 1 解説
1974	第2冊 瓦編 2 解説

V 機構・定員

機構の改正

1975年4月2日省令改正に伴い埋蔵文化財センターに研究指導部設置。同部に遺物処理研究室新設。

定員

	指定職	行政一	行政二	研究職	計
1974年度	1	22	7	62	92
1975年度	1	23	7	65	96

(増員内訳) 庁務部 1 埋蔵文化財センター 3

(減員内訳) 平城宮跡発掘調査部 1

VI 予算(1974年度)

歳 出	910,376,633円
人 件 費	279,444,633円
運 営 費	405,558,000
事 業 管 理	4,185,000
一 般 研 究	35,098,000
特 別 研 究	2,223,000
発 掘 調 査	263,301,000
宮跡整備管理	30,377,000
飛鳥資料館運営	41,457,000
埋蔵文化財センター運営	28,917,000
施 設 費	225,374,000

VI 施設

土地 23,371m²(当所所管)春日野地区 5,126m² 飛鳥資料館 16,902m²資料館地区 1,343m²1,026,117.97m²(文化庁所管)平城宮跡地区 942,195m²(他に奈良県先行取得地71,190,066m²がある)藤原宮跡地区 83,932.97m²

建物

建 物	春日野	平城	藤原	飛鳥	資料館	計
事 務 所	797	1,820	155	152	2,924	
倉庫・収蔵庫	191	3,777	963	—	4,931	
車 庫	20	130	104	94	348	
会 議 室	40	192	—	42	274	
講 堂	109	—	—	89	198	
写 真 室	86	192	32	49	359	
展 示 室	—	360	—	648	1,008	
覆 屋・展示棟	—	1,518	—	—	1,518	
そ の 他	200	1,427	135	1,520	3,282	
計	1,443	9,416	1,389	2,594	14,842	
重要文化財 旧米谷家住宅						198
合 計						15,040

奈良国立文化財研究所要項

主要工事

(1) 施設整備

飛鳥資料館宿舎給排水工	2,125千円
第3収蔵庫改修工	15,500
飛鳥資料館宿舎周辺整備工	1,244
平城宮跡プレハブ内装工	1,600
平城宮跡プレハブ棟クーラー取設工	1,051
覆屋周辺電気整備工	1,850
飛鳥資料館宿舎周辺外取付工	1,323
藤原宮跡整理護塀体工	2,000
〃 遺物整理棟内装工	2,120
〃 キューピタル取設工	2,100

(2) 平城宮跡地等整備

平城宮跡灌水施設工	11,000千円
〃 水銀灯取設工	1,800
〃 水路整備工	1,700
平城宮跡環境整備昭和50年度第1期工	38,000
藤原宮跡地整備第1期工	2,200
〃 第2期工	18,900

(3) 建設省近畿建設局委任工事

平城宮跡第3収蔵庫	181,420千円
飛鳥資料館植栽工	22,363

Ⅱ 人事異動

(1975年4月1日～1976年3月31日)

4月1日 文化庁文化財保護部文化財鑑査官に転任	坪井 清足	会計課長に昇任	根本 栄夫	4月3日 文部技官採用	秋山 隆保
東京国立博物館総務部施設課長に転任	杉本 光司	会計課長に昇任	杉本 光司	文部技官に転任	安田龍太郎
飛鳥藤原宮跡発掘調査部長に転任	工藤 圭章	飛鳥資料館庶務室長に昇任	五十嵐春雄		
国立国語研究所庶務部会計課長補佐に転任	広瀬 二朗	4月17日 事務補佐員採用	岡本ひろみ		
文部事務官採用	西 敏	5月1日 文部省に出向（京都工芸繊維大学学生			
文部技官採用	毛利光俊彦	課長補佐に就任）前田 和夫			
土肥 孝・松本修自		6月1日 美術工芸研究室長に昇任 田中 義恭			
光谷拓実・木本敬藏		6月28日 辞職 金井 しん			
事務補佐員採用	東田道代・尖戸雅子	6月30日 辞職 岡本ひろみ			
研究補佐員採用	森 康子・泉 谷聖子	7月15日 事務補佐員採用 烏田 郁子			
赤坂さよ子・福原まり花		7月30日 辞職 中川 友子			
		8月30日 辞職 藤村 礼子			
		9月1日 埋蔵文化財センター研究指導部測量研			

奈良国立文化財研究所要項

究室に転任	亀井 伸雄
文化庁に出向（文化財保護部建造物課）	
	藤村 泉
9月30日 辞職	西 一典
10月1日 事務補佐員採用	中西千枝子
会計課課長補佐に昇任	森口 篤之
10月27日 事務補佐員採用	石田賀代子
12月20日 事務補佐員採用	石谷 幸子
12月27日 辞職	寺田千鶴子
3月30日 辞職	北野 保・栗山伸司

VII 組織規定

文部省設置法 抜萃

昭和24年法律第146号
昭和43年6月15日一部改正

第36条 第43条に規定するもののほか、文化庁に次の機関を置く。

国立文化財研究所（前後略）

第41条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行なう機関とする。

2 国立文化財研究所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都
奈良国立文化財研究所	奈良市

3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は文部省令で定める。

文部省設置法施行規則 抜萃

昭和28年1月13日文部省令第2号、昭和昭和43年6月15日文部省令第29号。

昭和50年4月17日文部省令第11号、昭和54年4月12日文部省令第6号。

昭和57年4月11日文部省令第10号、

昭和57年4月2日文部省令第13号。

第5章 文化庁の附属機関

第4節 国立文化財研究所

第2款 奈良国立文化財研究所

（所長）

第123条 奈良国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は所務を掌理する。

（内部組織）

第124条 奈良国立文化財研究所に、庶務部、美

術工芸研究室、建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2 前項に定めるもののほか、奈良国立文化財研究所に、飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。
(庶務部の分課及び事務)

第125条 庶務部に、次の二課を置く。

- 一 庶務課
- 二 会計課

2 庶務課においては、次の事務をつかさどる。
一 職員の人事に関する事務を処理すること。
二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に關すること。

四 この研究所の所掌事務に關し、連絡調整すること。

五 この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に關すること。

六 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

3 会計課においては、次の事務をつかさどる。
一 予算に関する事務を処理すること。
二 経費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四 庁舎及び設備の維持、管理に関する事務を処理すること。

五 庁舎の取締りに關すること。

(美術工芸研究室等の事務)

第127条 美術工芸研究室においては、絵画、彫刻、工芸品、書跡その他建築物以外の有形文化財及び工芸技術に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

2 建造物研究室においては、建造物に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

3 歴史研究室においては、考古及び史跡に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

(平城宮跡発掘調査部の六室及び事務)

奈良国立文化財研究所要項

第128条 平城宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、考古第三調査室、遺構調査室、計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2 前項の各室においては、平城宮跡に関し、次項から第六項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行なう。

3 考古第一調査室、考古第二調査室及び考古第三調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究並びにそれらの結果の公表を行なう。

5 計測修景調査室においては、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

6 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部の二室及び事務）

第129条 飛鳥藤原宮跡発掘調査部に、第一調査室及び第二調査室を置く。

2 第一調査室及び第二調査室においては、それぞれ藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡（藤原宮跡を除く）に関し、次の各号に掲げる事務を処理するほか、その発掘調査を行なう。

一 遺構及び遺物の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表

二 遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表

三 史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表

（飛鳥資料館）

第130条 飛鳥資料館においては、飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に関し、国民の理解を深めるため、この地域に関する考古資料、歴史資料その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に供し、あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行なう。

（飛鳥資料館の館長）

第131条 飛鳥資料館に、館長を置く。

2 館長は、館務を掌理する。

（飛鳥資料館の二室及び事務）

第132条 飛鳥資料館に、庶務室及び学芸室を置く。

2 庶務室においては、飛鳥資料館の庶務、会計等に関する事務を処理する。

3 学芸室においては、次の事務をつかさどる。

一 飛鳥地域に関する考古資料、建造物、絵画、彫刻、典籍、古文書その他の資料の収集、保管、展示、模写、模造、写真の作成、調査研究及び解説を行なうこと。

二 飛鳥地域に関する図書、写真その他の資料の収集、整理、保管、展示、閲覧及び調査研究を行なうこと。

三 飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行なうこと。

（埋蔵文化財センター）

第133条 埋蔵文化財センターにおいては、次の事務をつかさどる。

一 埋蔵文化財に関し調査研究及びその結果の公表を行なうこと。

二 埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し、地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して、専門的、技術的な研修を行なうこと。

三 埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し、地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、専門的、技術的な指導及び助言を行なうこと。

（埋蔵文化財センターの長）

第134条 埋蔵文化財センターに長を置く。

2 前項の長は、埋蔵文化財センターの事務を掌理する。

（埋蔵文化財センターの内部組織）

第135条 埋蔵文化財センター内に、教務室及び研究指導部を置く。

（教務室の事務）

第136条 教務室においては、研修の実施に関する事務を処理するほか、埋蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。

（研究指導部の三室及び事務）

第137条 研究指導部に、考古計画研究室、遺物処理研究室及び測量研究室を置く。

2 考古計画研究室においては、第133条各号に掲げる事務（他の室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

3 遺物処理研究室においては遺物の処理に関し、第133条各号に掲げる事務をつかさどる。

4 測量研究室においては、埋蔵文化財の測量に関し、第133条各号に掲げる事務をつかさどる。

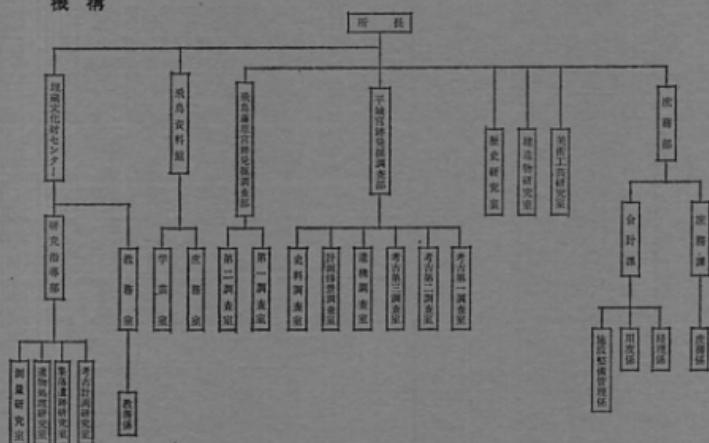
職員 (1976年8月1日現在)

所屬	氏名	官職	担当	所屬	氏名	官職	担当
	小川 修三	文部事務官 所長			鈴木 嘉吉	文部技官 官室長	古吉
	服部 栄次	文部事務官 部長			町田 章	文部技官 官室長	吉古
庶務課	音川啓太郎	文部事務官 課長			沢田 正昭	文部技官 官室長	吉古
	岩本 次郎	文部事務官 課長補佐官			菅原 正明	文部技官 官室長	吉古
	井上 政和	文部事務官 係長			山本 忠尚	文部技官 官室長	吉古
	西 雄	文部事務官 人事課員			毛利 光俊彦	文部技官 官室長	吉古
	忠 利二	文部事務官 資務課員			小林 謙一	文部技官 官室長	吉古
	木寅 忠雄	文部事務官 資務課員			八幡 幸雄	文部技官 官室長	吉古
	森田 光治	文部事務官 資務課員			佐藤 駿	文部技官 官室長	吉古
	岡田 扶桑	文部事務官 資務課員			吉田 駿	文部技官 官室長	吉古
	稻本 安臣	文部事務官 人事課員			黒田 勝	文部技官 官室長	吉古
	八幡 宮本	文部事務官 人事課員	(門真田任)		土肥 井上	文部技官 官室長	吉古
務務課	宮宣代	文部事務官 人事課員			所長室付	文部技官 官室長	吉古
	港 暁子	文部事務官 人事課員			所長室付	文部技官 官室長	吉古
	中川かよ子	文部事務官 人事課員			図書資料科	文部技官 官室長	吉古
	杉本 光司	文部事務官 課長					
	吉田 博次	文部事務官 課長補佐官					
	高日高	文部事務官 課長補佐官					
	加藤 勉	文部事務官 経理係長					
	冬野 雅	文部事務官 人事課員					
	前川 重子	文部事務官 人事課員					
	刀谷 純子	文部事務官 人事課員					
計画課	吉田 和子	文部事務官 人事課員					
	西田 健三	文部事務官 人事課員					
	小林 雅文	文部事務官 人事課員					
	沖村 重則	文部事務官 人事課員					
	中西 建夫	文部事務官 人事課員					
	飯田 信男	文部事務官 人事課員					
	東田 這代	文部事務官 人事課員					
	石田賀代子	文部事務官 人事課員					
	日高 多夫	文部事務官 人事課員					
	渡辺 康史	文部事務官 人事課員					
美術工芸室	奥村 未儀	文部事務官 人事課員					
	沖村 和子	文部事務官 人事課員					
	田中 義恭	文部技官 室長					
	百橋 明徳	文部技官 (併任)					
	星山 晋也	文部技官 (併任)					
	星山 公夫	文部技官 (非常勤)					
	森 康子	研究室付					
	岡田 英男	文部技官 室長					
	細見 啓三	文部技官 (併任)					
	宮本長二郎	文部技官 (併任)					
建造物研究室	上野 邦一	文部技官 (併任)					
	牛川 喜幸	文部技官 (併任)					
	田中 肇雄	文部技官 (併任)					
	福山 敏男	文部技官 (非常勤)					
	福田 幸子	調査員					
	田中 稔	文部技官 室長					
	東野 治之	文部技官 (併任)					
	綾村 宏明	文部技官 (併任)					
	菅原 正明	文部技官 (併任)					
	田辺 征夫	文部技官 (併任)					
歴史研究室	金子 春峰	文部技官 (非常勤)					
	樋原 基之	文部技官 (非常勤)					
	城本きよの	文部技官 室長					
	栗谷 増子	文部技官 (併任)					
	赤坂さよ子	文部技官 (非常勤)					
	福原まり花	文部技官 (非常勤)					
	吉村 司朗	文部技官 (非常勤)					
	城本きよの	文部技官 (非常勤)					
	石川千恵子	文部技官 (非常勤)					
	池田千賀枝	文部技官 (非常勤)					

所屬	氏名	官職	担当
第一 飛鳥 藤原 宮跡 調查室	工藤由章	文部技官	長
	猪俣兼勝	文部技官	長
	甲斐忠邦	文部技官	考
	上野邦深	文部技官	建
	大畠俊正	文部技官	考
	川越重則	文部事務官	事
	岩本村田	文部技官	自動車運転
	刀谷敏博	(併任)	史古
	鬼頭清明	文部技官	古
	木下正直	文部技官	古
第二 飛鳥 藤原 宮跡 調查室	黒崎弘裕	文部技官	古
	西郷裕之	文部技官	古
	金子千田	文部技官	古
	山崎信二	文部技官	古
	松本修自	文部技官	古
調査部	小笠原好彦	文部技官	吉
	石谷幸子	事務補佐員	務真
	井上直夫	技術補佐員	古
	山田猛	研究補佐員	古
	坂田和信	研究補佐員	整理
飛鳥 資料館	九川義広	研究補佐員	事務
	新田洋	研究補佐員	施設
	宮原洋	研究補佐員	車両
	伴子修三	文部事務官	自警
	小川節之	文部事務官	監督
庶務室	森口義	文部事務官	備
	大西肇	文部技官	
	奥村誠	文部事務官	
飛鳥 資料館	刀谷登一	文部事務官	
	米田二三	文部事務官	

所屬	氏名	官職	担当
飛 鳥 資 料 館	中垣 瞳美	事務補佐員	事務
	福田 洋子	事務補佐員	事務
	島田 郁子	事務補佐員	事務
	橋垣 乾	技能補佐員	自動車運送
	春雄	技能補佐員	安修
	榎井 勉子	業務補佐員	保育
	田中 星山	文部技官	室長(併任)
	東野 治之	文部技官	彌美歴考
	西口 寿生	文部技官	古書図考
	津村 広志	文部事務官	古史古語
理 藏 室	沢尻 舜	検査員 (非常勤)	古文書
	横山 清一	文部技官	センター長
	藤田 修	文部事務官	長
	山崎 一博子	文部事務官	教務係長
	藤本 田中	事務補佐員	事務
教 育 室	琢	文部技官	務
	松沢 伸	文部技官	古
	岩本 佐原	文部技官	古
	佐山 田中	文部技官	古
	山中 達也	文部技官	古
	秋山 徳敏	文部技官	古
	工農	普通保	科学
	秋山	文部技官	量測
	木全 伊東	文部技官	測量
	西村 亀井	文部技官	測量
研 究 室	伊東 太作	文部技官	測量
	伊東 太作	主任研究官	測量

一〇六



ANNUAL BULLETIN OF NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

1976
CONTENTS

	Page
Preface	1
Research	
General Investigation of the Shin-yakushiji Temple	2
Investigation of Groups of Historic Buildings in Kōbe and Gojō	12
Reconstruction of the Kometani House of the Edo Period	16
Excavation of the Nara Palace Site and the Ancient Metropolis of Nara	18
Excavation of Wooden Materials Used in the Construction of an Eighth Century Model of a Nara Palace Building	36
On the Physical Layout of the Nara Palace Site (6)	38
Excavation of the Asuka and Fujiwara Palace Sites	42
Wooden Tablets Excavated at the Fujiwara Palace Site	51
On of the Physical Layout of the Fujiwara Palace Site (1)	53
Appropriate Exposure Conditions for Aerial Photography of Site Interpretation ..	58
Measurement of the <i>Jōri</i> Land System in Yamato Province	61
Symposia and Lectures	
Symposium for Research of Wooden Tablets	11
Open Lectures Held by the Institute during 1975	63
Reports and News	
Construction of the Third Storehouse for the Objects	
Excavated from the Nara Palace Site	40
Restoration of the Ridge-end Tile Excavated from the	
Wada Ruined Temple Site	54
The <i>Saruishi</i> Replica	56
Present Situation of the Institute's Training Program	
for Archaeological Excavation	60
Research Abroad by Affiliate of the Institute	62
Other Specific Researches and Surveys	64
Organization and Activities of the Institute	69

Published by
Nara National Cultural Properties Research Institute
Nara, 1976